フラワーナイトガール短編妄想集

イッチー団長

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

嫁の花騎士とイチャイチャするだけの短編妄想集です。

初ＳＳなので稚拙な文・表現などはどうか大目に見てやってください。

※各話につながりはありません。どこから読んで頂いても大丈夫です。

目次

クコと海で ―― 1
クコの願い ―― 4
ポーチュラカの笑顔 ―― 6
エキザカムの瞳 ―― 9
イエローパンジーの幸せ ―― 11
クコと雨の休日 ―― 14
ランタナと夏祭り ―― 17
ベッセラの気持ち ―― 20
ハツユキソウと穏やかな生活 ―― 23
ポーチュラカと夏の日 ―― 27
クコと風鈴 ―― 31
ベッセラとエキザカムと水着 ―― 34
チャノキの愛 ―― 39
クコと過去の記憶 ―― 42
クコとの出会い（前編） ―― 45
クコとの出会い（後編） ―― 50
ステラとお出掛け ―― 54
リシアンサスと秋の訪れ ―― 58
コナラとシイタケの秋の過ごし方 ―― 63
ランタナの、お菓子は爆発だ！ ―― 69
クコとお月見 ―― 73
コンボルブルスと昼のお月見 ―― 77
私が守るから ―― 81
ポーチュラカとハロウィンパーティー ―― 86

スキラの「黄金狂時代」 91
クコと秋の終わり、冬の始まり 99
コンボルブルスとこたつ 103
花騎士たちとおままごと 107
騎士団鬼ごっこ大会！ 112
無人島ふたりぼっち 121
コンボルブルスのクリスマス 127
リーダーとして 134
花騎士たちと年越し 141
コマチソウと羽根突き害虫 145
ポーチュラカのドレスアップ 151
クコと雪 156
クコと永久の誓い 159
スキラと幸運の兎 163
イエローパンジーと極寒の夜 169
クコとのマイホーム 174
ミズキと冬の夜景 180
海賊島の謎を追え（前編） 185
海賊島の謎を追え（後編） 195
笑顔の力 214
春の風 222
にんじんみたいに 227
お嬢様学園へ潜入せよ！（前編） 231
お嬢様学園へ潜入せよ！（後編） 238
夏祭りと不思議な夜 255

ヘチマの夏 ―― 260
ソヨゴと夏と雪女？ ―― 265
クコと真昼の夢 ―― 271
リクニスとお月見 ―― 275
Christmas of Santolina ―― 279

クコと海で

「団長、どう？」
試着室からクコがひょっこりと顔を出し、カーテンを開ける。
うん、とても似合っている。
「本当？　クコ、かわいい？」
ああ、とてもかわいい。
クコが着ているのは、ピンク色のワンピース型の水着だった。
クコから海に遊びに行きたいと告げられ、それならば、と水着を選びに来たのだった。今着ているのは私が選んだものだが、やはりクコの小さな身体にはワンピースが似合う。
「クコ、これにする。団長、感謝」
満面の笑みでそう言われるとこちらも嬉しくなる。クコに水着をプレゼントし、帰路に就く。
「団長、ワンピース好き？」
帰り道での唐突な質問に、どう答えればいいのか分からなかったが、
「クコ、知識あり。一般的な男性、布面積小さい水着、ビキニ、弱い。男性ホルモン、どぷどぷ」
ああ、またカガミに影響されたのかと納得する。
「クコ、身体も胸も小さい。ビキニ似合わない。一般的な男性の好み、乖離。団長、特殊性癖？」
そ、そんなことはない。それに好みも性癖も人それぞれだ。クコのようなワンピースが似合うかわいい娘が好きな男性も少なくないだろう。（ビキニも見てみたいが）
「団長、一般性癖？　なら、クコ安心」
まあ、そういうことにしておこう。
「海、楽しみ」
子供のようにはしゃぐ彼女に、私も楽しみだ、と返す。
「プカプカ、愉快！　水、冷たい、気持ちいい」
バナナオーシャンの海岸、クコが浮き輪に乗って浮かんでいる。そ

の隣まで泳いで行き、どうだ、任務で行く海とは違うか、と尋ねてみる。
「ん、仕事とプライベートの分別、重要。とても重要」
確かにそれは真理だ。今日はお互いゆっくり羽を休めよう、と彼女の頭を撫でながら言った。
見渡す限り青い空にはギラギラと太陽が照りつけ、海を輝かせている。クコの透き通るような白い肌も、太陽に照らされ光っている。くれぐれも日焼けには注意するように言っておく。
「心配無用、クコ、あまり日焼けしない」
そうなのか、と肌を確認しようとすると、その細い脚に目が行った。細い、といっても棒のような細さではなく、程よく肉が付き弾力がありそうな魅力的な脚だ。
「・・・ちょう・・・団長？」
ハッ、いかんじろじろ見てしまっていたか。
「団長、クコの脚、興味あり？」
興味があるかないかと聞かれたら、俄然ある・・・ではなく、すまなかった。
「問題なし、見られるの、嫌いじゃない」
クコの頬が仄かに赤みを帯びる。それは太陽に照らされたから、というわけではないだろう。
「団長だから・・・あなただから・・・」
それは微かな声だった。しかし、しっかりと私の胸に伝わり、私の体を暖かく包んだ。
帰り道、まだまだ熱の残った西日が差す道を歩いていた。背中には遊び疲れ、くたくたになったクコを背負いながら。
「団長の背中、いつもはヘナが占有・・・」
眠たそうな目をこすりながら、クコが申し訳なさそうに呟いた。たまにはいいだろう、ヘナも許してくれるさ。そう慰めるように言った。
「団長・・・帰ったら・・・クコと・・・」
そこまで言って、クコは眠ってしまったようだ。その言葉の先に何

が紡がれるのか、今はあえて気にしないようにしよう。
背中には微かな吐息と、小さな身体に籠った夏の熱を感じていた。

クコの願い

今回の任務も大きなけが人を出すことなく、無事終えることができた。

「団長、今日の任務、問題なし。でも皆、疲労、蓄積？」

あまり強くはなかったが、害虫の数は多かったからな。しかし、クコはあまり疲れていないように見えるが。

「漢方、効能。疲労、回復、迅速」

なるほど。私もクコから処方された漢方を飲んでいるが、確かに疲れが貯まりにくくなっているように感じる。

「やはり花騎士、全員、漢方、必要？」

まあ、無理強いも良くないし、希望者には勧めておこう。

「あい」

というわけで、花騎士を引き連れ無事拠点に戻ることができた。明日からは城への帰路に就く予定だし、早めに休もう、そう思った時だった。

「団長、起きてる？」

簡易的に作られた個室のドアをクコがコンコンとノックした。

まだ起きているが、どうかしたか？と尋ねると、

「団長」

ドアを開け、クコがひょっこり顔を覗かせた。

「外見て、外」

外？と疑問に思いながらカーテンを開けると、暗い夜空に星が輝いていた。クコはこれを見せたかったのか。

「あい、星綺麗。団長と一緒、眺めたい。今日、七夕」

そういえば今日は七夕だったか。任務で忙しくて忘れていた。

「団長、願い、ある？　ここには短冊、ない。でも、強く思う、願い、叶う、かも・・・」

夜空を眺めながらクコが尋ねてきた。願い・・・か。今あるのは花騎士が無事でいてくれることと、世界が平和になってくれることくらいか。

「ん、クコも同じ。平和、欲しい、いつまでも。でも・・・」
そこまで言ってクコは黙り込んだ。
どうかしたのか、と尋ねると、
「クコ、もっと欲しいもの、ある」
平和よりも欲しいものか・・・何だろう
「・・・家族、所望」
クコには過去の記憶がない。もちろん家族の顔も分からない。それがどれだけ辛いことなのか、私には知る由もない。ただ、クコには寂しい思いはさせたくない、それだけを思った。
「団長、なでなで、希望」
言われるままにクコの頭を撫でると、お返しとばかりにクコは私の腹を撫でてきた。
「団長、クコ、家族、違う。でも、なんとなく理解。家族、こういうもの。胸、温かい、優しい気持ち」
お互いを触り合い、お互いの熱を感じ合うと、確かに愛情というものを感じられる気がした。
「温かい。トリトニア調査隊の皆、花騎士の仲間、それに、団長。あなたといると、胸、ポカポカ・・・この気持ち、永久、所望」
その気持ちこそが、クコにとっての『家族』になるのかもしれない、そう思った。
その後、クコと他愛のない話をして、お互いを撫であっているうちに、七夕の夜は明けた。
「団長、帰還、早く。皆、待ってる」
そう急かすクコと一緒に城へ向かった。
クコが昨晩願ったこと、その願いを叶えるためにも、これからもクコとずっと一緒にいたい。ただその思いだけを強く胸に刻んだ。

ポーチュラカの笑顔

「団長、失礼するんだよ。お仕事お疲れ様だよ」
　執務室のドアを元気よく開けて入ってきたのはポーチュラカだった。相変わらずの元気さと笑顔に仕事の疲れも癒される。
「いつも元気なのがポーチュラカの取り柄だからね！　鳥の絵じゃないんだよ？　ところで団長、この書類に印鑑が欲しいんだよ」
　ポーチュラカが書類とは珍しいな、と中身を確認するとどうやら舎内で一番大きい講堂の使用許可書のようだ。
「この講堂で花騎士のお笑い大会を開くように、私が行動を起こしたんだよ。皆、大会をしたいかいってね」
　ダジャレはさておき、この大会をポーチュラカが主催するということか。
「うん、騎士団の皆は凄く頑張ってるし、たまには息抜きも必要だと思うんだよ」
　確かに気を張りすぎてはいけないな。しかし、大会の要約には優勝者に賞品を出すようだが、金品や高価なもののやり取りはあまり感心しないぞ。
「それなら大丈夫なんだよ。優勝賞品はなんと『団長を一日独占できる券』なんだよ！」
　・・・初耳だが？
「うぅ・・・ごめんだよ。もちろん団長が嫌なら他の賞品を用意するけど、その方が花騎士は喜ぶと思うんだよ」
　まあ、花騎士の士気の高揚に繋がるなら一肌脱ごうじゃないか。
「ほんと!?　やったー、団長、大好きなんだよ」
　わざわざ机を回り込んで抱き着いてくる。彼女が犬ならきっと尻尾をブンブン振っていることだろう。その小動物のようなかわいさに、思わずポーチュラカの頭を撫でた。
　ところで、ポーチュラカは主催だけで参加はしないのだろうか。
「ううん、私も出場するよ。団長を独占するのは私なんだよ」
　自信満々だが、ポーチュラカのスタイルといえば。

「もちろん、ダジャレなんだよ。ダジャレを言うのは誰じゃ、ポーチュラカなんだよ」
しかし、それで優勝できるだろうか。
「ふふふ・・・私だって簡単に優勝できるなんて思ってないんだよ。これを見るんだよ！」
ポーチュラカが見せてきたのは分厚いノートだった。
「この大会のためだけに得意のダジャレを練りに練ってきたんだよ。このノートが『ノー』というほど書き込んであるでしょ」
ノートはしゃべらないと思うが、確かにびっしりとネタや補足が書き込まれている。
「もちろんまだまだ努力は続けるよ。この勝負の瀬戸際でダジャレの道を究めるんだよ！」
その野心的な目に、本当に優勝するんじゃないかという気すらしてくる。
「団長にも見に来て欲しいんだよ、私が優勝する瞬間を。ＹＯＵが証人になるんだよ」
そして大会当日。
「いやぁ最近暑いね～。この夏の暑さはバナナオーシャンを思い出して懐かしいんだよ。こんな日にはイカすスイカなんてどう？　あ、いーっすか」
やめろ・・・やめてくれポーチュラカ・・・
「この前海にいったんだけど、浜辺に寝ころんだら砂がビーチりと付いたんだよ。その後泳いだら他の人にぶつかっちゃって、スイマーせんって謝ったんだよ」
夏だというのに周りの空気が寒い。
結局ポーチュラカが優勝することはなかった。あれだけ努力していたんだから、きっと落ち込んでいるだろう、とポーチュラカの部屋を訪ねる。ドアをノックすると、
「だぁれ？」
出てきたのは、いつもの笑顔ではなく、目を赤くはらしたポーチュラカだった。

「わ、だ、団長!!　ちょっと待つんだよ」
目をゴシゴシしてからぎこちない笑みを見せる。
「どうかしたの？　いきなり来られて息をするのも忘れるくらいびっくりしたよ」
お得意のダジャレを言って泣いていたのをごまかそうとする彼女が、とても愛おしく感じた。気が付いたらポーチュラカを抱きしめていた。
「団長!!　ダメだよ・・・そんなに優しくされたら・・・」
彼女の目に水滴が溜まり、やがてあふれ出した。私の胸でよければ、気が済むまで貸そうと思った。
「ごめんね、団長。みっともないところ見せちゃって」
とんでもない。ポーチュラカが笑いに真剣なのが改めて分かったよ。
「・・・団長、ポーチュラカは決めたんだよ。いつかダジャレで皆を笑顔にできるようにがんばるんだよ！」
いつもの笑みを浮かべ、ポーチュラカはそう言った。
うむ、その意気だ。
「そうと決まれば早速特訓だよ！　団長には付き合ってもらうんだよ」
・・・仕方ない、ポーチュラカのためだ、協力しよう。
結局その日はずっとポーチュラカのダジャレ特訓に付き合った。笑顔が大好きな彼女が、いつか誰かを笑わせられるように。

エキザカムの瞳

「エキザカム、今日はあなたに渡すものがあるの。これなんだけど」
　ベッセラお嬢様から渡されたのはサファイアのあしらわれたブローチでした。
「お嬢様、こんな高価なものを私に・・・」
「いいのよ、あなたはいつも頑張ってくれているのだし。それにそのサファイアもあなたのような人に身に着けてもらった方が喜ぶわ」
　お嬢様にはいつもお世話になっているのに、こんなものまで頂いてしまうなんて・・・私の胸の中は感謝の気持ちでいっぱいになりました。
「お嬢様、ありがとうございます。大切に致します」
　私がそう言うと、お嬢様はいつもの優しい笑みを浮かべて、
「ええ。大切にしてあげてね」
　とおっしゃいました。
「それと、あなたには今日からしばらくお休みを与えるわ。ゆっくり休んできなさい」
「しかし・・・」
　そこまで言って、お嬢様に何の意図があるのか気付きました。
　湿った土の匂いを感じます。とても懐かしい匂いです。ここは私が生まれ育った土地。その地にある小さな墓地。そこに私の両親が眠っています。
「やっぱりお嬢様はお優しい・・・」
　今日は私の両親の命日。ベッセラお嬢様もそれを気にかけて下さっていたのです。
「お父さん、お母さん・・・エキザカムは帰ってきました」
　思い浮かぶのは優しかった両親の姿。思わず涙がこぼれてしまいました。
「お二人がいなくなって寂しいです。でも、ベッセラお嬢様も、団長様も、花騎士の皆もとても優しいです」
　先日お嬢様がくれたサファイアのブローチを取り出し、両親に見せ

ます。
「私は今も幸せに生きています。だからお父さんもお母さんも、心配せずゆっくり休んでください」
　両親を亡くしたあの日、お嬢様が私を拾ってくれなければ今の自分はありません。だからこそ、私は今自分にできる精一杯の恩返しをしたいのです。
「また、来年来ますね」
「あら、エキザカム。ずいぶんと早く帰ってきたのね。もっとゆっくりしてくればよかったのに」
「お嬢様、ありがとうございます。おかげ様で両親に挨拶を済ませられました」
　私がそう言うと、お嬢様は寂しげに笑いました。
「そう・・・ねぇエキザカム、ご両親がいなくてやっぱり寂しい？」
「・・・寂しくないと言ったら嘘になりますが、今の私にはベッセラお嬢様がいらっしゃいます。それだけで私は幸せなんですよ」
「ふふ・・・それは私もよ、エキザカム。あなたにはいつも幸せをもらっているわ」
　そう言うと、お嬢様は私の瞳をじっと見つめました。
「ねぇ、私が初めてあなたに会ったとき、言った言葉を覚えてる？」
「もちろんです。私の瞳がサファイアのようだと褒めて下さりました。両親と同じことを言われたのでとても光栄に思いました」
「ええ。私は美しいものはずっとそばに置いておきたいの。だからこれからもずっと一緒に居てね、エキザカム」
「はい、もちろんです！」
　私もお嬢様の瞳を見つめ返しながら、そう誓いました。

イエローパンジーの幸せ

「団長、おはよ。外見て、外」
執務室のドアを開けて入ってきたのはイエローパンジーだ。
「雪降ってるぞ。もっと積もったら雪合戦しよう。それから雪だるまも作って～」
相変わらず元気だが、そんな薄着で寒くないのだろうか。
「そんなに寒いかな？　丁度いいくらいだと思うけど」
まあ、彼女はウィンターローズ出身だから寒さに慣れているのだろう。
「こういう日に食べるアイスは格別なんだぞ」
きっとウィンターローズの花騎士とは分かり合えない。そう思い、暖炉で暖まろうとすると、
「団長も一緒に遊ぼう！」
しかし、私はイエローパンジーと違って寒さに弱いんだ。
「え～、じゃあおしくらまんじゅうは？　あれやると暖まるんだぞ」
暖まるためなら部屋に居ればいいじゃないか。なぜそんなに外で遊びたいんだ・・・
ぶつくさと文句を言いながらも、イエローパンジーの無邪気な顔を見ていると断り切れず、結局外に遊びに来た。
「えへへ～、団長と雪合戦か～」
いや、さすがに雪合戦はやらないぞ。
「え～、団長にもあたしの雪合戦テクを見せてあげたかったのにな～」
表情がころころ変わる彼女を見ていると飽きない。
結局二人で雪だるまを作ることにした。
「どうだ団長、こんなに大きくできたぞ」
イエローパンジーが胴体を、私が頭を作ることにしたが、イエローパンジーの雪だるまはかなり大きく、形も整っている。それに比べて私の作った頭は小さくて、いびつに歪んでいる。
「団長・・・意外と不器用なんだな・・・」
イエローパンジーが私の雪だるまを見て呟く。手が冷たくて思う

ように作れないんだ、と言い訳をする。
「でもあたしは結構好きだけどな、この頭。それにほらこうしてこうすれば・・・」
　イエローパンジーは辺りの枝や石で、雪だるまに器用に装飾を付けていく。おかげでなかなか見れる形になった。
「えへへ・・・雪のことならあたしに任せてよ、団長」
　その後、イエローパンジーもはしゃぎ疲れ、二人で部屋に戻ることにした。風呂に入り暖炉にあたっても、体は芯まで冷えていてなかなか暖まらない。
「団長、お風呂ありがとな。あれ？　まだ寒いの？」
　風呂上がりで髪を下したイエローパンジーが部屋に入ってきた。本当に長時間雪の中に居たのかと思うほどケロッとしている。
「それなら・・・えいっ！」
　イエローパンジーがいきなり抱き付いてきた。シャンプーの良い香りが漂う。
「こうやってくっついてると暖かくなるんじゃないか？」
　確かに彼女とこうしていると、体温が上がるのを感じる。
「って、あれ？　あたしも暖かくなってきた・・どうしたんだろう・・」
　見るとイエローパンジーの頬は赤く染まっていた。その様子がなんとも可愛らしく、私は思わず彼女の髪を撫でた。
!?　ちょっと団長、何するんだよ!?」
　嫌だったか？
「べ、別に嫌じゃないというか、むしろ嬉しいというか・・・ってそうじゃなくて恥ずかしいだろ！」
　恥ずかしがることはない。恋人同士なら頭を撫でたりするのは普通だろう。
「そうか・・・団長とあたしの仲だしな・・・それじゃあ、お返しだ」
　そう言うと細くて白い腕を私の首に回し、頭を撫でてくる。
「・・・って、これ余計に恥ずかしいな。でも嫌じゃないし・・・なあ団長、しばらくこうしてて良い？」
　可愛い彼女のお願いだ、断る理由は無かった。イエローパンジーの

暖かな体温を感じながら、その夜は過ぎていった。

クコと雨の休日

「団長、今度の休み、デート、所望」
　最近はお互い任務で忙しく、なかなかクコと過ごせない日々が続いていた。そんな中で一日だけ一緒に休みが取れる日があり、クコの方からデートを提案してきた。
「団長と、お買い物、クコ、発奮！」
　ワクワクを抑えられない様子のクコを見ていると、こちらも楽しくなってくる。
　そして休日。カーテンを開けると雨が降っていた。
「団長・・・」
　しょんぼりした様子でクコが部屋に入ってきた。
「デート、不可・・・クコ、残念、とても・・・」
　まあ、そう落ち込むこともない。せっかくの休みなんだしゆっくり過ごそう、そう言いながらソファーの隣に座るよう勧めた。
「・・・あい！」
　最初こそ落ち込んでいたクコだったが、すぐトテトテと近づいてきて私の隣に座った。
　しかし、特にやることはないのでダラダラと過ごしている。クコは本を読んでいるが、私の部屋にあった戦術指南書なんて読んで楽しいのだろうか？
「問題なし。団長の読む本、興味あり」
　足をバタバタさせながら本を読むクコがとても可愛らしい。私がクコの頭を撫でると、クコは私の方をじーっと見つめてきた。嫌だったのだろうか。
「ん、違う。クコ、団長の膝の上、希望」
　膝の上に乗りたかったのか。クコが望むなら断る理由はない。自分の膝をポンポン叩いて、おいでと誘う。
「あい！」
　膝の上にクコの体温を感じる。雨は相変わらず降り続き、私たちの体もじめじめと汗ばむ。

「団長、暑い？」
大丈夫だ、と言う。クコの温度は不思議と不快には感じない。クコこそ暑くないのかと聞き返す。
「問題なし。団長の体温、クコ、安心」
クコはそう言うと、私の腹を撫でてきた。こちらもお返しとばかりに彼女の腹を撫でる。
「えへへ・・・団長、好き・・・」
クコの頬が赤く染まると、その頬を私の腹に寄せて頬ずりをしてきた。
「すぅ・・・すぅ・・・」
いつの間にか二人とも眠ってしまったようだ。クコは私の腹を枕代わりにして、静かに寝息をたてている。
「んん・・・団長・・・？」
眠たそうな目を擦って、クコは私の顔を見上げてくる。
「クコ、寝てた？」
まだ寝ててもいいんだぞ、と言いクコの頭を撫でる。
「んん・・・」
クコが二度寝しようとした時、ぐーっと二人の腹が鳴った。とりあえず昼食にするか。
「あい、クコ、お手伝いする」
冷蔵庫の中にあったもので適当に昼食を済ませ、クコに処方された漢方を飲んだ後、再び眠ろうと二人でベッドに潜り込んだ。なんとも堕落した生活だな、と自分でもおかしくなった。
「問題なし、たまには・・・団長、いつも大変、息抜き、大事」
そうかもしれないなと思った。最近は任務ばかりだったからクコとの時間も作れなかったしな。
「クコ、団長、心配。疲労、癒したい・・・」
心配はいらない、クコと一緒に居ればそれだけで疲れが吹き飛ぶ。それと、クコの漢方もあることだし。
「ん・・・」
クコは眠たそうな目を閉じ、私の胸に顔をうずめる。私もまた少し

眠ることにしよう。
部屋の中は雨の音と二人の吐息だけに包まれていた。
「団長、クコ、帰る。今日のデート、楽しかった」
満面の笑みでそう言われた。ただダラダラしていただけだが、デートと言えるのだろうか・・・
「団長、クコ、一緒。それだけでデート。クコ、楽しい、満足！」
確かに私も楽しかったし、今までの疲れも癒された。クコには礼を言わないといけないな。
「なでなで、所望」
言われたとおりに頭をなでると、クコの顔は赤く染まった。
「えへへ・・・団長、再度デート、所望。団長と一緒、なんでも良い」
ああ、また今度の休みにはデートをしよう。今度はちゃんと買い物に行こう。そう言って別れたが、頭の中は次のクコとのデートのことでいっぱいになっていた。

ランタナと夏祭り

「うおぉぉぉ!! だんちょ、祭りだ！ 祭りにいくじょー」
元気を爆発させながら勢いよく執務室に入ってきたのは、顔を見なくても分かる、ランタナだ。
取り敢えず落ち着け、と言ってほっぺたをぷにっとつねる。
「ふにゅぅ・・・」
謎の鳴き声をあげてランタナは静止する。それで祭りがどうしたのか。
「バナナオーシャンでお祭りがあって、だんちょには私と一緒に来て欲しいんだじょ」
日程を確認すると、ちょうど私も休日だった。
「団長がその日休みなのは調べが付いてるんだ。大人しくお縄を頂戴しな！」
どこの筋で調べたのかは今は聞かないでおこう。しかし、バナナオーシャンの祭りならペポと一緒に行ってくればいいんじゃないか、と言うと、
「ペポは私が置いてきた。この戦いにはついていけそうにない」
翻訳すると、ペポは他の用事が重なって行けない・・・といったところだろう。
「だんちょにとっても、悪い話じゃないでしょ？ なんたってこのロリっこ美少女ランタナの浴衣を・・・ってしまっつわぁぁぁ！」
今度はどうしたのだ、と再びほっぺたをつねる。
「ふにゅぅ・・・だんちょ、大変だー！ 私、浴衣持ってなかったじょ！」
なんだそんなことか。別に普段着でもいいじゃないか。
「そんなことだと!? だんちょはこのロリっこ美少女の浴衣姿が見たくないのかー!? はだけた浴衣に興奮してそのまま押し倒して・・・って感じの展開に持ち込みたくないのか!?」
年頃の娘がそういうことを言うんじゃない。
というわけで、ランタナの熱意に負け、彼女の着る浴衣を選びに来

た。
「わぁ、この色可愛い！　だんちょ、だんちょはどう思う？」
　こうしていると、普通の女の子みたいだな、と少し失礼なことを思って笑う。
「ねぇだんちょってばー」
　おっとすまない。そうだな、私としては少し落ち着いた色の方がランタナには似合うと思うんだ。
「落ち着いた色・・・この薄い水色とか？」
　うむ、この色はなかなか似合うと思うぞ。ランタナは本人が派手な色合いだからな。
「なるほどー、あくまで主役はわ・た・し、だからね。よーしこの浴衣でだんちょを悩殺するじょー」
　それでは、この浴衣はランタナにプレゼントしよう。
「な・・・このロリっこ美少女の好感度を上げてどうするつもりだ!?
寝室にでも連れ込もうというのか!?」
　良く分からないが、喜んでくれている・・・ということでいいんだろうか？
「ねぇだんちょ・・・どうかな？」
　祭り当日、二人で選んだ浴衣をランタナは着ている。とても似合うし可愛いぞ。
「ホント!?　もしかして今の私って春庭一の美少女？」
　もちろん、春庭一だ。
「あぅぅ・・・そう素直に褒められると恥ずかしいじょ・・・」
　柄にもなく照れている。普段のいたずらのお返しとばかりに褒めちぎってやろう。ランタナ最高ー！
「や、やめろだんちょ・・・それ以上褒められると、この右腕の封印が解けてしまう・・・」
　そう言って左腕を押さえる。照れ隠しだろう、顔が真っ赤だ。
「だんちょ、次はアレやろう。射的」
　そう言うと早速、屋台の店主にお金を払い銃を構えた。
「だんちょ、私の後ろに立つな・・・えいやぁっ！」

決め台詞を言って勢いよく撃ったが、結局落とした景品は人形二つだけだった。
「男の子と女の子の人形・・・じゃあこれは団長にプレゼントするじょ。浴衣と、今日一緒に来てくれたことのお礼」
ランタナがそう素直にお礼するとは珍しい。じゃあこれは執務室に飾るとしよう。
「か、勘違いしないでよね!? アンタのためじゃないんだからね!」
いや、私のためにくれたんだろう・・・
「えへへ・・・それを私とだんちょだと思って可愛がってね」
「だんちょ、今日は楽しかった。また一緒に来たいな! 今度はペポも一緒に」
うむ、またいつでも誘って欲しい。そう言って彼女の小さな手を握る。
「だ、だんちょ!?」
これはいつものいたずらのお返しだから、今日はこのまま手を繋いで帰ろうか。夏の暑さが残る夜の中を、顔を真っ赤に火照らせたランタナと一緒に歩いた。

ベッセラの気持ち

今日の害虫討伐も順調に終わり、帰路に就こうとすると、
「団長、ちょっとお時間よろしいかしら？」
ベッセラに声を掛けられた。その言葉遣いや態度に表れているように、優雅で気品に溢れた花騎士だ。
「ちょっと相談があるのだけど、少し付き合ってもらってもいいかしら？」
彼女が相談とは珍しい。もちろん、騎士団長としてできる限りのことは協力しよう。
「ふふ・・・頼もしいのね。やっぱりあなたに頼ってよかったわ」
ベッセラの屋敷に招かれた。宝石商だけあり、豪華絢爛といった装いだ。しかし、エキザカムが見当たらないが。
「エキザカムならお使いに行ってもらってるわ。それで、相談というのが彼女のことなのだけれど・・・」
エキザカムのことなら私よりベッセラの方が詳しいんじゃないか。
「もちろん、あの娘とはずっと一緒にいるし、色んなことを知っているわ。でもその上であなたにも意見を聞きたかったのよ」
なかなか深刻な悩みらしい。
「実は、もう少しで彼女の両親の命日なのよ。それと、彼女が私のメイドになった日でもあるわ。日頃の感謝の思いを込めて、何かプレゼントをあげたいんだけど、何がいいのかと思って・・・」
そういえばエキザカムの両親は既に他界していると聞いた。しかし、宝石商のベッセラならばその手のことは詳しいと思うのだが。
「確かに、誰かにプレゼントするために私の宝石を選ぶ方も多いわ。でも、いざ自分が選ぶ立場になったら決められなくて」
そういうものだろうか。それならベッセラが普段売っている宝石をプレゼントするのはどうだろうか。
「宝石を？　私は今まで宝石をたくさん売ってきたけれど、プレゼントしたことは無かったわ」
それならば丁度いい機会だ。エキザカムもきっと喜ぶだろう。

「私の売った宝石をプレゼントされて、とても喜んでいた人を私はたくさん見てきたわ。そういうのを見て、宝石商をやっていてよかった、と思ったものね」
　ベッセラは昔を懐かしむように話した。
「ありがとう、団長。エキザカムに喜んで貰える宝石を見繕ってみるわね」
　エキザカムのことだ、ベッセラに貰えるなら何でも喜ぶだろう。彼女は君のことを大好きだと良く言っているからな。
　そう言うとベッセラは顔を真っ赤にした。珍しく照れているようだ。
「・・・照れるじゃない。でも、それは私も同じなのよ。あの娘と一緒にいるととっても楽しいの」
　傍から見ていると、二人は姉妹のように仲睦まじいからな。
「姉妹・・・エキザカムと・・・考えたこともなかったけれど、私たちには主従というよりもそういう言葉が合っているのかもね」
　そう言うと彼女は優雅に笑った。
「うふふ・・・この前も面白いことがあったのよ。私がエキザカムに寒いから上着を取ってきてと言ったら・・・」
　大切な家族を自慢するように、彼女はそう語りだした。そんな楽しそうな彼女を見ていると、こちらも楽しくなってきて、そのまま彼女の話に耳を傾けていた。

　ベッセラから相談を受けて数日が過ぎた。彼女はちゃんとプレゼントを渡せただろうか。そんなことを考えていると、執務室のドアを叩く音が聞こえた。
「団長様、少しお時間よろしいでしょうか」
　何かの偶然か、現れたのはエキザカムだった。その胸には彼女の瞳のように青い、サファイアのブローチが輝いていた。
「実はベッセラお嬢様からプレゼントを頂いて、そのお返しを考えているんです。何か団長様の知恵をお借りできれば、と思いまして」
　二人のために協力できるのなら光栄だ。早速彼女の相談を受ける

ことにした。

ハツユキソウと穏やかな生活

「し、失礼します！」
　執務室の扉が開いて、ハツユキソウが入ってきた。何だか慌てているようだが、どうかしたのか。
「だ、団長さん！　できれば少しだけ匿ってもらってもいいですか!?」
　そう言うと彼女は机の裏側に隠れ身を縮こまらせた。
　部屋の外では『ハツユキソウちゃーん』と呼ぶ花騎士たちの声がしている。ハツユキソウのことだ、ランタナのようにイタズラをして追われているわけではないだろうが・・・
「ふう・・・行ったみたいですね。あ、ありがとうございました団長だん」
　匿ったことは別に問題ないが、一体何があったんだ。
「実は・・・花騎士さん達にくっつかれて困ってたんです！」
　くっつかれる？　どういうことだろう？
「ほら私って体温が凄い低いじゃないですか。それで私にくっつくとひんやりして気持ちいいって他の花騎士さん達が言い出して・・・」
　この暑さだしな。しかし、大勢の花騎士たちにくっつかれるハツユキソウか・・・中々微笑ましい光景に思えるが。
「もちろん、少しぐらいなら良いんですよ。スキンシップは大事ですからねぇ。でもヤリ過ぎは良くないと思うんです！」
　それもそうだな。花騎士たちには私から注意しておこう。
　また他の花騎士に会うと面倒だろう。しばらくは執務室にいるといい。
「え、いいんですか？　えへへ・・・それじゃあ、お言葉に甘えて」
　そう言うとハツユキソウは、顔を赤く染めて私の体に密着してきた。
「あっ、ごめんなさい、つい。お邪魔でしたか!?」
　無論邪魔ではない。しかし、くっつかれるのは嫌じゃなかったのか？
「団長さんだけは特別ですよ・・・一日中くっついていても飽きません」

彼女の顔がもっと赤くなる。頬はこれだけ火照っているのに、身体は冷たいのはなんだか不思議だ。
私の方は気持ちいいが、ハツユキソウは暑くないのか？
「私バナナオーシャン出身なので暑いのは慣れてるんですよ」
そういえば彼女はバナナオーシャンの生まれだったな。外見からウィンターローズに思えてしまうが。
「えへへ・・・団長さん・・・」
まるで懐いた猫のように私の手を撫でてくる彼女が、とても愛くるしかった。

「私と旅行・・・ですか？」
ハツユキソウが目を丸くして言う。
この暑さだ、上層部からも休暇を取るよう言われていたし、避暑地に旅行でも行こうと思ってな。もし都合が良ければハツユキソウも一緒にどうだ、と誘ったのだった。
「でもでも！　私なんかと一緒でいいんですか？」
勿論だ。いや、ハツユキソウだから一緒に行きたいんだ。
「団長さん・・・うぅ・・・ごめんなさい、私嬉しくて・・・」
ハツユキソウはしくしくと泣き出す。そんなに嬉しがってくれるとは・・・
「分かりました。私にお供させて下さい！」

「うわー、良い旅館ですねぇ」
当たりをキョロキョロ見回しながら、珍しくハツユキソウがはしゃいでいる。
ベルガモットバレーの花騎士たちに聞いた評判の良い旅館だ。川のせせらぎ、木々のさざめきが聞こえて、日頃の疲れも癒されていく。
「わあ、温泉もあるんですね」
随分と楽しそうだが、その厚着では目立つし、これを着てみたらどうだ。
「ゆ、浴衣ですか・・・スースーして苦手なんですけど・・・団長さん

は見たいですか？」
　無論だ。
「ど、どうでしょう。似合ってますか？」
　とても綺麗だ。白い肌と長い髪に浴衣が非常に似合っている。
「そ、そう言われると照れちゃいますね。えへへ・・・」
　ハツユキソウはそう言うと白い頬を赤く染めた。

「団長さん、ここから見える景色凄く綺麗ですよ」
「お料理美味しいですね、団長さん」
「えへへ、温泉気持ちよかったですね、団長さん」
　逐一報告してくるハツユキソウがなんとも可愛らしい。彼女が楽しんでいるのを見ると、私も嬉しくなってくる。
「団長さん、お外真っ暗ですね。私たちももう寝ましょうか・・・って布団くっつきすぎじゃないですか!?」
　ハツユキソウはかなり驚いているが、仲居さんが気を利かせてくれたんだろう。
「こ、これじゃあ眠れませんよね。離しましょうか」
　別に私はこのままで構わないが、と言ってハツユキソウを後ろから抱き寄せる。
「ひゃぁっ！　駄目です団長さん！」
　むっ、これは・・・
「だ、駄目ですぅ・・・団長さん・・・」
　だんだん抵抗が弱くなっていくハツユキソウだが、その身体は冷たく、これが中々気持ちいい。
「だ、団長さん・・・もしかして私の身体がひんやりして気持ちいい、とか思ってます？」
　図星だ。できればしばらくこのままでいたい。あの花騎士たちの気持ちも分かる気がする。
「うぅ・・・団長さんがそう言うなら・・・分かりました！　今夜はこのハツユキソウが団長さん専用のひんやり抱き枕になります！」
　夜の帳の中で、ハツユキソウの吐息だけが聞こえる。

「団長さん、まだ起きてますか？」
ハツユキソウが囁く。まだ起きている、と返す。
「今日はとっても楽しかったです。ありがとうございます」
礼を言うのはこちらだ。私もとても楽しかった。
「えへへ・・・でも、旅行って数日で終わっちゃうんですよね。私、できれば団長さんとこのまま『穏やかな生活』を続けていきたいんです。ずっと・・・」
大丈夫だ。いつか、平和な世界になったら、その時はずっと一緒にいよう。
「は・・・はい！」
暗闇の中で、ハツユキソウの体温がほんのり上がるのを感じた。

ポーチュラカと夏の日

「あつはなついねー、団長。あ、間違えた。夏は暑いねー」
いつも通りのギャグを言いながら、ポーチュラカはソファに座ってジュースを飲んでいる。
暑いという割に随分余裕そうだが。
「まあ、バナナオーシャン生まれだからね。このくらいの暑さはへっちゃらなんだよ。団長は暑いの苦手？」
苦手だ。特に日差しが強い日は元気もなくなる。
「そっか。それじゃあ、ポーチュラカと一緒にお出かけする？」
・・・話を聞いていたんだろうか？
「き、聞いてたんだよ！　元気がない団長に元気をあげるために、一緒に出かけるんだよ」
結局ポーチュラカに手を引かれ、外出することになった。
ここは彼女がよく休憩する公園らしい。
「団長、この辺りが涼しいんだよ」
ポーチュラカが木陰の方から手招きする。しかし涼むのなら、部屋の中に居た方がいいのではないか。
「分かってないなぁ、団長。こうやって木々に囲まれていると、心も静かになって、グッと涼しくなるんだよ。ウッド涼しくなるんだよ」
木陰よりも、ポーチュラカのダジャレに涼しくなっているような気もする。
「もう少し涼しくなったらピクニックにも来たいね。期待してほしいんだよ。今私は料理の練習中なんだよ」
それは楽しみだな。ポーチュラカの料理なら是非食べてみたい。
「えへへ・・・料理で団長の胃袋を掴めば、団長狙いの他の花騎士にも勝利できるしね」
照れ隠しのようにお得意のダジャレを言うポーチュラカだった。

公園を出て街中を歩くと、やはり日光が照り付けて、凄まじく暑い。
「団長、暑そうだね。私が良く行く喫茶店があるから、そこに入ろうか

？」
喫茶店なら涼しそうだな。どこにあるんだ？
「そこの角を曲がった先っさ」
喫茶店の中はまるでオアシスのように涼しかった。席に座ってコーヒーを二つ頼む。
しかし、ポーチュラカが喫茶店とは・・・中々結びつかないな。
「むぅ、私だっていつもはしゃいでるわけじゃないんだよ。むしろこういう静かな場所でネタを考えることも多いんだよ」
そう言ってポケットから手帳を取り出した。
「私のネタ帳なんだよ。他の人にはあまり見せないけど、団長は特別に見てもいいんだよ？」
見せてもらうと、ダジャレとそれに関するメモがびっしりと書き込んである。
「・・・や、やっぱり恥ずかしいからあんまり見ちゃダメなんだよ！」
そう言って私の手からネタ帳を取り上げる。
しかし、なんともマメだな。
「ふふ、手に豆が出来るほど書き込んだからね」
口ではダジャレを言っているが、顔は真っ赤だ。ダジャレはいつも言っているのに、そんなに恥ずかしいのだろうか。
「芸人としては、ネタの解説とか見られるのは恥ずかしいんだよ」
そういうものなのか。
「あ、団長コーヒー来たんだよ。でもわたしは苦いのは苦手だから・・・砂糖をさ、投入するんだよ」
黒いコーヒーから湯気が出て、香ばしい香りが鼻をかすめる。
喫茶店でポーチュラカと他愛の無い話が続く。
「団長は私のダジャレ面白いと思う？」
なんとも答え辛い質問をしてくる。そういえばポーチュラカは何故ダジャレにこだわるのだろうか。
「ダジャレは私そのものだからね。ダジャレで皆に笑ってもらえれば、私も凄く嬉しいんだよ」
ポーチュラカの花言葉『笑顔』のためか。だからこそあんなに努力

を重ねていたのか。
「うん！　団長にも元気で笑顔になって欲しいんだよ」
そう言って彼女は、子供っぽい無垢な笑顔を見せる。その顔を見ただけで、私は大分元気が戻った気がする。

「団長、最後はあそこに行こう。最近出来たアイスクリーム屋なんだよ。あっ、ちょっと待って」
そう言ってポーチュラカは息を大きく吸い込む。
「アイスクリーム屋に行こう団長！」
・・・何故大声で言い直したのか。
「ふふ、アイスクリームを叫ぶ。Ｉ　Ｓｃｒｅａｍ　なんだよ！」
そうか。では一緒に入ろう。ここは是非私に奢らせてほしい。
「え、いいの？　やったー！　団長、ありがとうなんだよ」
元気を貰ったお礼だ。遠慮せずに食べてほしい。
「えへへ・・・それじゃあ、遠慮なく」
「んぅ、冷たくて甘くて美味しいんだよ」
ポーチュラカの食べているのはチョコとバナナ味か。
「ん・・・この味は評価できるんだよ。氷菓だけに、ね。団長のは何味？」
抹茶だ。一口食べるか、と言ってスプーンをポーチュラカに向ける。
「あ、だ、団長・・・」
ほら、早くしないと溶けてしまう。
「あむ。お、美味しいんだよ・・・」
顔を真っ赤にしてそう言う。別に照れる必要は無いだろう。
「で、でも皆見てるし、恥ずかしいんだよ・・・」
愛し合ってる二人なら、何もおかしいことはないだろう。
「あ、愛し!?」
アイスだけにな。
「お、おお・・・団長も中々やるんだよ・・・」
・・なんともキザな台詞を言ってしまい、自分でも恥ずかしくなっ

てきた。きっとこの暑さのせいなのだろう。冷たいアイスでも食べて少し落ち着こうと思った。

その後は二人で口数も少なく帰った。時折目を合わせてはにかみながら。

夏のむせ返るような熱気が、二人の間に漂っていた。

クコと風鈴

ベルガモットバレーでの討伐任務が無事終わった。今日はもう遅いので、ベルガモットバレーで宿を取り、明日には帰路に就く予定だ。
「団長、クコ、散策、希望」
一緒に任務に来ていたクコがそう提案した。もう辺りは夕日の色に染まっているが、少しの時間だけなら、ということでクコと一緒に街へ出ることにした。
もう夕方だというのに、歓楽街はたくさんの人で賑わっていた。
「知らないもの、たくさん。調査隊の皆、花騎士の皆、お土産、歓喜？」
お土産屋で売っているものは、私もクコも知らない珍しいものが多く、クコは目を輝かせていた。
「ん・・・」
クコがふと立ち止まる。何やら耳を澄ませているようだ。
「・・・音、聞こえる。綺麗な音・・・」
クコは音の鳴る方へ歩いていく。彼女の後を追うと、木造の古い建物があった。中には木で彫った人形や置物が並べてあった。どうやら雑貨屋らしい。
すっかり薄暗くなった街の中にポツリと佇むその店を見ると、若年寄的な発想かも知れないが、懐かしい気分になってくる。
クコはその中でも、店の外に飾ってあった風鈴に心を奪われていた。
「ガラス、キラキラ。チリンチリン、綺麗な音・・・」
風鈴はベルガモットバレー特有の渓谷風に揺れ、透き通った音色を奏でている。
クコはと言えば、心ここにあらずといった様子で、目を閉じてその音に聞き入っている。
どれが欲しいんだ、そう聞くとクコは私を見て、少し困ったような様子を見せた。
「でも、団長・・・」
遠慮することは無い。今回の任務でもクコは頑張っていたのだし、

そのご褒美だと思って欲しい。私がそう言うとクコはニコっと微笑んだ。
「クコ、これ、好き・・・」
クコが指差したのは、深い青で塗られた風鈴だった。この色は、きっと海だろう。直感でそう思った。
「団長も、そう思う？　クコも、海だと思った。クコ、海、好き・・・」
ロータスレイク出身のクコには、海というのは特別なものなのかも知れない。

すっかり辺りは暗くなってしまった。その暗闇の中を歩く二人を、歓楽街の明かりが照らしている。
「団長、感謝。クコ、嬉しい。えへへへ・・・」
クコは先ほどの風鈴が入った袋を大切そうに持ち、幸せそうに笑っている。その優しく閉じた瞼がなんとも愛おしく感じた。
「団長、クコも団長に、渡す物、有る」
クコが鞄から小さな袋を取り出し、こちらに差し出す。中を見ると風鈴が入っていた。いつの間に買っていたのだろうか。
「えへへ・・・その風鈴、団長、似合う。クコ、プレゼント」
風鈴の丸いガラスは淡いオレンジ色に染めてある。これは・・・
「クコ。その風鈴、クコ」
確かにクコの瞳の色に似ている。
それではこの風鈴をクコだと思い、大切にしよう。そうクコに伝えた。
「ん・・・クコ、団長のそば、いつも居る。いつも一緒・・・」
青白く染まった街の風景の中、クコの頬が赤くなっていることだけははっきりと分かった。

目眩のするような青空の下、私は延々と書類の処理に追われていた。
クコは今ロータスレイクへ調査に向かっている。薄っすらと寂しさを感じながらも、黙々と仕事に取り掛かる。額からは汗が流れ、私

の前髪を濡らしている。
窓の方に目をやると、クコの瞳があった。そっと窓を開ける。クコの瞳は風に揺れ、美しい音が鳴り響いた。その透き通った音は、夏の暑さと溶け合い、儚く消えていった。
この夏は、いつもよりも過ごしやすい日が続きそうだ。

ベッセラとエキザカムと水着

相も変わらずうだるような暑さが続く。
汗でシャツが濡れ、べたべたとして気持ちが悪い。
こんな日は仕事を休んで、花騎士と海にでも行きたい気分だ。もちろん私の選んだ水着を着せて。
そんな想像をしながら書類を片付けていると、コンコンと執務室のドアを叩く音が聞こえた。
「団長様、少しお時間よろしいですか？」
入ってきたのはエキザカムだった。彼女の白い肌が日に当たり、眩しく輝いている。
「ベッセラお嬢様からの伝言なのですが、今度の休み一緒に海に行きたい、とのことです」
それは嬉しい申し出だ。ちょうど海に行きたいと思っていた。
「それは良かったです。ベッセラお嬢様も喜びます。何といっても、お嬢様はその日のために水着を新調・・・と、これは言っちゃいけないんでした・・・」
ふむ、ベッセラが。ところで、エキザカムも一緒に行くのか。
「はい、私もご一緒致しますよ」
そうか。それでは今から新しい水着を買いに行かないか。
「いえ、私は前のでも・・・団長様もお忙しいでしょうし」
いや、今片付いたところだ。行こう。是非行こう。
「はい！　では参りましょうか」

ベッセラ、エキザカムと三人で、リゾート地プラタノにやってきた。
コテージから見える一面の海を眺めると、自分もセレブになったような気になってくる。
「団長、どうかしら？　このコテージの景色は」
素晴らしい、そう答える。
「ふふ・・・よかったわ、気に入ってもらえて。それでは私も着替えてくるかしら」

ベッセラの水着は、宝石をあしらったビキニだ。宝石商らしい豪華な装いだが、ベッセラが着ると様になっているのが不思議だ。
「団長、何か感想は無いの？」
見とれて何も言わずにいた私にベッセラが質問する。
ベッセラの美しさと水着の美しさ。両方の調和がとれていて、とても素敵だ。
「うふふ・・・嬉しいわ、団長」
「お嬢様、団長様お待たせしました」
エキザカムが私の選んだ水着を着て現れる。
その水着は紺一色のレオタード型で、極めつきに胸に『エキザカム』と書いたゼッケンが貼ってある。
「エキザカム、これは一体・・・」
「お嬢様、こちらの水着は団長様が私にプレゼントしてくれたんですよ。何でも、騎士学校などでも着用されている、由緒正しい水着とのことです」
「・・・団長？」
ベッセラはまるで害虫でも見るような蔑んだ目でこちらを見てくる。
・・・そんな目で見るな。私もこの暑さで色々おかしくなっているんだ。
「まあ、趣味は人それぞれだし、私はそんなことを気にする人間ではないのだけれど。でもエキザカムには変なことは教えないこと。分かったわね？」
肝に免じておこう。
しかし、この水着は本当にエキザカムに似合っている。彼女の少女のような幼い顔立ちと華奢な身体と、地味な色の水着が混ざり合い、まるで本物の女学生のような雰囲気を醸し出している。
「何だか良く分かりませんが、団長様が喜んでくれているようですし、良かったです」
「いや、良くないわエキザカム。今の団長にあまり構っては駄目よ」
何だか酷いことを言われているような気がする。

「その恰好では目立つし、せめて名前は外しなさい」
ベッセラはそう言うと、エキザカムの胸の名前を外した。
ああ、そこが一番のポイントだというのに。
「・・・団長？」
すまない。
「団長様、お嬢様、早く来て下さーい！　水気持ちいいですよ」
エキザカムが波打ち際ではしゃいでいる。
「あらあら、随分と楽しそうね。可愛いんだから」
まるで子供のようだな、と言う。
「あの娘も普段はメイドの仕事で忙しいのだし、たまにはこんな風に羽を伸ばすのも必要だと思うわ」
うむ、その通りだな。では私も存分に楽しむとしよう。
おーい、エキザカムー!!
「団長は本当にどうしたのかしら・・・？」

・・・さすがにはしゃぎすぎた。体がやけに重いし、肌がヒリヒリと焼けて痛い。もう若くはないのだと痛感する。
「まったく、二人ともはしゃぎ過ぎよ」
ベッセラがまるで母親のように優しく諭してくる。
「それにお楽しみはこれからなのだから」
ベッセラが海岸を指さすと、ちょうど太陽が沈み、オレンジ色に変わっていくところだった。この夕日を見ながら静かに過ごすのが、プラタノでの最大の楽しみらしい。
・・・そういえば最近、夕日をしっかりと見ていなかったな。そう思い、ノスタルジーな感傷に浸る。
「団長様、お嬢様、お飲み物やフルーツはいかがですか？」
水着の上にパーカーを着たエキザカムがジュースやフルーツを持ってやってくる。
「エキザカム、今日はメイドの仕事はいいから、ゆっくりしていなさい」
「いえ、ベッセラお嬢様や団長様にご奉仕することも、私にとっては大

切ですから」
なんて良い娘なんだ。よし、ご褒美にナデナデしてあげよう。
「待ちなさい団長。ご褒美を与える権利は主人である私にあるわ」
そう言うとベッセラは、エキザカムの頭を撫で始めた。
「お嬢様、その・・・嬉しいんですけど、団長様が見ています・・・」
「うふふ、いいじゃない。見せつけてあげましょう」

プラタノでの楽しい時間はあっという間に過ぎていった。明日には城に戻り、仕事に追われる日々が続く。はぁー、とため息を付いているとエキザカムが不思議そうな顔で見つめてくる。
「団長様、どういたしました？　え、仕事に戻りたくない？　そうですか、では・・・」
エキザカムはそう言うと、自分の太ももをポンと叩いた。その太ももを枕にして寝てみる。
「少しは心安らぎましたか？　それでは応援致しますね。団長様、フレーフレーです」
エキザカムの優しい応援を聞きながら、彼女の程よく肉の付いた太ももに頭を預ける。太ももからは仄かに磯の匂いがして、その匂いを嗅ぐと、明日も頑張ろうという気になった。
「・・・少し目を離している間に一体何が。でもいいわ、団長も疲れていそうだし、今日はエキザカムを貸しておいてあげましょう」
美しい夕日が沈んでいく。やがて青白く染まった海辺をしばらく眺めていた。

「団長様、いらっしゃいますか？」
執務室のドアを開けて入ってきたのはエキザカムだった。
・・・この前はすまなかったな、と頭を下げて謝る。
「？　何のことです？　それより何かお手伝いすることはありませんか？」
エキザカムが？　確かに手伝ってくれれば助かるが、ベッセラの世話はいいのだろうか。

「ベッセラお嬢様が、自分はいいから団長様を手伝ってあげなさい、とおっしゃっていました。この前はずいぶんと疲れているようだから、と」

そうか、ベッセラにも謝っておかねばならないな。そう思いながら、エキザカムと一緒に職務に取り掛かった。

チャノキの愛

「団長くん、この夏もまた海に連れて行ってくれないか?」
　チャノキがそう言いだしたのは、仕事が片付き、辺りも暗くなった頃だった。
「も、もちろん、団長くんが良かったら、だが・・・」
　遠慮しがちな彼女が誘ってくれたことだ、断る理由は無かった。
「そうか・・・ありがとう・・・」
　執務室の窓から差し込む薄い月明かりに、彼女の微笑みが照らされている。その顔は何だか寂しそうに見えた。

　チャノキを連れ、再びバナナオーシャンの海にやって来た。以前の彼女は海を見てはしゃいでいたが、さて今回はどうだろうか。
「ふふ・・・さすがに二度目だ。そこまで驚きはしない。しかし、本当に綺麗だな・・・」
　優しく瞼を閉じながら、チャノキが微笑む。そんな彼女を何とも愛らしく感じる。
　チャノキは長い黒髪をなびかせながら、海の方を見つめている。その目に映るのは、海とそこで遊ぶ人々だ。
「なあ団長くん、あそこで遊んでいる男女はカップルだろうか?」
　チャノキの視線の先には、水着で遊んでいる若い男女の姿があった。
「あんな駆けずり回って、一体何が楽しいんだろうか・・・?」
　彼女の疑問ももっともだが、チャノキは遊ばないでいいのだろうか。
「な・・・私はそもそも水着を持っていないし、それにああいう遊びの楽しさがいまいち分からん!」
　顔を赤くしながら慌てたが、やがて、
「それでも・・・団長くんがああいうことをしたいなら、付き合ってもいい・・・」
　俯きがちにそう言った。

別にチャノキが私に付き合う必要はない。チャノキがやりたいようにすればいいんだ。
「しかし、私はカップルがどうやって遊んでいるのか分からないんだ。前にも言ったが、私は外の世界にあまり触れてこなかったから・・・」
以前彼女が話してくれたことだ。チャノキは茶道の名家の生まれだが、四番目に生まれたという理由だけで家族に軟禁されていたと。
「私なんかと居て、団長くんは楽しいのか？」
楽しい、ただそれだけ答える。
「う・・・変わってるな、君も。私と一緒にいても、普通のカップルのように楽しむことはできないんだぞ」
それでも構わない。私はチャノキが好きだし、一緒に居られればそれだけで幸せだ。
「団長くん・・・まったく君には敵わない。私と一緒に居れば幸せ、なんて言葉初めて言われたぞ」
チャノキはそれだけ言うと、顔を赤くして口ごもった。
「・・・私も・・・私も、団長くんと一緒にいると幸せだ。好きだ、団長くん」
珍しく素直な感情を見せた彼女を、私はそっと抱きしめた。チャノキの黒い美しい髪が揺れ、潮の香りがした。
「団長くん、しばらくこのままいていいか・・・？」
もちろん。チャノキが思うままにするのが一番だ。
「そうか、それではお言葉に甘えて」
そのまま二人で抱き合いながら、寄せては返す波を見ていた。

日が沈み、辺りは薄暗くなった。夜の浜辺には人はほとんどいない。
「あれだけ賑わっていた海も、こうなると少し寂しいな・・・」
チャノキの瞳にも寂しい色が映った。
「なあ、団長くん。私はちゃんと君を愛せているか？」
何とも不思議な質問をしてくる。
「ふふ・・おかしな話だろう。『純愛』の花言葉を持っているのに、人

の愛し方が分からないんだ。今まで誰にも愛されなかったから・・・」
親にすら愛されなかった彼女の苦しみは、私には想像もできない。もどかしさから、柔らかい頬に指で触れる。
「団長くん・・・私はどうやって君を愛せばいい？　この気持ちはどこへ向かえばいいんだ・・・」
ゆっくりでいい。ゆっくり自分と、そして私と向き合っていて欲しい。そうすれば、いつかは分かるはずだから。
「ん・・・そうだな。私が愛を分かるまで、そばにいてくれるか？　団長くん・・・」
勿論だ。ずっとチャノキのそばにいる。青白く染まった浜辺で、そう誓った。
彼女が愛を理解するには、きっと長い時間が必要だろう。
しかし、私はその時が来るまで、彼女と寄り添っていたいと思っている。

クコと過去の記憶

「にぃに。　クコ、体調不良。ヘナ、心配。お見舞い、所望・・なの」
　執務室に入ってきたヘナがそう告げた。どうやらクコが体調を崩して寝込んでいるらしい。
　・・・こうしてはいられない。早くクコに会いに行かなければ。仕事を放り出し、ヘナと一緒にクコの部屋に向かった。
　クコの部屋に着く。ドアをノックすると、
「ん・・・誰・・・？」
　クコの弱々しい返事が返ってきた。
「ヘナとにぃに、クコ、心配。お見舞い、希望・・・なの」
「んん・・・ヘナ、団長・・・」
　部屋に入ると寝巻のクコが、顔を赤くしてベッドに寝ていた。
「二人、お見舞い、感謝。でも、クコ、大丈夫」
　大丈夫には見えないが・・・
「ん・・・病気、無し。でも、朝から頭痛、嫌な感覚・・・」
　医者のクコが言うのだから、本当に病気ではないのだろう。しかし、頭痛とは気になるな。
「団長、ナデナデ、所望・・・」
　そう言って頭をこちらに向けてくる。軽い寝ぐせの付いた髪が何とも可愛らしい・・・と言ってる場合ではない。撫でて少しでもクコが楽になるのなら、いくらでも撫でよう。
「ん・・・団長、感謝」
「むぅ・・・ヘナ、手持ち無沙汰。背中に抱擁、許可？　ヘナ、ギューっ」
「んん・・・ヘナも感謝」
　しばらくすると、クコは安心した顔で寝息を立て始めた。
「クコ、就寝？」
　ヘナが静かな声で聞いてくる。
　このまま休ませておこう。起きたころには元気になっているはずだ。そうヘナに告げる。
「ん、ヘナ、退出・・・なの」

ヘナと一緒に私も部屋を出ようと思ったが、袖を引っ張られる感覚に気付いた。振り返ると、クコが私の袖を軽く掴んでいた。一瞬、彼女が起きてしまったのかと思ったが、目は閉じたままだった。
「にぃに、クコに付き添い、所望。クコ、安心すると思う・・・なの」
ヘナにそう言われたので、しばらくはクコの寝顔を観察することにした。

「ん・・・ふあぁ・・・」
クコがゆっくりと目を開け、背伸びをする。その後、こちらに気付き、驚いたような目を向けてくる。
「だ、団長!? 団長、クコにずっと付き添い？ ・・・クコ、団長に、感謝、心から・・・」
優しい声でそう言うクコの顔色は、随分と良くなっていて、私はホッと安心する。
「でも、団長、仕事、大丈夫？ クコ、眠っていた、長い時間？」
私が好きで一緒に居たのだから、クコが気にすることはない。それに、可愛い寝顔も見れたことだし。そう茶化すように言うと、クコは再び顔を赤らめた。しかし、それは体調のせいではないのは明白だった。
しかし、一体今日はどうしたのだろう。何かあったのか。そうクコに問いかける。
「ん、クコ、夢見た。悪い夢・・・」
夢・・・？ しかし、夢で体調を崩すことがあるのだろうか。
「過去の記憶、多分・・・でも、不明瞭、良く分からない」
クコの失われた記憶と関係あるのか。脳が記憶に何かを制限をかけていて、その一部を開放したせいで体調が悪くなった、ということなら確かに納得がいく。
「団長、クコ、恐怖。過去、楽しい今、壊す、かも」
大丈夫だ、と言ってクコの頭を撫でる。
「んん・・・団長、存在。クコと一緒、ずっと、居てくれる？」
当然だ。クコとずっと一緒に居る。例えクコにどんな過去があっ

ても、例えクコが変わってしまっても、ずっと一緒だ。
「団長・・・クコ、歓喜。団長と一緒、恐怖、薄れる。団長、好き・・・」

その夜、再びクコの部屋を訪ねると、クコはすっかり元気になったようだ。
「えへ・・・団長、今日は感謝！　ヘナにも感謝！」
うむ、ヘナにも伝えておこう。
「団長・・・ナデナデ・・・えへへ、団長、存在、クコ、嬉しい♪」
そう言って、彼女はいつも以上に甘えてくる。
クコは私の腹を、私はクコの頭を撫であい、その夜は過ぎていった。
クコの過去に一体何があったのか、いつかそれを知る時が来るのかもしれない。もしその時が来ても、私はクコの傍にいてあげたい。クコの穏やかな笑顔を見つめながら、そう誓った。

クコとの出会い（前編）

私もようやく自分の騎士団を指揮できるようになった。現在の任務は弱い害虫の討伐がほとんどであり、特に苦も無くこなすことができている。

しかし、団の評価が上がるにつれて、困難な任務も増えていくだろう。今いる花騎士の他にも戦力は増やしておきたいところだ。

「ご主人、取る手に悪手なし。モコウも、新しい花騎士は必要だと考える？」

軍師のワレモコウにもそう言われ、新戦力を探すことにした。

秘書が集めてくれた調査資料に、ワレモコウと一緒に目を通す。しかし、優秀な花騎士のほとんどは何れかの騎士団に所属しており、新戦力探しは難航していた。

そんな時、一人の花騎士に白羽の矢が立った。

「ご主人、このクコという花騎士、なかなか良さそう？　トリトニア調査隊の医療担当？　衛生兵としての活躍も見込める？」

トリトニア調査隊・・・その名前は聞いたことがある。ロータスレイクの湖畔の調査を専門にしていて、隊員は精鋭揃いだと言う。しかし、そんな花騎士が何故どこにも所属していないのだろう。

「それはこの調査資料だけでは判断できない？　直接会って確認するしかない？」

それも一理あるな。悩んでいても仕方がない。取り敢えず彼女にコンタクトをとってみることにしよう。

「ご主人、できればモコウも一緒に確認したい？　でも・・・」

ワレモコウはそう言うと、顔を赤くしてもじもじし始めた。

分かっている。ワレモコウは人見知りだからな。彼女には不在中の騎士団を頼むことにした。

「任せて欲しい？　ご主人も、良い結果が出るよう祈っている？」

というわけで、ロータスレイクにやって来た。最近開国したこの国は、国家のほとんどが湖であり、なんと水中に暮らしている者もいる

という。ブロッサムヒルとはまるで違う、幻想的な景色に思わず目を奪われてしまう。
・・・観光に来たのではなかった。今回はクコと、彼女が所属している調査隊の隊長、トリトニアと会う約束をしている。知り合いの先輩騎士団長にも手を回してもらい、こうして会う約束をすることができた。
手紙によればこの喫茶店で待ち合わせのはずだが、自分も浮足立っているためか、時間よりも大分早く来てしまった。仕方がないので、窓から見える湖でも見ながら待つことにした。
「じー」
ふと視線に気付き、そちらを向くと、小さな金髪の女の子が物陰からこちらを覗いていた。
何か気になるのだろうか。そう思いながら、なるべく優しく微笑みかけると、その子はこちらにトコトコと近づいてきた。
「・・・騎士団、制服、着用。あなた、騎士団長？」
なるほど、この服が気になったのか。そうだ、ブロッサムヒルから来た騎士団長だ、と言うと、
「ん、目標、発見。団長、相席、問題なし？」
そう言いながら、私の向かいの席にちょこんと座った。人と待ち合わせをしているんだが、まあ子供一人くらいなら大丈夫だろう、そう思って同席を許可した。
少女は何とも不思議な口調で話しかけてくる。
「団長、任務、苦労？　助力、必要・・・？」
今のところは大変ではないが、いずれ大きな騎士団になれば大変になるかも知れない、そう答える。
「・・・環境、変化、苦労。それなのに、何故、団長、頑張る・・・？」
少女が難しいことを聞いてくる。しかし、彼女の儚げな雰囲気に、真面目に答えを考えた。
何故頑張るか・・・思えば自分は何故団長になったのか。
その答えは明白だった。害虫により傷付く人々を一人でも減らしたいからだ。そして害虫に脅かされている今を変え、未来に繋げてい

きたいからだ。
「未来・・・クコの考え、未来、変化、不要・・・団長の考えと相違あり。でも、クコ、理解。あなた、団長、悪い人じゃない。それだけで、クコ、安心・・・♪」
少女はそう言ってニコッと笑った。その柔らかそうな口元が何とも可愛らしかった。
・・・ん？　今『クコ』と言ったか・・・？
「あ、もしかして君が団長くん？　初めまして、私はトリトニア」
後ろから声を掛けられ振り向くと、そこにはクリーム色の長髪でマントを羽織った女性が居た。
「あ、クコとはもう仲良くなってくれたんだ。安心したよ」
そう言われ、金髪の少女、クコの方を向き直す。
「ん、クコ、問題なし♪」
「団長、改めて自己紹介。クコはクコ。トリトニア調査隊のお医者さん。漢方、知識あり。団長、体調不良、クコに相談、推奨」
こんな小さな女の子が花騎士・・・しかも精鋭揃いのトリトニア調査隊の一員とは・・・あまりの驚きに声も出なかった。
「むぅ・・・クコ、花騎士。立派な大人」
「あはは・・・でも身体が小さいのは本当なんだけどね」
トリトニアはそう笑って流そうとしてくれたが、クコを怒らせてしまったのは事実なので、素直に謝った。見た目で判断して悪かった、と。
「ふふ、何はともあれ、君が優しい人みたいで良かったよ。君ならクコを預けても・・・預けても・・・うぅ・・・」
トリトニアがいきなりブルブルと震え出す。どうかしたのかと思ったが、クコは平気な顔をしている。
「問題なし。隊長、心配症。でも、クコ、立派な花騎士」
「そ、そうだよね・・元からクコには調査隊以外の活動もして欲しかったんだよ。本人にも良い経験になるしね。でも私と、何よりクコ自身が乗り気じゃなくてね」
そうだったのか。それでどこの騎士団にも所属していなかったの

か。
「肯定。クコ、恐怖・・・変化、恐怖・・・調査隊との今、大事。それで充分。でも・・・」
クコは言い淀むと、私の方をチラチラ見てきた。まるで様子を伺っているように。
「クコ、興味、あり。団長、あなたに・・・」
「・・・団長くん、クコがこう言うのは本当に珍しいんだ。だから、私からもお願いするよ。クコを君の騎士団に入れてくれないかい？」
勿論、今日はそのために来たんだ。むしろこちらからお願いしたいくらいだ。

ロータスレイクの湖に夕日が反射して、きらきらと輝いている。何とも美しい光景だ。
「団長くん、それじゃあクコのことをよろしく頼むよ。あ、勿論たまには調査隊の仕事も頼むと思うけど」
それは構わない。クコのような花騎士が来てくれただけで、こちらの戦力も大幅に上がる。
「うん。それとクコのことだけど・・・これは本人が言った方がいいか・・・」
そう言い淀んで、今度はクコの方に向き直る。
「それじゃあ、クコ。団長くんに迷惑を掛けないようにね。夜は早く寝るんだよ。ちゃんと食事もバランスよく摂って、歯磨きも忘れずにね。体調・・・はクコなら自分で判断できるんだろうけど・・・後はえっと・・・」
何もかも心配するトリトニアを見て、クコは嬉しそうに微笑んだ。
「隊長、心配無用。クコ、頑張る！」
クコという優秀な花騎士を迎え、我が駆け出し騎士団の戦力は整った。
しかし私には、一花騎士として以上にクコのことが気になった。彼女の儚い声や瞳、そしてトリトニアが言いかけたこと。
そして、彼女との出会いが私の人生の分岐点になるとは、その時の

私は思いもしなかった。

クコとの出会い（後編）

「ご主人、今回の任務はモコウ達の勝利？　でも断じて手放しでは喜べない？」
　モコウの言う通り、今回の害虫は強く、何人も負傷者を出してしまった。
「団長、クコ、医学知識あり。クコ、治す、皆を」
　クコが負傷者の手当てに向かう。私も彼女の手伝いをすることにした。
「あい、手当、終了。薬、処方」
　さすが医者と言うべきか、クコは手際良く手当てを終わらせる。彼女のおかげで被害は最小限に留めることができた。

　帰還後、窓の外を眺めていると、クコの姿が見えた。
　薄暗くなった中庭に座っている彼女の、その金色の長い髪が月明かりに照らされている。しばらく私はその光景に見とれていた。
　クコが騎士団に来てから、私の心はどこかにフワフワと浮かんでいるようだった。
　彼女の儚げな瞳、そのことばかりを思ってしまう。
　勿論、騎士団長として花騎士を気にかけるのは当然のことだ。しかし、彼女にはもっと特別な思いがあるんじゃないか。その思いは果たして許されることなのか、私は悩んでいた。
　中庭に降りてクコに声を掛ける。
　クコの長い前髪が夜風に揺れ、朱色の瞳がチラチラと見え隠れする。
「・・・団長？　クコに用事？」
　しかし、話し掛けてから、特に話題がないことに気が付いた。
　取り敢えず隣に座っていいかと許可を求めた。
「ん、許可。むしろ、希望。クコ、団長とお話、所望」
　クコの隣に腰かけると、涼しい風が二人の間を通り抜けた。
　どうだ、騎士団には慣れたか。そんな当たり障りのないことを聞

く。
「あい。花騎士、皆優しい。騎士団、居心地、良好」
そうか、それは良かった。
クコが嬉しそうに話すと、つられて私も嬉しくなる。
「でも、問題、一つあり。団長、あなた・・・」
そう言われて動揺した。私に何か至らない点があるのだろうか。
「団長、存在。クコ、お胸、ズキズキ、苦しい・・・」
クコの言葉の意図をどれだけ考えても、結論は一つしか考えられなかった。
つまり、クコも私のことを特別に思っている、ということだ。
「クコ、団長、好き。でも、恐怖・・・あなたといると、クコ、変わっちゃう」
そう言えばクコと初めて会ったときも、彼女は変化を恐れていた。何か理由があるのだろうか。
「・・・今から言うこと、団長、受け入れられる?」
勿論だ、クコが言うことなら私は受け入れる。そう言ってクコの肩に手を置く。その華奢な身体が小さく震えているのが分かった。
「・・・あい」
「クコ、過去の記憶、皆無・・・」
クコがポツリポツリと話し始めた。
「でも、気にしてない。過去、不要。今、大事・・・一番大事・・・」
彼女が語る言葉の一つ一つが、私の胸に突き刺さっていく。過去の記憶が無いということは、一体どれだけ辛いのだろうか。
「団長、悲しそう・・・何故?」
クコが心配して聞いてくる。クコの痛みを想像していたら、自分でも苦痛の表情を浮かべていたらしい。
「・・・やっぱり、団長、優しい。だからこそ、クコ、苦しい・・・」
「クコ、最近、いつも、あなたのこと、思ってる。これ、変化? クコ、変わっちゃった?」
彼女の大切な『今』に私が入ってきたこと、それが『今』を壊してしまうことを彼女は心配しているのだろう。

思わず彼女の小さな身体を抱きしめる。
「んん・・・団長、暖かい。クコ、ポカポカ」
顔まで赤くしながら彼女が囁く。
「団長、もう少し、このまま、希望・・・」
クコが私の胸に顔をうずめる。夜風が彼女の長い髪を撫でると、何故だか懐かしいような匂いを感じた。

朝日が部屋を照らす。その眩しさで私は目覚めた。ふと隣に気配を感じたのでそちらを向くと、クコが寝息を立てていた。
「んん・・・団長・・・？」
・・・そう言えば昨日の夜、眠くなったクコを抱えて執務室に運んできたのだった。
「団長、クコ、運んでくれた？　クコ、感謝♪」
彼女が微笑むと、軽く寝癖が付いた髪がフワッと揺れた。
取り敢えず一緒に朝食を摂ることにした。
適当に作っただけだったが、クコは満足してくれたらしい。
思えば誰かと朝食を共にしたのはいつ以来だろう。クコの頬に付いた米粒を取ってあげながら、そんなことを思った。
「団長、漢方、摂取、推奨」
朝食後、クコが漢方を私に差し出してきた。そう言えば彼女には漢方の知識があったのだった。
「疲労回復、効果あり。団長、激務、疲労、蓄積？」
確かに、最近は難しい任務を任されることも増えた。それ自体は嬉しいことだが、身体がついていかなければ元も子もないな。そう思って漢方を口にする。
舌に苦みを感じる。苦しそうな顔をした私を、クコはニコニコと見守っていた。
「団長、クコ、昨日・・・」
クコが俯きがちに囁く。昨晩私に言ったことを気にしているのだろか。

「クコ、団長のこと、好き・・・大好き・・・」
彼女は耳まで真っ赤にしている。頭をそっと撫でると、目を閉じて受け入れてくれた。その様子がまるで小動物のようで可愛らしい。
「えへへ♪　クコ、感激」
そのままクコと一緒にソファーに座ると、彼女は頭を私の肩に預けてきた。昨晩も感じたことだが、彼女の匂いはなんだか優しく、懐かしい。最近会ったばかりなのに不思議だ。
「団長、クコ、不安・・・」
クコは『今』が大事だと言った。だからこそ『今』が変わっていくのが怖いのだろう。その思いは直ぐに変えられるものではない。しかし・・・
しかし、私はクコの傍にいたい。クコがいつか過去も未来も受け入れられるようになるまで。彼女の目を見てそう約束した。
「団長・・・クコ、嬉しい・・・いつか、クコ、全てを受け入れられたら、そうしたら・・・」
クコの口がもごもごと動く。何かを迷っているようだ。
「・・・何でもない」
彼女の愛らしい瞳が私を見つめ返す。言おうとしたことは気になるが、今はそれで充分なのだと思った。
「団長、クコとずっと一緒、約束♪」
そう言って小さな小指を立てて私に見せる。
私も小指を立てて絡ませる。そのままクコの手を握り、今日の任務に向かうのだった。

ステラとお出掛け

「わあぁぁぁぁ!!」

甲高い叫び声が聞こえたので、何事かと廊下に出てみる。そこには泣きべそをかいたステラの姿があった。一体何があったのか聞いてみる。

「あ、団長さん!!　助けて下さいぃ！　また綺麗好きの花騎士さんたちがボクの部屋を掃除するって押し寄せてきたんですよ～！」

・・・何だそんなことか。

「そ、そんなことって何ですか!?　ボクにとっては重要なんですよ。寝っ転がっていても物が取れる理想の配置、それを崩されるなんて！」

しかしステラの部屋は実際きたな・・・散らかっているので、少しは掃除した方が良いだろう。

「うう～、団長さんは味方だと思ってたのに～」

彼女のことが少し哀れに感じたので、掃除の間は執務室に置いておくことにした。

「えへへ・・・不幸中の幸いって言うんですかね？　今日は団長さんの執務室にずっと居られるなんて」

そう言いながら自分の周りに物を散乱させている。彼女が来てから一時間程度しか経っていないはずだが・・・

「？　どうしました団長さん？　団長さんも一緒にゴロゴロしましょうよ～」

仕事も残っているのでゴロゴロは出来ないが・・・

しかし気になる。これだけ物が散乱していたら仕事に集中できない。

そこでステラに外出の提案をしてみた。

「え～・・・お外はあまり出たくないです。人と会うのとか、苦手なんですよ」

それは重々承知だが、このままでは執務室が・・・

一つ思いついたことがあった。私と一緒に外出しないか、と聞いて

みる。
「だ、団長さんとっ!?　嬉しいですけど、お仕事は大丈夫ですか？」
まあ、そこは大丈夫だろう。
出発前、ステラには内緒で他の花騎士に執務室の掃除を頼んでおいた。

「えへへ・・・団長さんとデート・・・嬉しいです♪」
支度を済ませ、私の腕に抱き付いてくるステラ。にっこりと微笑む彼女がとても可愛らしい。
「でもボクはお部屋デートの方が好きなんですけどね・・・うう、掃除さえなければ・・・」
まあそう言っても仕方がないだろう。
ところでどこか行きたい場所はあるか。
「う～ん、デートってどういう所に行くんですか？　いまいち分からなくて・・・」
デートの定番と言えば、服選びやお洒落なカフェでお茶をする、などだろう。
「それじゃあ今日は団長さんにお任せしますね」
お任せされてしまった。うむ、ちゃんとエスコートできるよう頑張ろう。

「団長さん、着替え終わりました・・・」
ステラがそう言ったので試着室のカーテンを開けようとしたが、
「わぁっ！　ま、待って下さい！　こ、心の準備というか・・・その・・・」
別に私に見せるだけなのだから、心の準備なんて必要だろうか。
「団長さんだからです・・・ってうわぁ！」
カーテンを開けると白いワンピースを着たステラがもじもじしていた。
「うぅ・・・ワンピってひらひらしていて落ち着かないですね・・・」
しかし思った通り、良く似合っている。とても可愛いぞ。
「か、可愛いなんてそんな・・・えへへ、団長さんはこういうの好きな

んですね」
うむ、だから今日はその服のままデートをしよう。
「ええっ！　今日一日ですか!?」
白ワンピのステラと共に街を歩く。
「な、なんか視線を感じます・・・ボク変でしょうか？」
いや、ステラが可愛いから皆見てしまうんだろう。そんなステラを連れていることを誇りに思う。
「可愛いですか・・・本当に・・・？」
返事はせずに手を握り、指を絡ませる。ステラの体温は見る見るうちに上昇し、顔も真っ赤になっていた。
「だ、団長さん手は・・・手汗とか・・・あ、いえ嫌じゃないですし、むしろ嬉しいんですけど・・・あうぅ・・・」

ステラと一緒にカフェにやって来た。雑誌などでも紹介されている有名な店らしい。
そのためか、周りには若いカップルが多い。
「おお、内装もオシャレですね～。・・・ボク場違いじゃないでしょうか？」
むしろ私の方が場違いだと思うが・・・
取り敢えず二人用のパフェを注文してみる。
「これがカップルパフェ・・・ってカップル!?」
大きなアイスクリームに二つのスプーンが刺さっている。
その一つを取り、ステラに差し出す。
「だ、団長さん・・・いきなりそんな・・・あーむ」
どうだ？
「あ、味が分からないですぅ・・・もう、団長さんにもお返しです！あーんして下さいっ」
それではお言葉に甘えて。
「うぅ、どうして抵抗無いんですか・・・」
ステラから差し出されたアイスの味はとても甘かった。

辺りを見回すと、もう太陽は沈み、オレンジ色の光で満ちていた。楽しい時間はすぐに去っていく。
「えへへ、団長さん次はどこ行きますか?」
ステラはいつの間にか外を歩くことにも、手を繋ぐことにも慣れてきた様子だった。
「は、恥ずかしいのは変わらないんですからね? でもそれ以上に嬉しくて・・・幸せで・・・」
ステラはうっとりとした顔で私を見つめてくる。そんな彼女がとても愛おしく感じ、そっと唇を合わせた。
「んんぅ・・・団長さん・・・好き、です・・・」
私も好きだ。そう答えて再びキスをする。
夕暮れに引き伸ばされた二つの長い影が重なる。辺りが暗くなるまで、二人はそのまま動かなかった。

その夜、執務室がノックされステラが入ってきた。
「団長さん、そう言えばボクの部屋掃除されてたんでした。落ち着かないんでここに居ても・・・って執務室も掃除されてる!?」
すまない、ここの掃除も頼んでしまった。
「あうぅ・・・まあいいです。団長さんが居る所なら何処でも。今晩はよろしくお願いします」
そう言ってゴロゴロして、再び散らかし始めるのだった。
・・・彼女のためなら少しくらい散らかっていてもいいか、ほんの少しだけそう思った。

リシアンサスと秋の訪れ

うだるような暑さは和らぎ、最近は過ごしやすくなってきた。強者揃いの我が騎士団も暑さには苦しめられてきたが、もうそんな心配は無いだろう、そう思って騎士団の庭を散歩していると、うんうん唸っている少女を見つけた。

「う～ん・・・この先はどうすれば・・・」

紫色の三つ編みに、ウエスタン風の服装をした少女、リシアンサスだ。

「あ、団長さん！　何してるのかって？　今書いてる絵本の展開を考えてるんですよ。良かったら団長さんも手伝ってくれませんか？」

リシアンサスは絵本が好きが高じて、自分でも絵本を書くようになった。しかし、彼女の書く絵本は悲しい展開のない、ハッピーだけを詰め込んだものだ。

以前は子供の読者からそれを非難されていたものだが、最近はどうなのだろうか。

「最近ですか？　まあ、手厳しい意見は未だにありますが、『面白かった』、『元気を貰った』って感想も貰えてますし、それにお便りの数が増えたのが何より嬉しいです！」

元気いっぱいにそう答えるリシアンサスの書いた絵本なのだから、きっと子供たちにも元気を与えられているのだろうと思った。

「そして今書いてるのは『秋』を題材にした絵本なんですよ！　ほらこんな感じで紅葉とかおいしい食べ物とかがたくさん出て来るんです」

リシアンサスが書きかけの絵本を見せて来る。

ふむ、お姫様が秋の世界を冒険するファンタジーか・・・紅葉が色鮮やかだし、絵本映えするテーマではないかと思う。

「ですよねですよね。夏って楽しいことがいっぱいあるじゃないですか。海水浴や潮干狩り、花火に夏祭り！　私、夏って大好きなんです。でも秋にだって色々楽しいことがあるし、夏を懐かしがってばかりいては勿体ないなと思うんです。そんなことを皆に伝えたくて」

なるほど、それは確かに前向きなリシアンサスらしい題材だ。私に

できることがあるのなら協力しよう。
「ありがとうございます、団長さん！」
彼女がニコッと笑うと、可愛らしい八重歯がちらりと見えた。
しかし私は一体何をすればいいのだろう。
「団長さんには、私と一緒に秋らしいことを探して欲しいんです」
秋らしいことか・・・
「もう夏は終わりましたけど、紅葉には少し早いし・・・イメージが湧きにくいというか・・・」
なるほど、では一緒に秋らしいことを見つけようか。
「はいっ！」

とは言えすぐに思い付くことがなかったので、取り敢えずリシアンサスの部屋に招かれた。
「いらっしゃい団長さん！　さあどうぞ、今お茶もいれますから」
テキパキと私をもてなす彼女だが、その顔はうっすら赤らんでいる。
「へ？　あ～これですか？　団長さんとずっとおしゃべりできると思うと興奮しちゃって・・・」
リシアンサスはその花言葉『良い語らい』が示す通り、とてもおしゃべりが好きな花騎士だ。
「えへへ、誰かとおしゃべりをすると、それだけで楽しくなって何時間も話しちゃうんですよね。その中でも、団長さんとのおしゃべりは特別楽しいです」
嬉しいことを言ってくれる。私もリシアンサスとのおしゃべりは好きだ。そう返す。
「す、好きっ!?　それはその・・・すっごく嬉しいです・・・」
珍しく俯きがちになって照れているようだ。
リシアンサスの部屋には本が多い。特に絵本がたくさん置いてある。
「ここにあるのは、子供の頃から大好きな絵本ばかりなんですよ」
「絵本って元気をくれたり、楽しい気分になったりするから凄く好き

なんです！　例えばこれなんて、私が花騎士になったばかりで不安だった時に、とっても元気付けてくれたんです。特に終盤の展開が」
リシアンサスは話し出すと止まらなくなってしまう。
しかしこのままでは絵本製作も滞ってしまう、そう思って彼女を静止した。
「ハッ！　そうでした、絵本の題材探しですね」
まあ、まずは読書の秋といったところか。
「そう、私はそれを言いたかったんです！　というわけで団長さん、一緒に読書しましょう！」
絶対今思い付いただけだと思うが・・・
さすがのリシアンサスも本を読んでいれば大人しくなるだろう。
そう思ったが、私の見立ては甘かった。
「あ、そのページ、特にお気に入りなんです。ここと良くないですか？」
「それを初めて読んだのは確か騎士学校時代で・・・」
「あ、その本も良いですよ！　私はこのキャラがお気に入りで・・・」
あの、少し大人しくしてもらえないだろうか。
「あ～ごめんなさい。好きなことになるとつい・・・気を付けます」
そして二人で読みかけの本に目を落とす。リシアンサスとは、話していても楽しいが、黙っているのも案外良いものだなと思う。
ふと彼女の方を見る。寝転がって脚をパタパタさせているのが何とも愛らしい。
「団長さん、そろそろお腹減ってきません？」
そう言えばまだ昼食を摂っていなかった。これは食欲の秋だろうか。
「おお、秋ってそれら中に転がってるんですね。気づきませんでした。それじゃ私ホットドッグ作ってきますね」
ホットドッグはあまり秋らしくはないが。
「えへへ、まあいいじゃないですか」
二人でホットドッグを頬張る。さすがのリシアンサスも食べている時は静かだ。そのちょこんと飛び出た八重歯がパンにかぶりつく

様が可愛らしい。
「団長さん、口にケチャップ付いてますよ。え、私も？」
互いに口元のケチャップを拭い合う。
「えへへ・・・ありがとうございます、団長さん・・・あっ！」
リシアンサスは何かを思い付いたようだった。
「絵本の展開ですよ。忘れない内に書かなくちゃ！」
そう言ってせっせと絵本を書き始める。そんな彼女を見ていると私も元気を貰える。まるで彼女の絵本の読者のように。
彼女が作業を終えた頃、窓の外は薄暗くなっていた。
「ふぅ～・・・大筋は出来た・・・あとは細かい所を仕上げて・・・ってすみません団長さん！　何もおもてなしできなくて」
いや、リシアンサスの一生懸命な姿を見ているだけで楽しかった。
「ホントですか？　えへへ、そう言われると何だか嬉しいです！」

リシアンサスと共に夜の庭を散歩する。ついこの間まで熱帯夜で苦しんでいたのが嘘のように、今宵の風は涼しく吹き抜けている。
「団長さん、今日はありがとうございました。おかげで絵本が完成しました！」
別に私は何もしていなかったと思うが。
「いえ、私の書く絵本ってハッピーな展開ばかりじゃないですか？だから私自身ハッピーな気持ちじゃないと書けないんです。団長さんと一緒だと私、凄くハッピーになるから・・・だから今日も書けたんだと思うんです」
そうか、役に立ったなら良かった。しかし、私もリシアンサスと一緒にいるとハッピーになる。だからお互い様だ、そう伝える。
「団長さん・・・好きです、団長さん・・・」
そう言って彼女は頭を私の肩に預ける。涼しい夜風に紫色の三つ編みが揺れていた。
「あ、団長さんと一緒に見る夜景、凄く素敵です。まるで芸術ですね・・・芸術の秋、ですかね」
リシアンサスの頭をポンと撫でる。遠くから聞こえる虫の音に、秋

の足音を感じた。

コナラとシイタケの秋の過ごし方

朝日が眩しく照らす中庭を、眠い目を擦りながら歩く。昨日は任務で忙しく、あまり寝る時間が無かった。熱帯夜が過ぎ去り、ようやく寝やすくなってきたので、今日こそちゃんと寝たい気分だ。

そう思っていると、向こうでコナラが走っているのが見えた。

「あ、団長さん！　おはようございます！」

向こうもこちらに気付いたようで、ブンブンと腕を振って挨拶をしてくる。しかし足元に注意した方が良いのではないか、そう思った矢先、

「うわぁっ！」

コナラが何もないところでつまづき、そのまま一回転した。

「うぅ・・・すってんころりんしちゃいました・・・」

心配して足早に駆け寄り、彼女に手を貸す。

「あ、ありがとうございます団長さん。恥ずかしいところ見せちゃいましたね・・・」

彼女の小さな手が私の手を握り返す。軽い身体はヒョイっと簡単に立ち上がる。

コナラは運動神経は良いのだが、頻繁に転ぶ癖がある。

「自分でも直したいと思ってるんですけどね・・・」

トレードマークの大きな帽子を直しながら、コナラは恥ずかしそうにモジモシしていた。

ところでコナラは今日も日課の訓練をしていたのだろうか。

「はい！　私は他の花騎士さんより才能がないですし、その分努力しないといけませんからね」

コナラもちゃんと活躍しているのだし、他の花騎士より才能がないとは思えないのだが。

「えへへ・・そう言ってもらえると嬉しいですけど、やっぱりシイちゃんみたいな天才と比べてしまうと・・・」

シイちゃんとは彼女と同郷の花騎士、シイタケのことだ。

「シイちゃんは本当に凄いんですよ～。私の訓練を見てただけで花騎

士としての戦い方をマスターしちゃうんですから。それに魔力も凄いし」
確かにシイタケの魔力は花騎士たちの中でも並外れたものがある。
「そうなんですよ。私じゃまだまだ追いつけないです」
しかしコナラがシイタケより優れている所もあるだろう。例えばシイタケには体力が無い。これは明確にコナラの方が優れている点だ。
「あっ・・・そうですよね・・・そう言われると私、少し自信が出てきました。よーし今日はまだまだ走りますよー」

コナラのランニングに付き合っていると、日陰のベンチで寝ころんでいる一人と一匹を見つけた。
「あ、シイちゃん！　それにドンさんも！　もうこんな時間に何してるんですか～」
長い金髪の少女、シイタケがむくりと身体を起こす。
「コナラ？　もう～せっかく気持ちよくお昼寝してたのに起こさないでよ～」
時計を見ると午前9時を指していた。昼寝にしては早すぎるのではないか。
「まぁボクは寝たい時に寝たい場所で寝るからね。それじゃお休み～」
「待って、シイちゃんも一緒に運動しよ？　誰かと一緒に走るのって、とっても気持ちいいんだよ。そうですよね、団長さん？」
コナラの言葉に頷く。
それにシイタケは余りにも体力が無いのだし、少しは運動した方が良いのではないか。
「うぅ～・・・団長までそんなことを・・・」
「たまにはいいでしょ？　ね」
コナラの目がキラキラと輝きシイタケを見つめる。その視線にシイタケはたじろいでいるようだった。
「・・・分かったよ。少しだけなら・・・」

「えへへ、ありがとうシイちゃん！」
元気いっぱいの笑顔を見せるコナラが何とも可愛らしい。
その時、彼女の足元で小さな影のようなものが動いたように見えた。
「もちろん、ドンさんもですよ」
「!?」

「いちに、さんし・・・最近涼しくなってきましたからねぇ、運動するにはもってこいですよ」
そう言いながらストレッチをするコナラ。ぐったりとする一人と一匹。
「はぁ・・・はぁ・・・コナラ、少し休憩しよう」
「シイちゃんもドンさんも、まだ準備運動なんですからね」
「コナラの鬼軍曹・・・」
そう言って頬を膨らますシイタケ。
彼女のあまりの体力の無さにクスっと笑ってしまう。
「もう笑い事じゃないんだよ・・・ほらドンさんもへたばってるし、ちょっと休もうよ～」
「もうシイちゃんったら仕方ないんだから・・・」
コナラは何だかんだいいながらも、シイタケを座らせお茶を飲ませている。二人の様子がとても微笑ましく感じる。
「幼馴染ですからね、シイちゃんが体力無いのは重々承知ですよ」
コナラがそう言っている最中に、シイタケがぐだーっと寝そべり、コナラの太ももに頭をのせる。
「でも今日みたいに一緒に運動してくれることってほとんど無かったんですよ。だから不思議で・・・」
シイタケの頭を撫でながらコナラがそう告げた。
「さて、もう一頑張りしよう、シイちゃん」
シイタケも腹を括ったのか、むくりと起き出した。
「仕方ないなぁ・・・それじゃあもうちょっとだけ・・・」
その時、シイタケの目がチラリとこちらを向いたような気がした。

「皆お疲れ様でした」
コナラにタオルを渡される。
結局あの後は軽いランニングをしただけで終わった。おそらくシイタケに配慮したのだろう。
「はぁ・・・はぁ・・・も、もうダメ・・・」
しかしそれでもシイタケはへたばっている。こんな体力で大丈夫だろうか・・・
「さて、私はまだ訓練続けるんですけど、もしよかったら団長さんもどうですか？」
「あ、ちょっと待って。団長はボクとお昼寝しよう？　何だか疲れてるみたいだし」
二人から同時に誘われてしまった。
コナラの訓練にも付き合ってやりたいが、疲れているのも確かだ。うーむ、悩める。
「そういえば団長さん、昨日も夜遅くまで仕事してましたね。ごめんなさい、私ったら・・・」
別にコナラが謝ることではない。それに適度に身体を動かした方が寝付きも良くなるだろう。
「でも・・・分かりました。それじゃあ私も団長さんとお昼寝します」
急な申し出に私もシイタケも口をポカンと開けて唖然とする。
「コナラがお昼寝なんて珍しいね・・・どういう風の吹き回し？」
「団長さんのこと疲れさせちゃったんで、そのお詫びです。団長さんのこと寝かしつけてあげますからね！」
そう言われ腕をぐいぐいと引っ張られる。

シイタケと一緒にコナラの部屋にやってきた。良く整理整頓されていて、真面目なコナラらしい部屋だ。
「団長さん、ゆっくりしていって下さいね」
ピンク色の寝間着に着がえたコナラが現れる。頭には茶色い大きな帽子をかぶっている。いつもの帽子ではなく、就寝用のものなのだ

ろう。
「えへへ・・勢いで誘っちゃいましたけど、男の人を部屋に上げるのって何だか恥ずかしいですね・・・」
「大丈夫、ボクも居るから。二人だけだと変な雰囲気になりそうだし・・・」
「し、シイちゃん！　なんてこと言うの！」
　耳まで真っ赤にしてコナラが怒るが、シイタケはじとっとした目で彼女を見つめていた。
「さすがに三人は狭くない？」
「そうかな～」
　コナラのベッドは一人用だ。二人がいくら小柄とは言え一緒に寝るのは難しいだろう。
「取り敢えずボクはベッドで寝たいよ・・・」
　二人くらいなら寝られるだろう。私は床で布団を敷いて寝ることにしよう。
「ダメですよ～、お客さんを床で寝かせるなんて・・・それなら私が下で寝ますから」
「団長と二人・・・悪くないかも・・・」
　シイタケの顔がいつの間にか真っ赤になっていた。
「それにしても最近本当に涼しくなりましたよね。私秋って凄く好きです。運動もたくさんできるし、眠りやすいし・・・」
　ベッドに入って何分も経っていないが、コナラの寝息が聞こえてきた。本当に寝つきが良いな。運動で体力を消耗したのも関係しているのだろうか。
「コナラ、眠っちゃったみたいだね」
　耳元でシイタケに囁かれたので彼女の方を向くと、相変わらずのジトっとした目で私を見つめていた。
「今日は久しぶりに運動したけど、案外悪くなかったよ。コナラと、キミと一緒だったからかな？」
　コナラの静かな寝息に、シイタケの優しく囁く言葉が重なる。
「ボク、キミのこと結構気に入ってるのかもね・・・って言っても運動

はしばらく無しね」
　そう言われて、先程の息を切らしていたシイタケの様子を思い浮かべてしまう。
「きっとコナラも一緒だよ・・・キミのこと好きだと思う・・・」
　そう言ってシイタケも眠りについた。私は胸の奥がじんわりと暖かくなる感覚を、いつまでも感じていた。

「んんぅ・・・あっ、団長さん」
　目を覚ましたコナラがむくりと起き上がりベッドを覗く。
「あれ？　シイちゃんは」
　言われてみれば隣のシイタケの姿が無い。替わりにメモが置いてあった。
『自分の部屋でもう一眠りしてきます』
「もうシイちゃんったら・・・でも何だかんだでシイちゃん、団長さんのこと好きなんだと思います。そうじゃなきゃ今日だって一緒に運動してくれませんでしたよ」
　ベッドの中で同じようなことを言われたとコナラに話す。
「やっぱりそうでしたか。でも・・・」
　途中で言葉に詰まったコナラだったが、顔を赤く染めながら次の言葉を紡いだ。
「でも私も団長さんのこと好きですからね！」
　大きな帽子がゆさっと揺れる。私がその頭を撫でると、彼女の頬はさらに赤くなった。
「だから三人でずっと一緒に居ましょうね、団長さん！」
　コナラの言葉は私の胸の奥でずっと木霊していた。

ランタナの、お菓子は爆発だ！

一点の雲もない、美しい青空。窓を開けると涼しい風が通り抜ける。

今日は緊急の任務もなく、比較的平和な一日を過ごせそうだ。

机の上の書類に目を通す。結局はこの処理に追われ一日が終わりそうだ。

ふと一枚の書類が目に入る。火気使用の許可申請書とあり、申請者はランタナになっている。

・・・嫌な予感しかしなかったので、本人に直接確認することにした。

「どしたのだんちょ？　あ、わかった！　私とデートしたいんだなぁ。もーだんちょったら、真面目に仕事しなきゃダメだじょー」

とんちんかんなことを言われるが、今日は火気使用の件を聞きに来たのだ。

「あ～、新しいお菓子を開発しようと思ってね。ほら、前私の必殺技でケーキ作ったでしょ？　あの応用ができないかなぁと思ってさ」

あの時は酷い目に遭った。お菓子作りならもっと平和に、女の子らしくできないものか。

「それじゃあ楽しくないじゃん！　やっぱりお菓子は爆発だー！」

飽くまで花騎士には自由に活動して欲しいと思っているので、今回は消火の準備をきちんとすることを条件に許可した。

しかし心配ではあるので、私も当日一緒に立ち会うことにした。

「えへへ～、お菓子作り～♪　だんちょと一緒にお菓子作り～♪」

満面の笑みを浮かべ上機嫌のランタナ。その様子はとても可愛らしいのだが、これから起こることを想像すると胃がキリキリ痛む。

「どうだんちょ、ランタナのエプロン姿は？」

ランタナはピンク色のエプロンをフリフリして私に見せてくる。

とても可愛いし、似合っている。そう伝えるとランタナの頬もピンクに染まったように見える。

「えへへ、本当？　だんちょったら褒めるのが上手いんだから。この色男め～」
そう言って照れ隠しのように私の脇腹を小突いてきた。
水の入ったバケツ、消火器、そして防護服とガスマスク。準備は整ったが、そもそもこの部屋が無事で済むのだろうか。
「大丈夫大丈夫、加減するから。さてこうやって材料を入れて・・・爆破！」
ドカンと大きな爆発音がして、黒煙が巻き上がる。やがて煙が晴れて、中からケーキが姿を現した。
「やったー、完成！　ほら、だんちょもどうぞ」
あーんと言いながら私の口にケーキを押し込む。
確かに味は良い。美味い。
「でしょ。よーしどんどん作るぞー」
右手を高く掲げてそう叫ぶランタナ。加減は出来ているようだし、意外と大丈夫かも知れない。
ドカン！　ドカン！　ドカーン!!
何度も鳴り響く爆発音。それを聞く度に胃がキリキリしてくる。
「こいつぁうめぇぜ！」
完成したお菓子をモグモグと平らげるランタナだったが、あまり調子に乗っていると・・・
「あっ」
一際大きな爆発が巻き起こり、その爆風に二人の身体も吹っ飛ばされる。
「あ～れ～」
「げほっ・・・酷い目に遭った・・・」
身体が真っ黒になり、なぜかアフロになったランタナが煙の中から現れた。
「うわぁっ！　部屋が真っ黒焦げ！」
なまじ許可をしてしまっただけに、この後はランタナと一緒にこっぴどく怒られるのだった。

「うぅ・・・ごめんねだんちょ・・・」
数時間に及ぶ説教の後、ランタナはしょんぼりと肩を落としながら私に謝ってきた。珍しいこともあったものだ。
「だって・・・今回は私のせいだし・・・別にだんちょまで怒られる必要はないのに・・・」
そこに引け目を感じていたわけか。
確かに毎回のいたずらには反省すべきだが、少なくとも私はそんなランタナが好きだし、引け目を感じる必要はない。彼女の頭をポンと撫でながらそう言った。
「す、好き・・・？　だんちょったら、こんな時に愛の告白なんて・・・」
はぐらかされたくなかったので、もう一度好きだと言うと、彼女の頬はどんどん赤くなっていった。
「あぅ・・・だんちょのロリコン・・・私も好き」

翌日、ランタナに呼ばれたので彼女の部屋を訪ねた。
「だんちょ！　私におしおきして！　さぁ、殴ったり蹴ったり、煮たり焼いたり、お尻ぺんぺんしたり、健全版では書けないようなこともしていいんだじょ！」
どういう風の吹き回しか知らないが、ランタナにそんなことはしない。そうハッキリと告げた。
「でもでも、それじゃ私の気が収まらない！　おしおきして～、えっちなやつ～」
最早それが目的になってないか？
「ってのは冗談だけど・・・本当にだんちょの好きにしていいんだよ？」
そうか、ならば一つして欲しいことがある。
ランタナと一緒に公園を訪れる。人はまばらで、涼しい風が二人の間をすり抜けていった。
「こんな所に連れ出して・・・だんちょはそういう趣味があったの？」
そうではない。ここで一緒にお菓子を食べないかと思ったんだ。
「ここで？　そんなことでいいの？」
勿論だ。ランタナと一緒なら、こんなに幸せなことはない。

「あうぅ・・・そんなに褒めて・・・だんちょ、もしかして意地悪してる？」
　別に、素直な気持ちで言っただけなのだが・・・
「それじゃ・・・えいっ！」
　この前の技を使ってお菓子を作ってもらった（相変わらずどういう原理かは分からないが）。
　ここなら室内よりは安全だろう。もちろん人も少しはいるので、威力はかなり抑えてもらっている。
「うっほほーい！　できたじょだんちょ」
　ランタナの手の中にクッキーが出現する。どうやら成功のようだ。
「はむはむ・・・やっぱり出来立ては美味しいね」
　小さな口でクッキーを頬張る、その姿が何とも可愛らしい。釣られて私も一枚。仄かな甘さが口の中で溶けていく。
「だんちょ・・・ありがと」
　顔を赤らめながら唇を寄せてくるランタナ。
　そっと触れた唇には、甘いクッキーの香りが残っていた。

クコとお月見

「団長、今日の夜、予定あり？　なければクコ、団長と一緒、希望」
クコにそう誘われた。特に予定はなかったので、今晩はクコと二人で過ごすことにした。場所は私の部屋でいいだろうか。
「団長の部屋、う～ん・・・少し、遠出、所望」
どこか行きたい所でもあるのだろうか。では今晩はクコに任せることにしよう。
「あい♪　クコ、デート、任された」

虫の声が聞こえる夕闇の中、クコと城門前で待ち合わせをした。しばらくすると大きなリュックを背負ったクコがやって来た。
「団長、お待たせ。デート、遠出、クコ、ワクワク」
許可は取ってきたので今晩はどこへ行っても良いことになっているが、一体どこへ行くつもりだろうか。
「んん・・・秘密。クコ、案内する」
砂利だらけの山道をヒョイと軽々歩くクコ。さすが花騎士だ。
「団長、疲労？　漢方、飲む？」
こちらも騎士団長だ、問題はない。しかし漢方は貰っておこう。
「団長、こっち、こっち」
振り返ってこちらを手招きするクコ。結構歩いたはずだが、随分と元気だな。こちらはかなり身体に堪えているというのに・・・
二人でやってきたのは広い草原だった。周りには人は誰もおらず、生い茂った草が風にゆらゆら揺らめいている。
今晩の風は肌に冷たく吹いてくる。二人分の上着を持ってきて良かった。
「団長、ここ、座る。お月様、綺麗」
成程、お月見をしたかったわけか。もうそんな時期か。
シートを引いてその上に二人で座る。疲れた身体には草の感触も優しく感じた。
ふと空を見上げる。真っ黒い夜の闇に、黄色い満月が浮かんでい

る。雲は一つもない、まさにお月見日和だ。
「お月様、大きい、綺麗・・・」
月を見上げるクコの横顔が、薄い月明かりに照らされて、ぼんやりと光っている。
「団長、クコ、お団子、持ってきた。クレソン、作った、お供え、余り」
背負っていた大きなカバンから団子を取り出すと、私の口に近づけて「あーん」と食べさせようとしてくる。
甘い味が口の中に広がる。お返しとばかりにクコに団子を差し出す。
「あ～ん・・・ん、美味♪」
口をもぐもぐ動かしながら微笑むクコが愛おしく感じた。
「風、冷たい。クコ、毛布、所持。団長、一緒にくるまる、推奨」
毛布にくるまったクコが私に手招きをする。お言葉に甘えて一緒に入らせてもらうと、毛布の中はクコの体温で暖かくなっていた。
「ぬくぬく。クコ、満足。団長も、ぬくぬく？」
ああ、とても暖かい。
「ん・・・でも、まだ、顔、冷たい」
クコはそう言うと顔を近づけてくる。そのまま頬同士をくっつけると、夜風に当たった冷たい肌が、どんどん火照っていくのを感じた。
「顔もぬくぬく・・・クコ、団長、体温、共有。クコ、幸福♪」
子供のように無邪気に笑うクコ。その柔らかい頬に手を寄せると、彼女は私の手に頬ずりをしてきた。

クレソンの作った団子を二人で食べながら月を眺める。
特に何か話すわけではないが、二人の体温、空気を共有できるだけで、何だか幸せな気分になってくる。
「お団子、美味。お月見、満足。でも、一つ、不足。団長、何か、理解？」
不足しているものか・・・何だろう。
「えへへ・・・お酒、クコ、持参♪」
おいおい、それは駄目だと言っただろう。

「あぁっ！　団長、お酒、奪取、何故!?　クコ、やっぱり、お酒、駄目？」
駄目だ。理由はここでは言えないが・・・
「むぅ～・・・クコ、しょんぼり・・・団長とお酌、不可・・・」
まあ、いずれは酒も一緒に飲めるようになればいいな。取り敢えず今日はジュースにしておこう。
「・・・あい」
しょんぼりとしたクコの肩をポンと叩く。華奢な肩が冷たくなっていたので、しばらく私の手で温めようと思った。

「団長、クコ、眠い・・・」
クコの身体がこっくりこっくりと舟を漕ぎ始める。
しかしこんな所で寝て、風邪をひかないだろうか。
「毛布、団長の身体、ほかほか。問題無し」
医者のクコがそう言っているが、どうにも信用できない。寝るのならちゃんと部屋に帰ってからにしよう。
「んぅ・・・帰る・・・団長の部屋・・・」
やがてすぅすぅと吐息が聞こえ始めた。クコの目は閉じたままで、その小さな腹が呼吸で上下しているだけだった。
・・・仕方がない。クコをおぶって帰ることにしよう。
可愛らしいその頬を突っついてから、帰りの支度を始めた。
薄暗い秋の夜に、クコを背負って歩く。闇の中で虫の声とクコの吐息だけが聞こえる。
「ん・・・団長・・・?」
声がしたので振り返ると、クコが眠たそうな目を擦っていた。
「団長、ごめんなさい。クコ、団長に、迷惑、掛けた」
迷惑なんかじゃないさ。私も騎士団長だ。クコ一人を背負って歩くくらい何てことはない。
「団長、感謝、心から・・・」
クコの赤く染まった頬が月明かりに照らされる。何とも美しいその光景に、しばらく見とれていた。

その後、クコと手を繋いで歩いた。
二人で触れ合っていると、秋の夜風も冷たく感じないから不思議だ。
「団長、来年も、お月見、所望。クコ、今から、楽しみ♪」
幸せそうなクコの顔を見ると、こちらも幸せになってくる。
そっと彼女の唇にキスをする。
抱き合った二人を満月だけが見ていた。

コンボルブルスと昼のお月見

涼しい風が頬を撫でる昼下がり。
多くの花騎士たちは昼休憩を終え、各自の職務や訓練を行っている。
「はぁ～……」
そんな中どんよりとしたため息が聞こえてきた。その主を探していると、壁にもたれて俯いている小さな影があった。
「あ、団長さん……」
花騎士のコンボルブルスだ。
彼女は私を見つけると、白く長い髪をたなびかせて私を見つめて来る。きっちりと別れた前髪の間から、綺麗なおでことジトっとした瞳が覗いていた。
元気が無いようだが、一体どうしたのか尋ねる。
「花騎士の皆が盛り上がってる。皆でお月見するんだって」
何となく分かった。コンボルブルスは夜になると眠ってしまう体質なので、月見が出来ないことを気にしているのだろう。
「うん……何だか私だけ置いてけぼりにされた気分……」
しょんぼりと俯いた彼女の頭を撫でる。
しかしこればかりはどうしようもない。
以前も、コンボルブルスが夜も起きていられないか色々と試してみたが、どれも失敗に終わった。
「私もコイソリハ隊の皆や団長さんと夜更かししたい。それに夜戦任務だって、私だけ取り残されるのは辛い……」
友人に置いて行かれてしまうこと、そんな彼女の辛さを理解できるとは決して言わない。しかし、少しでも寄り添ってあげたいとは思った。

どうにかして、コンボルブルスにも月見を経験させてあげられないものか。仕事に戻ってからも、そればかりを考えていた。
「おや？　どうしたんだい団長さん、そんな俯いちゃってさ」

廊下で一人の花騎士に声を掛けられた。
金色の髪に和装の花騎士、フクジュソウだった。
皆の幸せを考えている彼女なら、良い案が浮かぶかも知れない。そう思ってコンボルブルスのことを相談してみた。
「なるほど、夜に起きていられないのにお月見をねぇ……」
フクジュソウはうーむと考え込んでしまう。やはり難しいのだろうか。
私も一緒になってあれこれ考えるが、中々良い考えが出てこない。
「おっと、二人とも頭がどんどん沈んでいってるね。これじゃあいけない」
フクジュソウに声を掛けられ、二人で俯いていることに気付いた。
「難しいことかも知れないけど、俯いたままじゃ良案も浮かんでこないってもんさ！」
フクジュソウの明るい声が響く。そう言えば以前にもこんなことがあった気がする。
「おぉ、懐かしいねぇ。確か害虫討伐に手こずって、皆ボロボロになった時に、団長さんが上を向かせてくれたんだっけ。あの日見た綺麗な夜空は未だに忘れられないよ」
いや、あれはフクジュソウのおかげだろう。皆に上を向かせたのはフクジュソウだ。
「いやいや、あれはあたしじゃ気付かなかったし……って話がそれちゃったね」
確かに上を向くことは大切だ。俯いていては気付けないこともあるだろう。
空を見上げる。雲一つない青い空が広がっていた。ん……？
「どうかしたのかい、団長さん？」
良い案が思い付いた。フクジュソウのおかげだ。
「本当かい？　それは良かった」
早速コンボルブルスに話してこようと思う。
「そっか。ふふ、今度はあたしともお月見しようね、団長さん」
勿論だ。

フクジュソウにお礼を言ってその場を後にした。

中庭に白く長い髪が揺れているのが見えた。近づいてみると、やはりコンボルブルスだった。

「団長さん？　どうしたの？」

ジトっと見つめるコンボルブルスに、明日お月見をしないかと持ち掛ける。

「お月見？　出来ないよ。私が夜になると眠っちゃうの、団長さんも知ってるでしょ？」

勿論。だから昼にお月見をしよう。

「昼のお月見……？」

不思議そうに私を見つめる彼女に、上を向くよう指示する。

「上……？　あっ！　そっか、薄っすらだけど、ちゃんとお月さま見えてるもんね」

彼女はそう言うと、にっこりと笑う。

いつもクールなコンボルブルスが目を細めて笑うのが、とても愛おしく感じた。

というわけで、討伐任務のない花騎士を昼の月見に誘った。

「うわぁ……結構集まったね。私、知らない人とか苦手なんだけど……」

と言っても十数人程度だし、これを機会に他の花騎士たちとも親睦を深めてくれたら嬉しい。

「うぅ……ソリダゴもコイソリハ隊の皆も、今日は任務だし……」

大丈夫だ。私が付いている。それにコンボルブルスと仲良くなりたい花騎士もたくさんいるだろう。

「……うん、分かった。頑張ってみる」

「なるほど、昼のお月見とは……考えたね、団長さん」

フクジュソウも一緒に考えてくれたんだ。

「あ、ありがとう……」

「ねぇ～、一緒に飲もうよ～」

「うわっ、お酒臭い……昼間から飲んでるの？」
ホップはいつもそうなんだ。気にしないでやってくれ。
「どんな害虫にも『怯ま』ないコンボルブルスさんのために、昼間のお月見をするなんて、団長も良く考えたんだよ」
「……」
……
「あ、クコさんとヘナさん……」
「お団子、美味。昼、お月見、新鮮、楽しい♪」
「ヘナ、コイソリハ隊、お話、聞きたい。同席、希望……なの」
「……うん！」
笑顔で返事をしてクコとヘナの隣に座るコンボルブルス。楽しそうに会話する三人を見ていると、私も和んだ。

「団長さん、今日はありがとう」
いつの間にか空はオレンジ色に染まっていた。もう大分日も短くなってきた。こんなところからも秋を感じる。
「お月見って、私には縁がないと思ってた。でも団長さんのおかげでお月見が出来た。色々な花騎士ともおしゃべりできた」
人見知りなコンボルブルスも、今日は楽しそうに会話していたな。本当に良かった。
「うん、本当に楽しかった。えへへ、ありがとう団長さん」
コンボルブルスは背伸びをして、私の頬にキスをする。
彼女の顔を見ると、その柔らかい頬が夕焼けの色に染まっていた。

私が守るから

「風穴を開けるっ！」

コンボルブルスの必殺技、ラストディスペアーが大型害虫に炸裂する。害虫の腹部には大きな穴が開き、やがて身体全体がボロボロと崩れていった。

「はぁ……はぁ……」

多足型の極限級害虫との戦いは数時間に及んだ。精鋭揃いの花騎士たちでも、疲労の色は隠せないようだった。特に切り込み隊長として奮闘したコンボルブルスの身体には無数の傷が出来ていて、所々出血もしているようだった。

よく頑張った、そう言って彼女の肩を叩くと、彼女は私の身体にもたれかかってきた。

「終わった……あなたを失望させなくて良かった。でも、流石に疲れた……団長さん、帰ったら一緒にお風呂入ろうね」

ああ、今日は私が洗おう。彼女の痛々しい傷痕を見つめながらそう告げた。

その時、地鳴りのような音が聞こえてきた。その音はどんどんと大きくなっていく。何かが近づいてきている。

高台に上り、目視確認を行うと、どうやら先程と同型の害虫がこちらに向かってきているようだ。その数は数十体。先程倒した害虫のフェロモンが仲間を呼んだのかも知れない。

一体一体は小さく、そこまで戦闘能力は高くないはずだが、こちらの疲労度を考えるとまず勝ち目は無い。

しかし厄介なことに、この型の害虫は移動速度が非常に速い。今から撤退しても追いつかれてしまう可能性が高い。

「団長さん、私が足止めするから、その間に皆を連れて逃げて」

しかし、コンボルブルス一人に任せるわけには……。

「大丈夫。むしろ一人だけの方が小回りが利くし、それなら戦闘能力が一番高い私が適任。このまま囲まれたら皆死ぬ。団長さんは誰も死なせたくないでしょ？」

確かにコンボルブルスの戦闘能力は、今の部隊でも群を抜いて高い。しかしコンボルブルスは夜になると寝てしまうじゃないか。
太陽はまだ真南にあるが、城に戻り増援を連れてくるまで何時間かかるか分からない。
「夜になったらどこかに隠れるよ。早くして！　誰も死なせたくないんでしょ!?」
長いスカートを翻して、コンボルブルスは害虫の群れへ駆けていった。
……本当は分かっていた。この状況で逃げるには、誰か一人を囮にするしかないということ。その役目を担えるのは、コンボルブルスしかいないということも。
無事でいてくれ。そう祈って撤退を行った。

城に戻って増援を編成した。ボロボロの身体に鞭を打ち、私自身も先程の場所へ赴く。
太陽はもう西の方へ移動している。もう時間が無い。
「団長さん、害虫の群れを発見しました。あそこです！」
花騎士たちが害虫の群れに切り込む。
害虫達はあっさりと全滅したが、コンボルブルスの姿が見えない。
最悪の事態を想像してしまう。
「団長さん、あそこに害虫の死骸が１０体程あります。私たちが倒した個体とは別のようです」
死骸を確認すると、どれも腹部に巨大な穴が開けられている。おそらくコンボルブルスが倒したものだろう。
ふと足元を見ると、血の痕のようなものがある。人間のもののようだ。
血の痕はポツポツと続いている。もしかしてコンボルブルスが戦闘中に流した血かも知れない。ということは、これを辿れば彼女の居場所に繋がっているはずだ。
血を辿ると洞窟が見えてくる。その中にまで血が付いていた。
洞窟の奥まで進むと、薄暗い岩壁にもたれて、コンボルブルスが

座っていた。その小さな身体で、自身の武器である槍を抱きながら。
ランプで彼女の顔を照らす。瞼は閉じたままで、白い綺麗な顔と髪が血まみれになっている。
死んでいるのではないか……そう思える程、彼女の肌からは血の気が引いていた。
「死んでない……大丈夫……」
かすれた声が私の耳元まで届く。見ると、コンボルブルスの瞳が薄っすらと開いている。
「団長さん、信じてたよ……もう少し遅かったら、私……」
そこまで言って、再び彼女の瞳が閉じる。今度こそ力尽きたのかと思ったが、やがてすうすうと寝息が聞こえてきて、私も肩を撫で下ろした。

翌朝、コンボルブルスが運ばれた病院を訪れた。
白いベッドの上で、包帯をぐるぐるに巻いたコンボルブルスが佇んでいた。
「あっ、団長さん、お見舞いに来てくれたの？」
微笑む彼女を、何も言わずに抱き締める。それに応じて、彼女の腕も私の背中に回る。小さな身体からは心臓音が鳴り響いている。
昨日はコンボルブルスのおかげで助かったが、出来ればこんな危険なことはさせたくなかった。そう彼女に告げた。
「団長さんは優しいから、私に囮になれなんて言えないと思ったの」
君を死なせたくなかった。君を愛しているから。しかしそのせいで皆を危険に晒してしまった。コンボルブルスの判断がなければ、本当に全滅していただろう。
「うん……だから私が自分で囮になった。誰かが死んだら、団長さんは凄く悲しむだろうから」
ありがとう、そう言ってコンボルブルスの頭を撫でる。彼女は嬉しそうに頬を染めた。
「何があっても、あなたは私が守る。あなたとソリダゴを守ること、私の命はそのためにあるから」

コンボルブルスがその小さな手で私の頬を撫でた。

「ただいま、団長さん。私がいない間、怪我とかしなかった？　風邪も引いてない？」

退院して騎士団に復帰したコンボルブルスは、執務室に来るとすぐさま私の心配を始めた。

「あなたとソリダゴからは目を離したくなかった。だから今までの分も、ちゃんと守るからね」

それなら早速依頼しよう。今日の昼頃、城内でパーティーがあるので、その護衛をお願いしたい。

「パーティー？　うん、分かった。団長さんのこと、ちゃんと守る！」

城内にある一番大きなホール。そこであるパーティーが行われるので、コンボルブルスと一緒に出向いた。

扉を開けると花騎士たちの歓声があがる。

「えっ……えっ？　団長さん、これって……」

困惑するコンボルブルス。それもそのはず。花騎士たちはコンボルブルスに向かって感謝の意を伝えているのだから。

「えっ、これって私の退院祝いなの？　どうして言ってくれなかったの？」

人見知りのコンボルブルスのことだから、きっと誘っても来ないとおもったんだ。

「確かにそうだけど……」

おどおどしながら私の手を握るコンボルブルス。害虫相手に勇ましく戦っていた彼女とのギャップが、何とも可愛らしい。

司会者から挨拶を求められると、コンボルブルスは更に困惑した。

「む、無理だよぉ……団長さん……」

上目遣いで私を見つめてくる。

私が隣についていてあげよう。そう言って彼女の頭を撫でて、ステージに上がらせた。

「え、えっと……今日は私のためにパーティーを開いてくれて、ありが

とう……ございます」
何とか挨拶はするが、その後の言葉が続かない。
そこで会場の花騎士たちが口々に感謝の気持ちを伝え始めた。
「私達を助けてくれてありがとう」、「害虫を倒してくれてありがとう」、「ありが十匹でありがとうだよ！」
「皆……えへへ……嬉しいな」
目を細めてはにかむコンボルブルス。
これをきっかけにコイソリハ隊以外の花騎士たちとも仲良くなってくれたらいいなと思った。

「団長さん……」
パーティーが終わると、コンボルブルスは執務室にやってきた。ぐったりと疲れている様子だった。
「知らない人は苦手……今日はコイソリハ隊の皆は別の任務中だもんね」
しかし頑張って話していたじゃないか。
偉い偉いと彼女の頭を撫でる。
「えへへ……他の花騎士さん達も優しいから、これから少しずつお話していきたいな……でもこうして本当に好きな人と二人きりでいる時間が、やっぱり一番好き」
コンボルブルスが背伸びをする。
彼女の柔らかい唇の感触を頬に感じる。
「本当はね、あの日凄く怖かったんだよ。死んじゃうかも知れないって思った」
私の胸に顔をうずめながら、彼女がポツリポツリと語った。
「でも団長さんの顔を見て、安心した。私まだ生きられるんだ、あなたやソリダゴ、コイソリハ隊の皆とまだ一緒にいられるんだって」
彼女の華奢な肩を抱く。
……今日は一緒にいよう。
「うん、私が寝ちゃうまで、団長さんはずっと私の傍にいて。生きている限り、あなたは私が守るから」

ポーチユラカとハロウィンパーティー

「さぁさぁ、この圏に乗ってこのステージを一周するよ。失敗したら私の身体は真っ二つ！　緊張の一瞬だよ」
　ポーチユラカのその言葉に会場の空気も張り詰める。
「よっ……ほっ……」
　自身の武器である圏にピョンと乗り込み、両腕を動かしながらバランスを取る。
「んしょっ……それそれ～」
　一度バランスが取れてからはスムーズに進んでいく。そのままステージを一周して、軽々と圏から飛び降りた。
　ポーチユラカの芸に会場からは溢れんばかりの拍手が送られる。
「ありがとうだよ～！　この拍手喝采、かぁっ、最高だよ！」
　折角盛り上がっていた空気が少し冷やされたことは、彼女には内緒にしておこう。

「団長、どうだった私の芸は？」
　とても楽しかったと伝える。
「えへへ～、楽しんでくれたなら何よりだよ」
　今日はハロウィン。
　我が騎士団内では一般客も招いてパーティーを開くのが恒例となっている。
　花騎士が芸をしたり、お菓子を配ったりして皆を楽しませる。
　ポーチユラカは大講堂のステージを任されたので、お得意の大道芸を披露したわけだ。
　くじ引きでトップバッターになったが、良く仕上がった芸だった。会場もちゃんと盛り上がって良かったよ。（最後のダジャレが無ければ）
　そうポーチユラカに伝えると、彼女は自身の髪をしきりに弄り始める。どうやら照れているらしい。
「でもでも、何だかいつものダジャレショーより盛り上がってる気が

するよ。それだけが納得できない……」
気のせいだろう。それより折角だし一緒に回らないか。
「うん、回る！　そう、まるで私の圏のようにぐるぐる回るよ～」
本当に回りだしたポーチュラカの肩を抱き寄せる。
「あぅ……団長ったら、大胆なんだよ……」
ポーチュラカの頬が真っ赤に染まる。いつも元気な彼女がいじらしくなるのが、何とも可愛らしい。

「さぁいらっしゃい！　ランタナが作ったお菓子を良い子の皆と悪い大人の皆に配るよ～」
聞きなれた元気の良い声が聞こえてきた。
覗いてみると、コック姿のランタナがキッチンでクッキーを作っていて、子供たちがそれを囲んで見ている。
甘い香りが鼻先に運ばれてくる。
「あっ、悪い大人だ！」
誰が悪い大人だ。
「だって私みたいなロリっ子美少女を寝室に連れ込んでるんだよ～。これが悪い大人じゃなかったら何なのさ？」
「団長、今の話……」
ご、誤解だ……というか、子供の前でそんな話をするんじゃない！
結局クッキーを貰って、そそくさとその場を後にした。
しかし、今の話をどう弁明すれば良いだろうか……。
「団長、大丈夫だよ。ランタナさんは良く冗談言ってるし、団長がそんなことする人じゃないのは分かってるから」
何て良い子なのだろう。
思わずポーチュラカを抱きしめてしまう。
「ひゃぁっ！　だ、団長……恥ずかしいんだよ……」
恋人同士なのだし、問題はないだろう。
「そ、そうだけど……もう！　次行こう、次」
顔を真っ赤にしながら、照れ隠しのように私の腕から逃げる彼女が、とても可愛らしく感じた。

「さぁさぁ皆さん、絵本の読み聞かせ始めますよ～」
子供たちのはしゃぐ声が聞こえる。
その中心にいるのはリシアンサスだ。
「リシアンサスさんは絵本の読み聞かせをするの？」
「はい。自分で書いた絵本を読むんですよ」
「自分で？　え～ほんと!?」
「……」
おしゃべりなリシアンサスでも、ポーチュラカのギャグには対応できなかったらしい。
「いや～面白かったよ。登場人物が皆笑顔で、とっても良かったんだよ」
「ありがとうございます！　やっぱり物語はハッピーじゃないと」
笑顔とハッピー。この二人は随分と気が合うらしい。
楽しそうにおしゃべりする二人を微笑ましく見つめる。
「団長、リシアンサスさんも言ってた通り、ハッピーって大事なんだよ。私は団長が幸せで、笑顔でいてくれるのが一番なんだからね！」
嬉しいことを言ってくれるな。
そう言ってポーチュラカの頭を撫でる。
「えへへ……笑顔が一番ええ（良い）顔だしね」
うむ、そうだな……。

「う～ん、困りましたね……」
一周して大講堂に戻ると、ナズナの姿があった。
何かうなっているが、どうかしたのだろうか。
「あっ、団長様。実は今日公演予定だった花騎士さんが、一人体調不良で休んでしまって……」
それは心配だな。
道具の準備などの問題もあるし、予定時間を早めるのも難しいだろう。
「ふむふむ。なるほど……つまりピンチヒッターが必要ってことだね

？」
「誰かあてがあるんですか、ポーチュラカさん？」
「ふふ、ここだよ、ここ。私、ポーチュラカが代役を務めよう……」
いきなりだが大丈夫か。
「勿論。この代役をちゃんと務められたら、私のダジャレ道も大躍進だよ」
何だか不安になるが、当人がやる気のようだし、取り敢えず任せてみることにした。

「皆、ハロー！　今日はハローウィンだよ！」
いきなり掴みを間違えたような気がする。大丈夫だろうか。
「私は花騎士のポーチュラカだよ。これからダジャレ１００連発を披露するんだよ！」
「ハロウィンと言えば仮装だよね。え、服が無いって？　それなら私が貸そうか」
「今日のためにこれを作ったんだ。ジャックオーランタンだよ。作り方は意外と簡単だったよ」
「何だか魔女の仮装が多いね。マジョリティだね！」
「私もお菓子を用意したよ。でもごめん。ちょっと失敗しちゃって、おかしな形になっちゃったんだよ」
……。

お疲れ様だ、ポーチュラカ。まあややウケと言ったところだろうか。
「うぅ……自身の中では、結構自信あったのになぁ……」
軽くギャグを言える辺り、そこまでへこんではいないらしい。
「うん！　だって今日はハロウィン！　皆が楽しそうな顔をしてるだけで、ポーチュラカも嬉しいんだよ」
ポーチュラカの元気の源は皆の笑顔か。
そんな優しい彼女を誇りに思い、頭を撫でてあげることにした。
「えへへ……でも団長。ハロウィンはまだまだこれからだよ。という

わけで、はい。ポーチュラカ手作りのおかしなお菓子」
そう言うと思ったので、こちらも用意してある。市販品だが。
「ありがとう団長！　よ～し、それじゃあもっと色々回ってみるんだよ！」
ポーチュラカの手が私の手にそっと触れる。
軽く握り返すと、彼女の頬が真っ赤に染まった。
小さな手の温もりを感じながら、にぎやかなパーティーの中に入っていった。

≪余談≫

「ランタナさん、言っていい冗談と言っちゃだめな冗談があると思うんだよ……」
「ごめんって！　そんな顔しないでよ～」
「まあ団長は浮気なんてする人じゃないけどね」
「どうかな……確かにポーチュラカとだんちょはラブラブの恋人だけど、一つ選択を間違えば、私と恋人になってたのかも知れないよ」
「えっと、つまり……」
「つまり選択肢一つ変われば、だんちょがランタナと恋人だったり、クコと結婚寸前だったり、ニシキギと変態プレイをしている世界線もあるってこと。選択肢一つで世界がどんどん枝分かれしていくんだじょ！」
「おぉ！　良く分からないけど何か凄いんだよ！」
「そう、だんちょは凄いのだ！　イエーイ！」
「イエーイ！」

スキラの「黄金狂時代」

我々は生きていく中で、もっと富を、もっと豊かになりたいと願う。
例えばそれが自分の命を賭けたことであったとしても。
時に狂気的なまでに。
悲しき哉、それが人間の性なのかもしれない。

「団長、黄金を採掘しに行くわよ！」
ハイテンションで執務室に入ってきたのはスキラ。ギャンブルが大好きな花騎士だ。
しかし黄金採掘とは……何とも突飛なことを言い出したものである。
「最近、貴族の間で噂話が流れてるの。ウィンターローズのある雪山には、まだ手の付けられていない金が眠ってるって」
それで採掘したいというわけか。
しかしスキラの実家は裕福な家庭で、金に困っているわけではないはず。
そんな危険を冒してまで、金を手に入れる必要はあるのだろうか。
「それは勿論、パルファン・ノッテのためよ！　最近負け続きで……実家にも無心したばっかりだし……金を掘り当てたらお金がいっぱい、ギャンブルもし放題でしょ？」
それで金に目を付けたわけか。
しかしそれは手段と目的が入れ替わっていないだろうか。
「うぅ……分かってるわよ。でも止められなくて……それに採掘って当たるか当たらないか、ちょっとギャンブルみたいで面白そうじゃない？」
駄目だこの子……。
「それで、一緒に行ってくれるんでしょ、団長？」
いや、行かないぞ。カゲツと一緒に行ってくればいいじゃないか。
「カゲツは心配症だから、内緒にしてるの。たくさんの害虫と対峙してきた団長なら、雪山くらい平気でしょ？」

害虫退治と雪山の探索ではベクトルが違うと思うのだが。
「いいから、いいから！　それに団長も最近、お金に困ってるって聞いたわよ？」
どこからそんな話を……。
確かに最近は出費が重なっている。
花騎士たちへのプレゼントやトレーニング器具。それにある筋から手に入る珠玉の写真集。
だからと言ってそんな危険を冒すわけには……。
「案内人も付けてあるから大丈夫よ。行きましょうったら～」
そう言って私の腕に抱き付いてくるスキラ。
長い髪が揺れて、花のような香りが運ばれてきた。
子供のように無邪気に笑う彼女を見ていると、何だか断りづらくなってきた。

スキラに付き添う形でウィンターローズを訪れる。
案内人との待ち合わせの場所へ行くと、よく見知った顔があった。
「案内人のハツユキソウです……って団長さん!?」
花騎士のハツユキソウ。ウィンターローズ所属の彼女なら雪山を熟知しているだろうし、確かに適任だ。
「スキラさん、団長さんも一緒なら先に言っておいて下さいよ」
「あら、言ってなかったかしら？　ごめんごめん」
ところでハツユキソウは何故案内人を承諾したのだろう。
「スキラさん、ウィンターローズの色々な花騎士さんに頼んだらしいんですけど、全部断られて。それで私のところに来たんですよ。あんまり可哀そうで引き受けたんです。決して金の山分けに目がくらんだわけじゃありませんからね！」
なるほど……。

「うぅ……寒い。お二人とも足元には気を付けて下さいね」
足元には雪が積もっていて歩きにくいが、ハツユキソウは軽々と歩んでいる。さすがウィンターローズ所属といったところか。

「それにしても、今日は天候にも恵まれてますね。もっと吹雪いてる日もあるんですよ」
今でも大分辛いのに、吹雪まで吹いたら相当厳しいのではないだろうか。
それにしてもスキラが静かだ。
後ろを振り返ると、スキラは息を荒げながら大分後方を歩いてきている。
「はぁ……はぁ……二人とも待ってぇ……」
しばらく立ち止まっていると、スキラがやっと追いついてきた。
「何よこれぇ……こんなに歩きにくいの……？」
どうする、今からでも引き返すか？
「ダメ！　必ず金を掘り当てて帰るわよ」
取り敢えず、雪山に慣れているハツユキソウを先頭に、スキラ、私、熊の順で一列に並んで進むことにした。
……？
「どうかしましたか、団長さん？」
何か違和感を感じたが、気のせいだろう。

「昼間の内に拠点を決めておきましょう。テントは持ってきてますから」
うむ。取り敢えず風が届きにくい場所を探さないといけないな。
白い息を吐きながら足取り重く進んでいく我々。
その疲労に拍車をかけるように、風と雪は激しさを増していった。
「ぎゃぁぁぁ！　何よこの風……寒すぎるわよぉ……」
「激しくなってきましたね……この辺りで一旦テントを張りましょう。この天候で歩いていても体力が奪われるだけですから」
風を防げる岩陰にテントを張った。ここでしばらく吹雪をやり過ごすことになりそうだ。
「はい二人とも。きのこスープですよ」
ありがとうと言ってカップを受け取る。
温かいスープが胃の中に落とし込まれると、心まで温かくなるよう

に感じた。
「ふぅ……いつになったら黄金は見つかるの……？」
「まだ奥に行かないと。ここら辺は掘った痕がありましたからね」
「えぇ……しんどいわね……」

そして二日目。
一度は晴れた空だったが、再び雲行きは怪しくなり……。
「ぎゃぁぁぁ!!　また吹雪!?」
しかも一日目より大分勢力が強い。三人とも吹き飛ばされそうになる。
「二人とも！　取り敢えず岩にしがみついてください！」
しかし疲労した腕ではそう長く持ちそうにない。
死を覚悟しながらも、どこかに希望はないかと探る。
ほとんど見えない視界の中、それはあった。
木造の小屋のような建物。きっと前に来た探索者が建てたものだろう。
「よし、行くわよ団長！　ってきゃあっ！」
強風でバランスを崩したスキラが、思わずハツユキソウのリュックを掴んでしまう。
「ひゃぁぁぁっ！　離してください！　死にたくないですぅ！」
ハツユキソウも必死にもがいて離れようとする。
何とかスキラの手を引きはがした彼女だったが、その拍子にリュックを落としてしまった。
「あぁっ！　リュックが！」
しかし、今は気にしている場合ではない。
一刻も早く小屋へ入らなければ。

小屋は簡素な作りだったが、しばらく休むのには問題はなさそうだった。
問題は先程落としたリュックに食料が入っていたことだ。
「どうしましょう……」

吹雪が止まない限りは引き返すこともできないからな。
「ごめんなさい……もとはと言えば私が雪山探索なんて言い出さなければ……」
スキラが珍しくしょんぼりとしている。
悩んでも仕方がない。
今は身体を休めて、三人とも生還できることだけを考えよう。
「小屋の中に食料があれば……なんて考えましたけど、無いですねぇ……」
簡単な調理器具があるだけだな。きっと保存食は他の探索者が食べてしまったのだろう。
仕方がない。今日はもう寝て、なるべく腹を減らさないようにしよう。

時間感覚が分からなくなってきたが、おそらくあれから丸一日は経っただろう。
吹雪は相変わらず止みそうにない。
「団長……そっち行っていい？　寒くて……」
スキラがしおらしい。何だか可愛らしいなと思ってしまう。
「す、スキラさんずるいです！　私もそっち行きます」
吹雪が窓を叩いて、おどろおどろしい音を立てている。
しかし、三人で身を寄せ合っていると不思議と安心感がある。

あれからどれくらい経っただろう……。
既に空腹は限界を迎えそうだ。
「あ〝あ〝あ〝ぁ～……お腹減った……」
普段の可愛らしい声からは想像も出来ないような声をスキラが発した。
「静かにして下さいよ……お腹減ってるのは私も団長さんも同じなんですからね……」
何だか空気がギスギスしてきた。
これはいけないと思っても、何かを言う気力が既に消え失せてい

た。
「……」
スキラがハツユキソウの顔をじーっと見つめている。
「ど、どうしたんですか？」
「ハツユキソウの肌って、白くて柔らかそうで、お餅みたいで美味しそうよね……」
そしてハツユキソウの腕にガブリと噛み付く。
「ぎゃぁぁぁっ!!　団長さん、スキラさんが！　スキラさんが～！」
確かに美味しそうだ。
そう思って私も彼女に噛み付いた。
「いやぁ♡　やめて下さい団長さ～ん♡」
……何だか反応が違うのは気のせいだろうか。
「ごめんなさい！　本当にごめんなさい！」
本当にすまなかった……。
「もうっ！　絶対にやらないでくださいよ！」
珍しく本気で怒るハツユキソウ。
両腕に噛まれた痕が残っているし、当然と言えば当然だが。
「でも他に何か食べるものは……」
スキラが部屋の中を見回す。
「あっ……」
彼女の目が一点で止まる。
そこにあったのは雪山用の靴だった。
「取り敢えず煮てみました」
ハツユキソウが鍋から靴を取り出す。
「にっひっひ！　中々美味しそうじゃない」
濡れた靴からは湯気が出ている。私も中々美味しそうだと思う。
フォークとナイフで靴を切り分け、三つの皿に置いていく。
「それじゃあ頂きま～す！」
三人で靴をかじる。
固い。ビーフジャーキーを思い出す。
「歯ごたえが……んぐっ、ごくんっ」

スキラが一番最初に飲み込んだ。
「ふふっ……中々良い味で……うっ!!」
口元を抑えたスキラが、突然走り出した。
向かった先は玄関の先。そこで食べたものを戻した。
「おえぇぇぇ！　げほっ！　げほっ！」
そりゃあ靴を食べればそうなる。
何故誰も気が付かなかったのか。
空腹と言うものは時に人間の思考を鈍らせるのかも知れない。

「もうっ！　誰よ、靴を食べようなんて言ったのは！」
君だ。
「はぁ……もう……」
「!?」
ハツユキソウが声にならない声を上げる。
彼女の視線の先を辿っていくと、大きな茶色い影が見えた。
「どうかしたの、二人とも?」
固まる二人を見て、スキラがゆっくりと後ろを振り返る。
彼女のすぐ背後にいたのは熊だった。
「何だ、熊じゃない」
「……」
スキラが再びこちらに向き直る。
そして小屋の中に入り、無言で扉を閉めた。
数秒後、木製のドアはバリバリと音を立てて脆くも崩れ去った。
「ぎゃあぁぁぁ！　熊ぁぁぁ！」
「来ないで下さい！　私は美味しくないです～！」
逃げ惑う三人。熊はハツユキソウの方へ向かって行った。
「うぎゃぁぁぁ!!　来ないで～！」
ハツユキソウは無意識に氷の塊を召喚し、熊を突き刺す。
血しぶきを上げて、熊はその場に倒れた。
「えっ……?　は、はは……やりましたよ二人とも！」
フンっと胸を張ってどや顔をするハツユキソウ。

しかし、スキラの視線の先には彼女ではなく、死んだ熊の姿があった。
「じゅるり……」
まさか……。

「ふぅ～……満腹だわ。ご飯を食べられることって、こんなに幸せなことだったのね……」
うむ。大事なことに気付かされたな。
「あっ、見てください！　吹雪が止んでますよ！」
窓の外を見ると、空は澄み渡っていた。
「やったわ！　早く戻りましょう！」
スキラの動きが軽やかになっていく。
ようやく帰る目処が立ったか……。

「では私はここまでです」
「ええ、ありがとうハツユキソウ」
「でも何か忘れてるような……」
「そうかしら？」
「それじゃあ団長、私たちも帰りましょう。疲れたわ……」
帰ったらゆっくりと休もうじゃないか。
「そうね。少し休んだら、パルファン・ノッテに行って……」
こんな時にもギャンブルとは、スキラらしいなと笑ってしまう。
「……って、黄金は!?」

結局何も手に入れることが出来ないまま、騎士団へと帰っていった。
帰ったその先で、カゲツとナズナにこっぴどく叱られることになるのを、その時の私達はまだ知らない。

クコと秋の終わり、冬の始まり

最近急に肌寒くなってきた。
手がかじかんでしまって、書類仕事が碌にできない。
しまっておいた暖房器具を引っ張り出した。
ふと、結露した窓の外を見つめる。
もうすっかり葉が落ちてしまった木の下。そこにクコが佇んでいた。
吐く息が白い。
冷たい手を擦り合わせながら、クコの元へ向かった。
「あ、団長……」
クコもこちらに気付いたようなので、何を見ているのかと尋ねてみる。
「紅葉、散った、寂しい……」
クコが木を見上げる。
その目はどこか虚ろだった。
クコの言う通り、あれだけ美しく色づいていた葉も、今ではほとんど落ちてしまっている。
「あい。秋、終わり。クコ、お胸、ぽっかり、寂しい……」
確かに季節の変わり目は寂しいこともあるが、新しい季節を迎える楽しみがあるじゃないか。
「楽しみ……あい♪　冬、団長との冬。クコ、楽しみ♪」
ようやく笑ってくれた。
彼女の頭を撫でて、寒いから中に入ろうと言った。

ストーブに二人で手をかざす。
クコの小さな手は赤く霜焼けになってしまっている。
その指先にそっと触れると、クコはこちらを見てはにかんだ。
「えへへ……団長も、指、冷たい。クコと一緒♪」
しかし、以前のクコなら季節の変化を肯定することも無かっただろう。

彼女も変化している。未来に向かって。
「あい。クコ、変化、許容、未来のため」
フロッタン島での出来事がクコを変化させたのかも知れない。
「クコのパパとママ、もう居ない。悲しい……過去、悲しい。でも、未来のため、クコ、受け入れる」
言葉ではそう言っても、クコの小さな身体は震えている。
それはきっと寒さのせいではない。
彼女の身体をぎゅっと抱きしめる。クコは顔を赤くしてこちらを向いた。
「団長。クコ、過去、受容、理由、分かる？」
クコが過去を受け入れた理由。未来のためか。その未来というのは、きっと……。
「あい。未来、団長との未来」
優しく微笑んだ彼女の頬をそっと撫でる。
クコと私の未来か……。
クコがそのために変化したように、私もまた彼女のために変わる必要があるのかも知れない。
「？」
クコが首を傾げる。その仕草が何とも言えず可愛らしい。
彼女の頭を撫でて、まあそのうち分かるだろうと伝えた。
季節が常に移り替わっていくように、クコと私の関係も変わらずにはいられない。
それが悲しいことなのか否か。誰にも分からないが、少しでも素敵な方向へ向かうため、私は出来ることをやっていこうと思った。

窓の外から光が差した。
布団をめくると、朝の冷たい空気が肌に染み込んでくる。
もう一度布団を被る。
騎士団長という責任のある立場になっても、やはり朝は苦手だ。
特に冬の朝は、自力で起きることが難しい。
「……ちょう。……団長」

耳に微かに届いた声。優しく綺麗な声だった。
「団長、朝、起床、推奨」
……もう少し寝かせてよ、母さん。
「っ!?」
声にならない声が頭上で響いた。
頭の中が覚醒するにつれ、声の主がだんだんと分かってきた。
そして、先程の発言の恥ずかしさに気が付いた。
枕元にはクコがちょこんと座っていた。
顔が赤らんでいる。私も同じだ。
「団長、クコ、お母さん、誤認?」
ね、寝ぼけていたんだ。あまり気にしないでもらえると助かる。
「えへへ……クコ、お母さん。団長の、お母さん」
クコはそう言ってニコニコと笑う。私の話は耳に入っていないようだ。
クコはお母さんになりたいのか。
「あい♪ クコ、ママ、なりたい。あっ、でも……」
そこまで言ってクコは口ごもる。
柔らかい頬は真っ赤に染まり、俯いてしまった。
「クコ、一番、なりたい、団長の……」
それ以上は言わせないように、クコの唇をこちらの唇でふさぐ。
最初は驚いていたクコだったが、やがて私を受け入れてくれた。
ここから先は、いつか私の口から言わせて欲しかった。でなければ、きっと後悔するような気がした。

クコが部屋の暖房を入れてくれたので、何とか布団から出ることができた。
寝間着から制服に着替えるのを、クコはじっと見ている。
「団長、寒いの、苦手?」
苦手だな。寒い日の朝は布団から出たくなくなってしまう。
「えへへ……それじゃあ、クコ、毎朝、団長、起こす」
それは……私としては嬉しいが、クコが大変ではないか。

「大丈夫。クコ、団長のママ。だから平気♪」
出来ればそのことは忘れてもらいたいのだが……。
着替えが終わって、クコと一緒に朝食を摂ることにした。
いくつかの料理はクコが作ってくれた。
「クコ、料理、勉強中、クレソンから」
料理の知識が皆無だったクコが、こんなに美味しい料理を作った。
これも変化だ。とても素敵な変化だ。
「団長、美味しい？」
とても美味しい。そう答えると、クコは髪の毛をしきりに弄って照れ始めた。
「本当？　本当に美味しい？」
本当に美味しい。
それに、クコの作る料理はとても温かくて優しい。きっと私のことを思いながら作ってくれたのだろう。それはどんな技量よりも大事なことだと、私は思う。
「……団長、クコ、歓喜。嬉しい、本当に……」
クコの声が震えている。
彼女を見ていると、私は心の中まで温まるように感じた。

「団長、クコ、明日も、朝ごはん、作る♪」
変わっていくこと、変わってしまうこと。
色々な変化はあるが、クコが隣に居てくれれば、それだけで幸せなのだと思った。
それだけは永久に変わることはない。
だからこそ私はクコに、誓いを立てようと思った。
永久の誓いを、いつか……。

コンボルブルスとこたつ

最近めっきり冷え込んできた。冷たい指に白い息を吹きかける。
花騎士たちも寒い日は苦手なようで、用事がない時は部屋に籠りがちになるようだ。
人気の少ない城内は、シーンとした空気が漂っている。
そんな中、訓練場から声が聞こえた。見に行ってみると、コンボルブルスがそこにいた。
「ふっ！　はっ！」
身の丈よりも大きな槍を軽々と振り回している。しかも動きに無駄がない。
今まで数々の優秀な花騎士を見てきたが、その私でも唸る程、彼女の身のこなしは洗練されていた。
「はぁっ！　ふぅ……あれ、団長さんいたの？」
構えを解き、汗を拭ったところで、私の存在に気付いたようだ。
寒い中、随分と精が出るなと彼女に話しかける。
「うん。寒くても我慢しないと。ソリダゴやあなたを守るために、怠けてなんていられないから」
何人かの花騎士にも聞いて欲しい言葉だ。
それにしても、今日は本当に冷える。もう訓練は終わりにして、部屋に行かないかと誘う。
「う～ん……もうちょっと続けたい気もするけど……」
そんなに根を詰める必要はない。コンボルブルスはいつも頑張っているのだから、たまには休息も必要だ。
そう言って彼女の頭を撫でた。
「えへへ……団長さんの手、おっきくて暖かいね。団長さんがそう言うんなら、今日の訓練はもう終わりにする」
彼女の手を見ると、指先がかじかんで赤くなっている。
そんな小さな手を私の手で包み込み、二人並んで歩き出した。
コンボルブルスがトテトテと小さな歩幅で歩く様子が、とても可愛らしかった。

「んんぅ♡　団長さん、気持ちいいよぉ……♡」
コンボルブルスが甘い声を発する。先程まで真面目に訓練に励んでいたのが嘘のように、普段は凛々しい顔もとろけきっている。
「団長さん、入ってきて……中で暖まって♡」
お言葉に甘えて、私も挿入していく。
確かに中は暖かく、気持ちがいい。下半身の疲れが癒されていくようだ。
「ふぁ～……こたつってこんなに気持ちいいんだ。初めて知った」
だらけきった声でコンボルブルスが呟いた。
丸くなった小さな身体が、まるで小動物のようで可愛らしい。
気に入ったのなら、自室にも置いたらどうだ。
「ん～……ダメ。こんなのあったら怠けちゃうもん」
確かに、こたつに一度入ったら中々抜け出せないものだ。まるで魔法にでもかかったように。
「うん。これは絶対危険」

コンボルブルスにお茶とお菓子を差し出す。
確か彼女は甘いものが好きだと言っていたから、そういったお菓子をストックしておいたのだった。
「えへへ……覚えててくれたんだ……嬉しい。ありがとう、団長さん」
コンボルブルスとの時間はまったりと流れていく。
彼女は無口な方だが、それが良いのかも知れない。何も話さなくても安心する空気感が、私と彼女の中には生まれくる。
「団長さん、みかんの皮剥けたよ。はい、あ～ん」
コンボルブルスは世話焼きのつもりでやっているのだろうが、これは中々に恥ずかしい。
彼女の細い指からみかんを受け取るが、恥ずかしくて味が分からない。
「団長さん、顔赤いよ。風邪引いちゃった？」
大丈夫だ。それより、コンボルブルスにもみかんを食べさせてあげ

よう。
「い、いいよ、そんな……あ、あ～ん……」
もぐもぐとみかんを頬張るコンボルブルスだが、その顔は真っ赤に染まっている。
「これ……すごく恥ずかしいね……」
顔を赤くしたまま二人で微笑み合う。いつもはキリッとしているコンボルブルスが、私といる時は頬を緩ませてくれるのが何だか嬉しい。

窓の外が薄暗くなってきた。冬の夕暮れ時はとても静かだ。
そろそろ眠ってしまう時間じゃないのか、と彼女に尋ねる。
「う～ん……そろそろかも……」
それなら帰る支度をした方がいいんじゃないか。それとも泊っていくか。
「うん。もうちょっとしたら、支度する」
そうは言うが、こたつから離れようとしない。さすがのコンボルブルスもこたつの魔力には勝てないか。
「そ、そんなことない……あとちょっとだけ……」
コンボルブルスの顔が机の上に突っ伏す。指で突っついてみても、顔が上がってこない。
こたつで寝ると風邪を引くぞと言って身体を揺さぶるが、何も返事がない。
「……」
どうやら眠ってしまったらしい。こうなったコンボルブルスは何をしても起きることはない。
仕方がないなと呟いて、彼女を抱っこし、ベッドの上に寝かせた。
コンボルブルスがすぅすぅと静かな寝息を立てている。
その様子を見ているだけで、疲れが癒されていくようだ。
添い寝しようと思ったが、彼女の許可を得ていないし、今日は床に布団を敷いて眠るとしよう。
彼女の綺麗なおでこにキスをして、私も眠りに就いていった。

しんしんと冷えた空気が身体に覆いかぶさり、私の目を覚まさせる。
ベッドの上を見ると、コンボルブルスもゆっくりと目を開き始めた。
「……う～ん……団長さん……？」
おはよう。そう言って彼女の額を撫でると、彼女は顔を赤くした。
「ね、寝ちゃったんだ。ごめんね、団長さん……私のこと、失望した？」
断じてそんなことはない。寧ろ、可愛い一面が見られて良かったよ。
その言葉で、彼女は耳まで真っ赤になる。コンボルブルスは中々いじり甲斐があって楽しい。
「もう、からかわないでよ……」

その後はコンボルブルスの訓練に付き合うことにした。
「昨日はたくさん休んだし、今日はその分訓練する。もうこたつなんかに負けないから」
コンボルブルスにとって、思わぬ強敵出現となったようだ。

花騎士たちとおままごと

眩しい朝日を浴びて目を覚ます。
ダイニングへ向かうと、卵焼きの美味しそうな匂いが漂ってきて、腹の虫がぐぅと鳴った。
「おはよう団長さ……お父さん」
台所に向かっていた女性が、長い白髪をたなびかせながら振り返った。
私の妻、コンボルブルスは私を見ると優しく微笑んだ。
「お父さん、悪いんだけど子供たちを起こしてきてくれない？」
コンボルブルスは手が塞がっているようなので、快く引き受けた。

二階にある、子供たちの部屋に向かう。三姉妹が川の字になって眠っているので、順に起こしていこうと思う。
まずは長女ポーチュラカ。身体をゆすると直ぐに目を覚ました。
「んぅ……お父さんおはようだよ」
眠たそうな目を擦るポーチュラカに、すぐ起きられて偉いぞと撫でる。
「えへへ……こんなに早く起床できる子は希少だからね！」
……。
次は次女のリシアンサス。枕元に絵本が散らばっている。読みかけのまま寝てしまったらしい。
「んぅ～……えへへ～」
幸せそうな寝顔を見ると、起こすのに気が引けてくるが、これも彼女のためだと心を鬼にする。
「んんっ……あ、お父さん。おはようございます」
随分気持ちよさそうに寝ていたようだが。
「えへへ……ハッピーな夢を見てました。そうそう、この絵本みたいな！」
満面の笑みを浮かべるリシアンサスの頭を撫で、朝ごはんが出来ているから行ってきなさいと伝えた。

「は～い」
そして、末っ子ランタナ。これが最大の難関なのだが……。
「ん～……ぺポをかじったらお腹が……」
しかしこの子、寝相が悪すぎる。枕が足元に来ているし、へそが丸出しになっている。
早く起きろと身体を揺するが、一向に起きる気配がない。
「むにゃ……ランタナは合法だぁ……」
何だか良く分からない寝言を言っている。
ええい、いい加減起きろ。
「んにゃぁ……うるせぇ～！」
ランタナの足が腹にめり込み、思わずうめき声を上げ、その場にうずくまる。
「どうしたの？」
その声を聞きつけたのか、コンボルブルスが部屋にやって来た。
「ランタナが起きない？　ふーん……」
彼女がランタナをジトっと見つめる。
「あ、いえ、起きました！　起きましたよ、コンボルブルスママ！」
いつの間にか目を覚ましたランタナが布団の上で正座をしている。
「……そう」
コンボルブルスの手がランタナの頭に添えられると、ランタナはすぐさま立ち上がった。
「か、顔を洗ってまいります！」
そのままさっさと走っていってしまう。
「……ねえ、お父さん。私怖いのかな？」
そんなことはないだろう。
ただ、表情が少ないので、勘違いされやすいのかも知れない。
「表情……う～ん……」
たまに見せる笑顔が可愛らしいのだが、末っ子のランタナにはまだ分からないのだろう。
「そうなのかな……」

「皆席についた？　それじゃあ、いただきます」
　コンボルブルスがあいさつをすると、子供たちもそれに続く。
「コンボ……お母さん、おいしいんだよ」
「ホント、お母さんは料理上手ですね」
「これでだんちょ……パパの胃袋を掴んだのか～！」
「もう、やめて……」
　顔を真っ赤にするコンボルブルス。やはり可愛いところがある。
「ところでパパ～、ランタナ欲しいものがあるんだけど～」
　後にしなさい。
「えぇ～、そんなこと言っちゃっていいの。昨日の夜のこと、ママに言っちゃうよ？」
「昨日……なんかあったの？」
　いや、何の心当たりもない。
「忘れちゃったの？　昨日パパはランタナのベッドに潜り込んできて……」
「って、ランタナさんストップ！　ストップです！」
　リシアンサスが大きな声でランタナを静止する。

「それはやり過ぎです。子供に見せる劇なんですからね」
「この劇は過激なんだよ？」
「……とにかく、もう少し道徳的にですね……」
　数日後、近くにある保育園の園児たちとの交流会があり、そのために劇をすることになった。脚本はリシアンサスで、幸せな家族を描いた作品を作りたいらしい。
「アドリブ入れてもいいって言いましたが、いくら何でもアドリブ利かせすぎですよ！」
「おぉ……ごめんごめん」
　珍しく怒るリシアンサスに、ランタナもたじたじになってしまう。
「ふぅ……演技って疲れる。団長さんは疲れてない？」
　私の襟元の乱れを直してくれるコンボルブルスに、大丈夫だと囁く。

「あ、それとコンボルブルスさんは、もっとリラックスしてください。緊張は子供たちにも伝わりますからね」
「うん……分かってるけど……」
　コンボルブルスは人見知りで、このメンバーにもいまいち慣れていないのだろう。
　しかし、そんな彼女が今回の劇に参加してくれたのは意外だ。
「皆が推薦してくれたから……」
「母性に溢れた人を応募せい！って言われたから、コンボルブルスさんがいいかなって思ったんだよ」
「優しくて料理上手ですし、お母さんって感じですよねぇ」
「お母さんって歳じゃないけど、皆から期待されてるんなら、失望はさせたくないから……」
　偉いぞと言って頭を撫でると、彼女の頬は真っ赤になった。
「あ～、ママだけずるい！　ランタナも撫でて～」
　何だか本当に家族みたいになってきたな。
「あ、それとポーチュラカさん。ダジャレは禁止で」
「!?」

　それから私たちは、
「こら、ちゃんとおもちゃを仕舞いなさい。姉妹だけに」
「ポーチュラカさん？」
　練習に練習を重ねていった。
「ママ～」
「よしよし」
「ふふっ、何だか子供のころのおままごとを思い出しますね」
「そう言えば、私も昔コイソリハ隊の皆とそういう遊びしてた。リナリアが設定考えてくるの」
　それは……大変だっただろうな。

　そして当日。
「コンボルブルスさん、大丈夫ですか？」

「だ、大丈夫……」
顔色が悪いし、目が充血している。大分緊張しているようだ。
「大丈夫ですよ。一生懸命やったのは子供たちにも分かりますから」
「ママ、頑張れ～」
「頑張れお母さん～」
「うん……頑張る」

……と言うわけで、緊張こそしたものの、劇自体は問題なく閉幕した。子供たちも中々喜んでくれたようで、練習した甲斐があったというものだ。
「よ～し、これからだんちょの奢りで打ち上げだ～！」
勝手に決めるな……と言いたい所だが、皆頑張っていたし、今日は私が奢ろう。
「わ～い、団長の奢りだ～。存分におごり高ぶるんだよ」
「団長さん、ごちそうになります！」
「コンボルブルスママも行こう、だんちょの奢りだじょ～」
「あ、うん」
トコトコと駆け寄って、花騎士たちの輪に入るコンボルブルス。
人見知りの彼女も、何だかんだこのメンバーには慣れたようだ。
「うん、楽しい人が多いし、これからも仲良くなっていけそう」
楽しそうにおしゃべりをする四人が可愛らしく、いつまでも見ていたい気分になった。

騎士団鬼ごっこ大会！

「団長、あ～ん」
　クコの小さな手からミカンが運ばれてくる。薄皮を噛むと、甘酸っぱい果汁が口の中いっぱいに広がった。
　窓の外には薄曇りの空が広がっている。こんな日は部屋でまったり過ごすのが一番だ。クコと二人でこたつに入っている時間など、これ以上ない幸せを感じる。
　むしろ、こんな日にわざわざ外出する輩が信じられない。
　そんなことを考えていると、股の間からクコが現れた。こたつに潜り込んでこちらに来たらしい。
「えへへ、団長のお腹、ナデナデ……ん？」
　クコの手が私の下腹の辺りで止まる。どうかしたのか尋ねると、
「団長、お腹、ぷにぷに……。脂肪、増加？」
　……確かに最近は任務以外で身体を動かすことが無いし、太ったのかも知れない。
　クコは私がだらしない身体になっても好きなままいてくれるだろうか……。
「あい♪　クコ、変化、受け入れる。あ、でも……」
　クコは何だか言い淀んでいるようだ。
「団長、健康、大事。運動不足、めっ」
　それも一理あるが、こう寒いとどうしようもないだろう。
「クコ、名案あり。鬼ごっこ、希望」
　……それはクコがしたいだけなのでは？
「……ちょっと肯定。でも、鬼ごっこ、楽しい。積極的、身体、動く」
　まあ、確かに以前クコとした鬼ごっこは楽しかった。ぶよぶよの身体になるのも嫌なので、彼女の意見を前向きに検討しようと思った。
「あい♪」

　鬼ごっこ。言わずと知れた、子供に大人気の遊びだ。クコと一日中鬼ごっこをしたことがあったが、あれは楽しかった。（その後滅茶苦

茶怒られたが）
　しかし、どうせなら騎士団全体で楽しみたいものだ。楽しみながら体力増強も出来れば、それは願ってもいないことだ。
「団長、どうしたの？」
　背後から声を掛けられた。振り向くと、そこにいたのはポーチュラカだった。
「ふむ、鬼ごっこね。それなら、騎士団皆で鬼ごっこ大会をするんだよ。私が宣伝しておくから」
　確かにポーチュラカに任せればそれなりの数が集まりそうだ。
　お言葉に甘えて、彼女に任せることにした。
「任せて。たくさん集まってくれるよ『おに』頑張るんだよ」
……。

　大会は大きな運動公園で行われることとなった。
　会場には大勢の花騎士が集まっていた。ポーチュラカの人望の高さが伺えるようだ。
「花騎士、集結。クコ、楽しみ」
「ヘナも楽しみ。にぃに、クコ、捕まえる……なの」
　クコはヘナを誘ってきたらしい。二人の楽しそうな顔を見ていると、寒さも吹き飛ぶようだ。
「団長団長～！」
　ポーチュラカが駆け寄ってきた。
　良くこれだけ集まったなと言うと、彼女は申し訳なさそうに訳を話し始めた。
「実は……優勝者は団長を一日好きにしていいって宣伝しちゃったんだよ。そうしたらこんなに集まっちゃって」
　何だと……。何故そんなことを……。
「私の入れ知恵です。反省はしてない」
　横から入ってきたランタナの頬をつねる。
「いだだぁ！　ごめんって！」
「本当にごめんだよ、団長」

……まぁ、一日くらいなら大丈夫だろう。多分。
それに、花騎士たちの体力アップに繋がるのなら、私も一肌脱ごう。
「なんて心が広いんだ！　さすがだんちょ。ランタナは感動しました！」
ランタナの頬をもう一度つねっておく。
「いだぁっ！」

「それじゃあルールを説明するです？　今回は所謂『なかまおに』？　抽選で一人鬼を決めて、鬼に捕まった人も鬼になっていく？　鬼は赤いハチマキを頭に巻いて識別する？　最後に残った人が優勝です？」
軍師のワレモコウが説明をしてくれている。彼女は人見知りで話すのが苦手だが、こういう説明は進んでやってくれるので、作戦の時にも助かっている。
「逃げられる範囲は、この公園の端から端まで？　そこから出たら反則です？　そして優勝者にはご主人を好きにできる権利が与えられる？　ご主人が優勝したら、花騎士を好きにできるです？」
初耳だ。成程、それなら頑張ろう。
「制限時間は、お昼休憩を挟んで夕方5時まで？　それじゃあ、ポーチュラカがくじを引いて、鬼になった人が百まで数えたらスタートです？」
「只今、午前9時なんだよ。それじゃあ、くじを引いていくんだよ！」
シンとなる会場をよそに、ポーチュラカの手がくじ箱の中に入り、そして一枚の紙を取り出した。
「え～と、鬼は……『ポーチュラカ』なんだよ！　って私!?」
鬼が決まると、花騎士たちは一斉に逃げ出した。
「仕方ないなぁ……」
残念そうにつぶやきながら、鬼の印であるハチマキを巻いていく。
「団長、逃亡推奨。花騎士、皆、本気」
クコに急かされ、私も逃げることにした。出来れば優勝したいものだ。
「九十九……百！　よ～し、行くんだよ」

広い公園なので、ポーチュラカの視界からは花騎士は誰一人いなくなっている。
「取り敢えず仲間を増やさないとね……」
ポーチュラカが走り出した。

「ふぅ……ここに隠れていれば一先ず安心？　モコウは走るの苦手だから、隠れながらやり過ごすしかない？」
茂みに隠れるワレモコウ。しかし、
「あっ」
「あ……」
ポーチュラカとワレモコウの視線が重なる。
「ワレモコウさん見つけたんだよ。捕まえるんだよ！」
「あぅぅ……逃げるです？」
走り出すワレモコウ。だが、ポーチュラカとは体力の差があり過ぎる。あっという間に捕まってしまった。
「はぁ……はぁ……残念」
「ワレモコウさんが鬼になった。これで戦略を任せられるんだよ」
「勝ちたかったけど、仕方ない？　取り敢えず、捕まえられそうな人を捕まえて、駒数を増やしていくです？」

序盤は鬼の数も少なく、動きも少ないはずだ。今はまだ体力を温存しておこう。
そう思ってうろついていると、山になっている場所を見つけた。ここからなら鬼の動向が見やすいと思い、昇っておくことにした。しかし……
「あっ、やっぱり来たんだよ」
「捕まえるです？」
そこにはポーチュラカとワレモコウが待ち構えていた。何故待ち伏せられていたのかは分からないが、全力で逃げなければ。
「待つんだよ！　松茸あげるから待つんだよ！」
ダジャレに構っている暇はない。このままでは花騎士を好きにで

きる権利が……。
「ふぅ……疲れたんだよ……」
ポーチュラカの体力に負け、簡単に捕まってしまった。やはり花騎士には勝てないか……。
しかし、何故こんな所で待ち伏せていたのだろう。
「モコウ、地形はバッチリ予習済み？　戦いに慣れた人なら、無意識に高台に行くはず？」
成程、予習の差が出たわけだ。
しかしこれで、花騎士を好きにできる権利はなくなったわけで……くそぅくそぅ！
「おぉ、団長そんなに悔しいんだ……よしよし、ポーチュラカが慰めてあげるんだよ」
「よしよし……です？」
ポーチュラカとワレモコウに頭を撫でられる。傍から見ると大分かっこ悪い光景だった。

ワレモコウの策がハマり、鬼がどんどん増えていく。半数程は鬼になっただろうか。
「ここからが正念場？　残っているのは速い花騎士ばかり？　位置取りが大事になってくる？」
と、その時背後に気配を感じた。
「あっ、やべっ」
ピンク色のサイドテールが揺れた。間違いない、ランタナだ。奴だけは私の手で捕まえなければ。
「うわっ、だんちょ速っ！　どこにそんな力が」
いつもより足が軽い。これが限界を超えた力か……。
「はぁ……はぁ……だんちょ速過ぎるよぉ……。そんなにランタナを捕まえたかったの？　このロリコいだだぁ！」
ランタナの頬を思いっきりつねる。元凶なのだから、ランタナにも鬼として頑張ってもらおう。

ワレモコウの次なる策はこうだ。
まず偵察部隊で、花騎士たちのあらかたの位置を調べ、実働部隊が早い花騎士を数人で取り囲んでいく。
「原始的だけど、断じてこれが最も有効？」
「ヘナ……残念。にいに、好きにできるチャンス、消失……なの」
「うぅ……捕まってしまいました……」
ヘナもエキザカムも捕まったか。
「リシアンサスさんだ！　捕まえるんだよ！」
「残念ですけど、速さには自信があるんですよ！」
リシアンサスは流石の速さでポーチュラカ達を巻くが、その先にも数人の花騎士が立っていた。
「げっ！　それじゃあこっちに……ってこっちもですか!?」
数十人の花騎士がリシアンサスを取り囲む。こうなったら多勢に無勢だった。
「はぁ……はぁ……流石に無理ですよぉ！」
こうしてほとんどの花騎士が鬼になった。後残っているのは……。
「後はコンボルブルスと……クコ？」
二人とも、何度か取り囲んだが、ひらりひらりとかわされてしまった。だが、これだけの数で追いかければ流石に捕まえられるはず。
「情報が入った？　コンボルブルスは北西部、クコは南東部にいる？」
真逆にいるわけか。では私はクコの方に向かおう。
「いいんです？　クコとご主人は……」
まぁ、クコにはそもそも優勝しなくても好きにされているのだから関係ない。
彼女と真剣勝負することにこそ、意味があるのだと思う。
「分かった？　モコウはコンボルブルスの方に向かう？　ご武運を？」
お互いグッとサムズアップをして、戦いの地へ向かって行った。
「団長……来た」
冷たい風が吹き抜け、砂埃を巻き上げている。

クコの長い金髪も揺れ、くせ毛を目立たせる。
「はぁ……はぁ……。クコ、頑張った。団長、クコと勝負、希望」
いいだろう、一対一で勝負だ。互いに荒い息を吐きながら、けん制し合う。
周りの花騎士たちも私達から一歩引き、勝負を見守ってくれるようだ。
枯葉が舞い上がったと同時に、クコが後ろを向き駆け出した。私も全力で後を追う。先程まで疲労で重く感じていた足も、今では羽が生えたように軽い。
しかし速いのはクコも同じだった。二人の距離は全く縮まる気配がない。
「団長様、クコさん、フレーフレーです」
「にいにも、クコも、頑張って……なの」
花騎士たちの声援の中、二人で走る。これが中々心地良い。
「えへへ……楽しい……楽しい♪」
うむ、疲れているが、何だか楽しくなってきた。
その時、終了を告げるアラームが鳴り響いた。

≪ワレモコウ側≫
コンボルブルスを追っていた一行が、何か言い合いをしている。
「おかしいんだよ。いきなりコンボルブルスさんが消えたんだよ」
「消える……断じてそんなことはありえない？」
「本当なんですよ。取り囲んだと思ったら、急に別の場所に現れるんです」
「断じて……ん？」
会話を中断し、ワレモコウの視線が足元に向けられる。
「どうしましたワレモコウさん？」
「この穴、不自然？　モコウが調査した時に、こんな穴は無かった？」
「ドリルで開けたような穴ですね……ドリル？　まさか……」
「ふぅ……今度はこっちに……」
「コンボルブルス、見つけたです？」

「えっ!?」
　コンボルブルスが穴の中から出てきたが、その出口にはワレモコウたちが待ち構えていた。
「何で……何で……？」
「コンボルブルスが穴を掘って移動していることに気付いた？　気付いてしまえば、それは行き先を教えているようなもの？」
「うぅ……確かに。私の負け……」
　がっくりとうなだれるコンボルブルス。これにて鬼ごっこは終結した。（※掘った穴はちゃんと元に戻しました）
「ところで、最後に残ったのは誰？」
「クコさんだよ」
「クコさん……それなら安心。変な人が優勝して、団長さんが危ない目に合わないように頑張ってたから」
「コンボルブルスは偉い？」
「なでなでしてあげるんだよ！」
「なでなでです？」
「やめてぇ……」

「団長、今日、楽しかった。鬼ごっこ、もう一度、希望♪」
　何だか童心に帰ったようだったな。もう一度と言わず、何度でもしよう。
「あい。それじゃあ、今、再開。帰り道、追いかけっこ。団長、クコ、捕獲、希望」
　今からか。今度こそ捕まえて見せよう。
　薄暗くなった街の中で、クコの後ろ姿を追いかけ続けた。

「団長様、この近辺に不審者が現れたそうです」
　秘書のナズナが執務室に報告に来た。
「何でも、夕方に子供を追いかけ回している男がいたらしいです」
　それは危ないな。念のため花騎士たちにも伝えておいてくれ。
「了解しました」

しかし、大の大人が子供を追いかけ回すとは、物騒な世の中になったものだ。クコ達にも注意するよう言っておこう。

≪数日後≫

……確か、今日はクコに好きにされる日だったな。

クコのことだから、あまり無茶はしないだろうが……。

「団長、今日、クコのもの」

クコが部屋に入って来る。しかし、その手に持っている首輪とロープは何だろう。

「クコ、ヘナに享受、愛の形。クコ、団長に、愛、伝授」

……それは本当に愛なのだろうか。

「あい♪」

いや、ポーチュラカじゃないんだから……。

結局その日はクコのおもちゃにされてしまったのだった。

無人島ふたりぼっち

太陽の日差しが真上から差し込み、海と砂浜がキラキラと輝いている。名前も知らない木の木陰に座り込んだ。辺りには鳥や虫の声がこだましている。

どうやらこの島には人は一人もいないようだ。都会の喧騒から離れてみるのも、たまにはいいかも知れない。

「団長様～、美味しそうな木の実を取ってきましたよ～」

日光の向こうからエキザカムが駆けてくる。葉っぱで作った服を着て。

……どうしてこうなった。

≪数日前≫

連休を貰ったので、ベッセラの別荘へ遊びに行くことにした。寒いのが苦手な私にとって、バナナオーシャンの暑さはまるで天国のように感じた。

「団長、クルージングに興味はあるかしら？」

ベッセラがそんな提案をする。是非やってみたいと言うと、彼女は自家用のクルーザーを貸してくれた。

「運転はエキザカムに任せるわ。私もご一緒したいのだけど、今日は来客があって……ごめんなさいね」

それは残念だが、また今度一緒に行こうではないか。

「ふふ……そうね」

「ベッセラお嬢様からお任せされましたので、団長様をクルージングの旅にご案内です」

この辺りの地理には詳しくないので、全てエキザカムに任せよう。

「了解しました！　精一杯、団長様を楽しませてみせますよ～」

右手を掲げて「えいえいお～」と自分を鼓舞するエキザカムを、微笑ましく見守る。

寄せては返す波の音。

潮の匂いを感じ、爽やかな気分になる。
「団長様、下をご覧ください」
言われた通りに水面を見下ろす。
透き通った青の中、魚が群れを作って泳いでいる。
「この辺りはお魚がたくさんいますので、釣りを楽しむ人も多いんですよ」
そうなのか。これは釣り人としては見逃せないな。
「……そうですね？」

しかしのどかだ。視界に写るのは青い空と青い海しかない。いつもの忙しさがまるで嘘のように感じる。
「そうですね。団長様はいつもお忙しいですから、こうしてのんびり過ごす日も必要だと思います」
うむ。では今日はゆっくりさせてもらおう。
そう言って寝っ転がった。ギラギラした日差しを体いっぱいに浴びる。
「では、私は団長様が安心して寝られるように、辺りを注意しておきます」
エキザカムもゆっくりすればいいじゃないか。私がそう告げると、彼女は首を横に振った。
「海には危険がいっぱいなんです。大きな魚とか、悪天候とか」
魚はともかく、天気は問題ないのでは？
「いえ、海の天気は変わりやすいのです」
彼女がそう言うと同時に、ポツリポツリと水滴が落ちてきた。
「そうそう、こんな風に」
なるほど、これは確かに注意が必要だな。
……と言ってる場合ではない。雨はどんどん激しくなっていく。これはまずいのではないか。
「風も強くなってきましたね。ちょっと危ないかも知れないです。団長様、念のため救急胴衣を」
そう促されるが、激しい雨風に私の身体が海へ投げ出されそうにな

る。
「団長様！」
雨音にエキザカムの声も打ち消されていく。彼女を抱き寄せ、必死に踏ん張るが……。
「……ちょう様」
遠くから声が聞こえる。
「団長様！」
ぼやけた視界が、だんだんとはっきりとしてきた。エキザカムが私を呼んでいた。
「良かった……ご無事で良かったです」
涙声のエキザカムが私に抱きつく。彼女の頭を撫で、心配かけてすまないと呟いた。
しかしここはどこなのだろう。
砂浜と森林が見えるので、どこかの島だろうか。
「私も知らない島ですね。人間の気配がしませんし、もしかしたら無人島なのかも」
無人島か……。
取り敢えず打ち上げられたクルーザーを見る。底に穴が開いていて使えそうにはないが、非常食や非常用の道具は無事なのが幸いか。
しかし、自分たちがどこにいるのかも分からないこの状況は、正直絶望的だと言っていいだろう。
「そんなことはありません！　私がメイドとして、団長様を生還させて見せます。頑張れ私、えいえいおー！」
そんな彼女を見ていると、自分も少しだけ元気が貰えたような気がした。
「団長様、服が濡れてしまっているので、乾かしましょう。代わりに葉っぱを集めて服にしてみました」
先にエキザカムがその服？を身にまとう。白い肌の大部分が露出し、正直目のやり場に困る。

「ほら、団長様も脱いでください。風邪を引いてしまいます」
エキザカムが私の服を脱がせようとする。
……こういうのは普通逆なのでは。
「非常食はありますが、体力があるうちに食べ物を集めておいた方がいいですね。私は木の実を探してきます」
では私は魚を獲ってこよう。
木の枝を削ってモリの代わりにする。それを携えて勇ましく海へ向かうのだった。
「おお、団長様かっこいいです。頑張ってくださいね♪」

「ただいま帰りました」
木の実をどっさりと抱え、ニコニコと帰ってきたエキザカム。対照的に、私はどんよりとうなだれている。
「団長様はどうでしたか？」
聞かないでくれ……。
やがて日も沈んできた。辺りは真っ暗闇に包まれる。都会の夜がどんなに明るかったか痛感させられた。
「団長様、木で簡易の住居を作りましたので、こちらにどうぞ。バナナオーシャンでも夜は冷えますから」
木で編み込まれた家の中に入ると、外よりも大分暖かい。これなら夜も越せそうだ。
しかし、エキザカムは何でも出来てすごいな、と素直に感心してしまう。
「えへへ……ベッセラお嬢様に仕えるために、色々学んできましたから」
頬を染めて照れる彼女の頭を撫でた。

「んんっ……おはようございます。朝ですよ、団長様」
おはよう。清々しい朝だが、腰が痛い。柔らかいベッドが恋しくなる。
水平線を見つめる。助けが来るどころか、船が通りかかる気配すら

ない。
「気長に待ちましょう。ベッセラお嬢様が助けを呼んでくれるはずですから」
「団長様、今日は私が魚を獲ってみます」
エキザカムは武器で使っている槍を構え、勇ましく海へ飛び込んでいった。しかし魚獲りはかなり難しかったし、いくらエキザカムでも易々と成功するとは思えない。
数分後、エキザカムが水面に上がってきた。
「獲れました！」
エキザカムの槍に魚が突き刺さっている。これもう私は要らないのでは……そんなことを考えてしまった。

≪数日後≫
助けが来ない……。
髭をボーボーに生やした私が水面に映っている。ちょっとヒッピーみたいで格好いいなと思ってしまう。ふふふ……。
いや、笑っている場合ではない。このままでは野垂れ死んでしまう……。
「大丈夫ですよ、団長様。ファイトです！」
エキザカムはまだ元気いっぱいだ。底抜けに前向きなところが彼女の長所だし、彼女のためにもできることをしようと思った。
取り敢えず狼煙を上げてみた。これで気付いてくれるかは分からないが。
「きっと気付いてくれますよ」

≪さらに数日後≫
あぁ～、ダメだ。全く助けが来ない。来る気配もない。
「団長様、大丈夫ですよ。気をしっかり持ってください」
そうは言うが、もう打つ手がない。さよなら花騎士たち……。
「諦めないで下さい！　諦めなければきっと助かるはずです」
そう言われても、もう頑張る気力もないのだ。私にできるのは、こ

のまま静かに眠ることだけだ。
砂浜に寝っ転がり、目を閉じる。波音とはこんなにも美しいものだったか。涙が出そうになってくる。
私をこの世から見送るような汽笛の音が遠くから聞こえてきた。ふふ、ついに幻聴まで聞こえるようになるとは。
「!? 団長様、船ですよ！ 気付いてもらえるかも知れません」
何だと!?
狼煙を上げて、精一杯の声を出す。どうやら船はこちらに近づいてきているようだ。
「団長様ですね。ベッセラお嬢様がお探しです。さあ、帰りましょう」
船から落ちてきたのはベッセラの執事だった。やはり彼女が探してくれていたのか。
「団長様っ!?」
ふっと力が抜け、その場に倒れ込んでしまう。今まで生きてきて、ここまで安心したことはない。

「まったく、エキザカム。あなたが付いていながら……」
口ではそう言うが、ベッセラは決して怒っているわけではなく、どこか安心した表情をしていた。
「うぅ……申し訳ないです……」
あまりエキザカムを責めないでやってくれ。彼女がいなければ私は死んでいたのだから。
「ふふ、まあ過ぎたことを責めてもどうしようもないものね。二人とも、今日はゆっくりと休みなさい」
ベッセラの笑顔を見て、私も安心した。生きて帰ることができたのだし、結果オーライというやつだろう。
髭もじゃの顔をエキザカム見せ、二人で笑い合うのだった。

コンボルブルスのクリスマス

騎士団にある大きな台所ではその日、トントンと包丁がまな板を叩く音、グツグツと鍋が煮える音が絶え間なく鳴り続いていた。
豪華な料理が次々と並べられていく。チキンにシチューにローストビーフ、そして、
「よ～し、出来たッスよ！　ヤドリギ特製のクリスマスケーキ」
ヤドリギの身長を超えるケーキがテーブルに置かれ、一際異彩を放っている。
「ふっふっふ、こりゃあ嫌でも目立っちゃうッスよ！」
今日は１２月２４日、クリスマスだ。騎士団のスタッフも花騎士たちもパーティの準備に取り掛かっている。
「はい、ターキーはできたよ。次は何作ればいい？」
中でもコンボルブルスは手際よく料理を完成させている。
「料理はあらかた終わったみたいですし、次はパーティー会場の飾り付けをお願いします」
「うん、分かった」
キッチンを抜け、城内で一番大きなホールへ向かうコンボルブルス。その後ろ姿を見て、何人もの花騎士たちが彼女を褒め称えていた。
「コンボルブルスさん、本当に手際いいッスね～。自分も負けてられないッスよ！」
「本当によくやってくれてるよね。でもコンボルブルスちゃんは……」
「わぁっ……凄い、綺麗……」
会場の飾りを見て、コンボルブルスは感嘆の声をあげた。
「コンボルブルスさん、来てくれたんだ。早速ツリーの飾りを作って欲しいんだよ」
「分かった。任せて」

「おぉ、大分豪華になったな」
　団長が準備の様子を見に来ると、それに気付いたコンボルブルスが彼を呼び止めた。
「団長さん、丁度いい所に。ツリーの一番上に星付けるの手伝って」
　ツリーの先端は、コンボルブルスの身長では脚立を使っても届かない高さにあった。
「お安い御用だ」
　団長が脚立に上り、ひょいっと手を伸ばすと、ツリーの天辺まで手が届いた。そこに星の飾りをつけると、コンボルブルスはニコニコしながら彼に近づいて礼を言った。
「ありがとう、団長さん」
「これだけちゃんと準備をしているんだから、花騎士たちも皆パーティーを楽しんでくれるだろうな」
「うん、そうだね……」
　笑顔を見せる団長と対照的に、コンボルブルスは浮かない表情をしていた。そこで団長もハッと気付く。
「そうか、コンボルブルスはパーティーに出られないのか。それは残念だな……」
　申し訳なさそうな団長に対し、コンボルブルスは慌てて笑顔を繕った。
「あっ、大丈夫だよ団長さん。お料理とか飾りつけでクリスマス気分は充分味わったから、私のことは気にしないで楽しんできて」
「そうか……」
　言葉ではそう言っているが、彼女の笑顔はとても寂しそうだった。

≪その夜≫
「ふぅ～、今日は大変だった」
　クリスマスムードが漂う中、私は一人ベッドに就く。パーティーには参加したことがない。夜になると眠っちゃうから、仕方ないんだ。
　私にとっては、クリスマスは寂しいものでしかない。本当は私だって皆と楽しく過ごしたいんだ。特に、この騎士団には良い人がたくさ

んいる。そんな人たちと一緒に楽しめないのは、悲しくて切ない。
だからといって、わがままを言ったら失望されちゃう。仕方ないんだ。
意識が遠くなっていく。眠りに落ちる時、私は怖くなる。皆に置いて行かれること、皆から失望されること……。
「団長さん……」
好きな人、一緒にクリスマスを過ごしたい人の名前を呟いた。

「んぅ……」
白い光が私の部屋に差し込む。冷たい朝の空気を感じて、私は目を覚ました。
楽しい夢を見たことをぼんやり覚えている。
団長さんや花騎士たちと一緒にクリスマスパーティーをする夢。叶うことのない夢を。
「……クリスマス終わっちゃった」
今年のクリスマスも寂しく過ぎていった。いつもと同じ。
「コンボルブルス、起きてるか？」
扉の向こうで団長さんが呼んでる。
「おはよう、団長さん。どうしたの？」
扉を開けると冷たい空気が部屋に入ってきた。
「支度が出来たらホールに来てくれないか？」
「え……ああ、片付けの手伝いかな？　分かった」
「何を言ってる？　クリスマスはこれからだぞ」
団長さんが優しくにっこりと笑う。どういうことなのか、私には分からなかった。

「メリークリスマス！」
パーティー会場に入ると、数人の花騎士たちがクラッカー片手に出迎えてくれた。
「あ、あの……どうして……？」
困惑する私に、団長さんが語り掛けてきた。

「コンボルブルスが夜のパーティーに参加できないと気付いて、何人かの花騎士たちに声を掛けてみたんだ」
「そう……だったんだ……」
「まあ、一晩で酔い潰れてしまった者もいるけどな……」
　団長さんの視線が、部屋の隅で寝ているランタナさんに向けられる。
「ｚｚｚ……ランタナは合法だ～……もっと酒持って来～い」
「コンボルブルスさんは、準備とか色々頑張ってたからね。それなのに参加できないのは勿体ないと思ったんだよ」
「ありがとう、ポーチュラカさん」
「コンボルブルスさんに楽しいクリスマスをお送りすます、ってね」
「……」

「まあ、全員は揃わなかったが、今日は楽しんでくれ」
　優しい彼の笑顔に、涙が零れそうになる。それをごまかすために、団長さんの胸に飛び込んだ。
「!?　ど、どうしたんだコンボルブルス？」
「えへへ……何でもないよ……ただ、嬉しくて」
　涙声になってしまって恥ずかしい。
　私が泣いていることに気付いた団長さんは、大きな手でそっと頭を撫でてくれた。
「コンボルブルスさんのために、新しいクリマスケーキを用意したッスよ！」
　ヤドリギさんが私の身長よりも大きなホールケーキを運んできた。
「わぁ～、おっきいね」
「どうッスか？　目立ってるッスよね!?」
「うん、凄い目立ってる」
「本当ッスか～。やったッス！」
　そう言えば、彼女は目立つのが好きなんだった。でも一晩でこんな大きなケーキを作ったんだし、ヤドリギさんは誰よりも目立ってると思った。

「どうだ、楽しんでくれたか？」
「うん、凄く楽しかったよ。ありがとう、団長さん」
昼まで続いたパーティーが終わり、自室に帰ってきた。団長さんが今日は一緒に居てくれるから、今年のクリスマスは楽しく過ごせそう。
「団長さん♪　えへへ……」
団長さんの膝に頭を預ける。彼の体温が伝わってきて、何だか安心してしまう。
クリスマスだからって、特別何かをすることはない。いつも通りこうして過ごすだけで、私は幸せになる。
静かな部屋に二人きり。ストーブが燃える音だけが響いている。
「本当に今日は静かだな。……ん？　コンボルブルス、窓の外を見てくれ」
団長さんに言われて、寝そべりながら外を見る。
「わぁっ、雪だ！」
窓の外では白い雪がさらさらと降り注いでいた。私は思わず立ち上がって、外に広がる銀世界を食い入るように見つめた。
はしゃぐ私を見て、団長さんは優しく微笑んだ。
「ロータスレイクでは中々見られないからな。寒いけど、外に行って見てみるか？」
「うん！」
団長さんが、私の編んだマフラーを巻く。赤くて、凄く長いマフラー。
「えへへ……」
団長さんの隣に行って、一緒のマフラーに包まった。そのために長く編んだんだから。
空から降ってくる雪を見上げると、何だか自分が空に昇っているような気分になる。
「足元、滑るから気を付けるんだぞ」

「は～い」
「雪、すっごく綺麗。ホワイトクリスマスだね」
「ああ」
団長さんの大きな手が私の頭を撫でる。手袋越しでもその温かさを感じる。
冷たい雪が当たっているのに、私の頬はどんどん温かくなっていく。頬だけじゃなくて、身体も心もポカポカする。団長さんと居ると不思議。

楽しかった12月25日ももう終わろうとしている。外はもう真っ暗で、美しい白い雪がしんしんと降っているだけだ。
「コンボルブルス、もう眠る時間じゃないのか？」
「うん……私はもう寝るから、団長さんは遊びに行っていいよ。特別な夜だし、他の花騎士さんたちも待ってると思うの」
本当はずっと一緒にいて欲しい。でも、わがままは言えない。彼に失望されたくないから。
「いや、今日は一緒にいよう」
だから団長さんのその言葉を聞いた時、嬉しくて嬉しくてたまらなかった。
「私、寝てるだけだよ……そんなのつまらないでしょ？」
「そんなことないさ。好きな人と一緒に過ごせるなら、これ以上幸せなことはないよ。それに君の寝顔も見られるしな」
「うぅ……もう、からかわないで」
顔が真っ赤になってること、団長さんに気付かれてないかな。

薄れゆく意識の中、一つだけ伝えておきたいことがあった。ベッドの中で団長さんを見つめながら、何とか言葉を紡いだ。
「団長さん、今日はありがとう。凄く楽しくて幸せだった。私、今日のことずっと忘れないから……」
その夜は素敵な夢を見た。団長さんと一緒にクリスマスの街を歩く夢。イルミネーションが綺麗に輝いていた。

目を覚ますと、そこにも団長さんの姿があった。嬉しくなって、彼の頬にキスをした。

リーダーとして

「団長さん、こっちの書類の整理は終わったよ。後は何かやることある？」
イキシアがツインテールの長い黒髪をたなびかせて近づいてくる。後は大丈夫だから、休んでいてくれと伝える。
「はーい。それじゃあ団長さんのこと観察してるね」
彼女のキラキラとした眼差しが私に突き刺さる。可愛らしいが、これでは仕事が中々手に付かない。
イキシアは最近私の騎士団に配属されたのだが、どうやら私からリーダーシップを学びたいらしい。ことあるごとに執務室にやってきて、私に質問したり観察したりしている。
それで何かを学べるかは分からないが、勉強熱心なのは感心だ。それに最近は花騎士のリーダーになれるような人材が欲しかったので、彼女がそうなってくれればいいなと密かに期待しているのだった。
「団長さん、コーヒー淹れてきたよ」
目を離している隙にコーヒーを運んできてくれたようだ。しかし足元に気を付けないと……。
「きゃぁっ！」
落ちていた本に足を取られ、イキシアの身体が宙に浮く。
「っとと！」
何とか踏みとどまり、お盆でコーヒーカップをキャッチした。
「あっぶない……もう少しで団長さんをやけどさせちゃう所だったよ。ごめんなさい、次は気を付けます……」
と、こんな感じでイキシアには少しドジな所があるのだった。
結果的に大丈夫だったのだから、あまり気にする必要はないと肩を叩いた。
「うぅ……ありがとう。団長さんは優しいんだね……」
顔を真っ赤にして目を潤ませるイキシア。その表情にドキッとしてしまう。
「私どうしたらドジをなくせるのかな……これじゃあリーダーになん

てなれないよ……」
俯く彼女の頭を撫でる。
リーダーがドジではいけないという決まりはないだろう。実際、私も良くドジをするしな。
「あ～、確かにそうだね」
そうあっさり納得されると複雑な気分になるな……。
と、とにかく、完璧な人間などいないのだから、少しの愛嬌は必要だと思うんだ。特にイキシアはそんなところも愛されているのだし。
「愛されてる……私が？」
うむ。所属されて日は浅いが、他の花騎士たちの評判は上々だ。それもイキシアの真面目で誠実な人柄のおかげだろう。
「そっか……本当なら嬉しいな……」
目を閉じて微笑む彼女が何とも可愛らしかった。

「ご主人、いるです？」
執務室の扉の向こうから声が聞こえてきた。こんな独特な話し方をするのはワレモコウしかいない。
「ご主人に相談がある？　モコウ、お暇をいただきたいです？　ベルガモットバレーに帰りたい？」
な、何故だワレモコウ。私に何か至らない所が……？
「……断じて、モコウはご主人の奥さんじゃない？」
ボケのつもりだったが普通に返されてしまった。
まあ、有給取得は花騎士の権利だし、問題はない。（というか、有給取得率が悪いと私が上に怒られる）
「はいです？　でも、一つだけ気がかり？　モコウがいなくて、戦術は大丈夫です？」
確かにワレモコウはいつも作戦を考えてくれている。特に一週間後の任務にワレモコウがいなくなるのは辛いか。
「モコウ、帰るの遅らせてもいいです？」
いや、いつまでもワレモコウに頼ってばかりではダメだろう。他の花騎士たちにも経験を積ませなければ。

「……分かったです？」
「……私が部隊長に!?」
イキシアが驚愕の声をあげる。それもそのはず、他のベテランたちを抑えての大抜擢だ。
「嬉しいけど……だだだだ大丈夫かなぁ？」
声が震えている。落ち着いて深呼吸をするよう促した。
「すぅ……はぁ……でも、本当に私で大丈夫？」
それは勿論。ワレモコウや他の花騎士たちの推薦も貰っている。
「い、いつの間に……」
私もイキシアが適任だと思った。どうだ、引き受けてくれないか。
「だ、団長さんがそう言うなら……うん！　私頑張るよ！」
手をギュッと握るイキシア。真面目な彼女ならきっと問題ないだろう。

≪害虫討伐作戦当日≫
ブロッサムヒル郊外の田園部。ここでは最近、害虫による被害が多発していた。調査隊を派遣したところ、どうやらこの近辺に害虫の巣があることが判明した。
「その巣ごと殲滅するのが今回の作戦だね？」
しかし厄介なことに、今回の相手はアリ型害虫だ。連携力が高く、また女王を守ろうとする意識がとても強い。
「逆に、女王を倒せれば群れは一気に殲滅できるんだけどねぇ」
「団長さん！　偵察終わりましたよ！」
リシアンサスが勢いよく扉を開けて帰ってきた。
「やっぱり巣に近づくと害虫が集まってきます。範囲はだいたいこんな感じで……」
地図に害虫の知覚範囲を書き込んでいく。
「ありがとうリシアンサスさん」
「どういたしまして！」
イキシアはリシアンサスの足の速さを見込んで偵察を頼んだの

だった。仮に見つかっても逃げることが出来るという理由で。

リシアンサスの報告した害虫の特徴はこうだ。

まず巣から半径３ｋｍ以内に入ると、群れ全体に察知される。

また、誰か一匹に気付かれると、近くの仲間が集まって来るようだ。

「それじゃあ、陽動で群れを足止めしてから女王を叩く感じで行こうか？」

私もその作戦が一番だと思う。あとは陽動部隊と巣に潜入する部隊の振り分けだが。

「大丈夫。それは私に任せて！　ゲホッ！」

胸を思い切り叩きすぎてむせたようだ。それを見て、固くなっていた花騎士たちの表情も少し柔らかくなった。

「というわけで、陽動二部隊は南側で害虫を引き付けて。私達は気付かれないように北側から巣に侵入するから。それと、陽動部隊のリーダーはリシアンサスさんとポーチュラカさんに任せていい？」

「了解しました」

「リーダーだね？　いーだーろう」

「……とにかくお願いね？　危なくなったら、バラバラじゃなくて固まって逃げてね」

潜入部隊は少数精鋭で、陽動部隊の方に多く人員を配置した。

「陽動の方が危険だからね。この方がリスクは少ないと思って」

害虫の巣一掃作戦が開始された。一斉に駆けていく陽動部隊。我々はスコープで遠くから様子を眺めている。

「よし……その調子で。うぅ……本当に大丈夫かな、この作戦」

大丈夫だ。それに、リーダーがその様子では、成功するものも成功しなくなってしまう。もっと堂々としていなければ、部下も不安になってしまうだろう。

「そ、そっか。団長さんはいつも堂々としていて凄いね」

私も内心はドキドキだが、それでも信じるしかないんだ。花騎士た

ちを。
「……そうだよね。リーダーが一番信じてあげないとね」
「うん。上手い具合に引き付けてくれてる。それじゃあそろそろ行こうか？」
物音を立てないように巣へ近付く。巣は地下に長く伸びていて、中の様子は見えづらい。
「中にも護衛の害虫がいると思うから、気を抜かないでね」
緊張はしているようだが、あくまで笑顔は絶やさずに花騎士たちを鼓舞するイキシア。中々頼もしいと感心してしまう。

中の害虫を倒しながら、女王がいると思われる最深部にたどり着く。岩影から中を覗き込むと、存在感を放つ害虫がいた。
「ん？　あれが女王じゃない？　明らかに大きいし」
他の害虫が小～中型なのに対し、一匹だけ大型並の大きさだ。それに何故か網タイツを履いて鞭を持っている。そっちの女王様なのか……。
「よし、それじゃあ一気に仕掛けるよっ！　あっ！」
一気に攻撃しようとした矢先、イキシアが石につまづいて転んだ。それに気付いた女王アリが彼女に向けて突進してくる。
「コノブタヤロォォ!!」
「きゃぁっ！」
しかし、彼女だけしか見えていない害虫に、花騎士たちが不意打ちを仕掛ける。
「コノ……ブタヤロウ……」
害虫は力なく倒れた。結果的にイキシアがフェイントの役割をしたということか。
「えっ……これでいいの？」
結果オーライだ。
「おっ、抵抗が弱くなった。というか意気消沈って感じなんだよ？」
女王が沈んだことで指揮系統を失った害虫たちは、花騎士の手によって呆気なく倒された。

「というわけで、イキシアさんお疲れ様会を始めるんだよ」
講堂を借りてパーティーをすることになった。もちろん、主役はリーダーのイキシアだ。
「あ、ありがとう……。でもいいのかな？　私あんまり活躍してないけど……」
「いいんですよ。勝ったっていう結果しかないんですから。ハッピーエンドですよ」
「でも頑張ってくれたのは皆だし……」
釈然としていないイキシアに私からも声をかける。
リーダーというのはそういうものなのだ、と。
「そ、そうなの……？」
そうだ。部下の活躍は自分の手柄だし、部下の失態は自分の失態だ。
「団長がそんな感じだもんね～」
ポーチュラカの一言に会場からも笑いが起こる。
結局はそれを皆が許してくれて、付いてきてくれれば、それでいいんだ。事実、イキシアが今日の討伐を誇っても誰も文句を言わないだろう。
「……うん！　皆ありがとう！」
イキシアの顔から満面の笑みがこぼれる。こういう素直さが、皆からも好かれているのだろう。
「団長さん、私もっと頑張って、この騎士団の皆をまとめられるリーダーになるから。だからその……これからもよろしくお願いします。キミからもたくさん学ばせて貰うからね」
こちらこそよろしくと返す。
勉強熱心な彼女ならば、本当に素晴らしいリーダーになるのも夢ではないなと思った。

≪余談≫

「イキシア、お姉ちゃん。騎士団のお姉ちゃん」
「イキシア、ヘナたちのねぇね……なの」
イキシアがクコとヘナに取り囲まれているようだ。
「あ、団長さん。えへへ……懐かれちゃって。この騎士団、小さい子が多いから妹や弟たちを思い出すよ」
そうか。花騎士たちの仲が良いのは微笑ましいことだ。
「あれ？　でも本当にちっちゃい子ばかりだよね？　何でだろう？」
き、気のせいだ。別に小さい花騎士を優先して所属させているわけではない。断じて気のせいだ。
「……そ、そうだね？」

花騎士たちと年越し

１２月３１日の夜。思えば今年一年は色々なことがあった。しかし、余計なことは綺麗さっぱり忘れて、新しい年を迎えたいと思う。
「だんちょ、酒持ってきたぞ～！　一緒に飲も？」
ランタナがノックも無しに部屋に入ってきた。その小さな手には酒瓶。何だか不釣り合いな格好だなと思ってしまう。
「ほら飲め飲め～。それともランタナの酒が飲めないのか!?」
ランタナが酒瓶を押し付けてくる。頬がほんのり赤くなっているが、もしかして既に酔っているのか……？
「だって今日は年越しだよ。飲んで全部忘れるんだじょ！」
一理あるかも知れない。彼女から酒瓶を受け取り、私も一杯の酒を口にした。

「団長～、いる？」
「団長さん、いらっしゃいますか？」
やがてポーチュラカとリシアンサスも尋ねて来る。しかし部屋に立ち込める酒の匂いに、二人は顔をしかめた。
「って団長とランタナさん、お酒臭いんだよ。二人を避けたい気分だよ」
酒だけに避けるか……ふふふ、中々面白いじゃないか。
「だ、団長が笑った……！」
「ポーチュラカさんのダジャレで笑うなんて、相当酔ってますね」
「……リシアンサスさん？」
酒を飲みながらわいわいと賑わう花騎士たち。今夜はまったりと過ごしたかったのだが、これはこれでいいものだ。
「お酒はあるけど、おつまみがないね。どうせなら美味しい料理を食べながら飲みたいけど」
「ランタナはお菓子なら作れるじょ。だんちょ、ちょっと台所借りるね？」
待て、新年早々部屋がなくなるのは辛い。

「私はホットドッグとかハンバーガーなら得意ですけど……」
　これだけ人がいて、全く戦力が足りていないのも珍しい。
「料理といえば、コンボルブルスさんの料理はおいしいよね。私大好きなんだよ」
　私も何度も食べさせてもらっているが、確かにコンボルブルスはかなりの腕前だ。
「よし、それじゃコンボルブルスの部屋にレッツゴー！」
「コンボルブルスさんは寝てる時間ですよ？」
「起こそう！」
　やめてやれ。というかテコでも起きないと思うが。
　結局私がつまみを作ることになった。とはいえ、冷蔵庫の残り物で適当に作るだけだが。
「だんちょの女子力にランタナは感服したじょ。嫁に来い、だんちょ！」
　……将来花騎士に養ってもらうのもいいかも知れない。
「団長さん、悪い顔になってますよ」
「よし、それじゃあ今日からだんちょはランタナの嫁だ。私より先に寝てはいけないし、私の後に起きてもいけない！」
　いつの時代だ。やっぱり却下だ。

　時刻は１１時を過ぎている。あれだけ賑わっていた花騎士たちも、もう疲れと酔いが回ったのか、しんみりとした空気になってきている。
「もうすぐ年越しですねぇ」
　リシアンサスがポツリと漏らした。時計の針がカチカチ動く音が鳴り響く。
「来年はもっとダジャレで笑ってもらえるように頑張るんだよ」
「私はもっと絵本を描いて、皆をハッピーにしたいです」
「私はペポをもっとかじる！」
　花騎士たちが新年の抱負を述べていく。目標があることはいいことだ。最後のはアレだが。

「団長は？」
私は、そうだな……春庭が平和で、花騎士たちが健やかにいてくれれば、それで充分だ。
「だんちょ、何よそ行きのお願い言ってんの？　もっとあるでしょ、ハーレム作りたいとか」
それも悪くないかも知れない……。
「団長さんがまた悪い顔に……」

時計の針が回っていく。分針が１２を指した瞬間、花騎士たちの歓声が上がった。
「新年、おめでとうございます」
「おめでとうだよ！」
「おめでと～！」
グラスを掲げて再度乾杯をする。先程の空気はどこへやら、再び賑やかな飲み会が始まった。

「……ちょう……団長」
ポーチュラカの声が聞こえて目を覚ました。ぱっちりとした目が私を覗き込んでいた。
起きた瞬間、あまりの寒さに身震いをする。布団もかけずに眠ってしまったようだ。
「もうすぐ初日の出の時間だよ。二人も起こして、一緒に見に行こう？」
部屋を見回すと、リシアンサスもランタナもいびきをかいて眠っている。可愛らしい寝顔で、起こすのが忍びなく思った。

まだ暗い寒空の下を四人で歩く。冷たい風に身体を震わせながら。
「うぅ～……寒いです……バナナオーシャン出身者にこれは堪えますよ……」
「ふふふ……そんな寒い時はだんちょにくっつけばいいんだじょ。そら囲め～！」

ランタナの一言を発端に、三人が私の周りを取り囲み、ギュッと抱きついてきた。
「おお、団長の身体温かいんだよ」
「本当ですねぇ……ずっとくっついていたいです」
私の方も花騎士たちの体温を感じて温かくなる。
「だんちょ、ハーレムのご感想は？」
これは中々……良いものだ。
やがて辺りを見渡せる丘の上へやってきた。冬の透き通った空気の中、白い光が差し始める。
「うわぁ、綺麗だね～団長」
瞳を輝かせながら日の出を見つめる三人。柔らかい光に包まれた彼女たちを見るだけで、私の心も温かくなっていくようだった。

「ぶぇっくしょん！」
「ランタナさん、鼻水出てますよ」
見ると三人とも顔が赤くなってしまっているし、そろそろ帰ろうかと提案する。
「よし、帰って飲みなおすぞ、だんちょ。埴生の宿も我が宿だからな」
いや、私の部屋なのだが……。
「あ、その前に……」
「「来年もよろしくお願いします！」」
しんしんと冷える街の中に、花騎士たちの元気な声がこだました。

コマチソウと羽根突き害虫

「おっ、団長～！　明けましておめでとう。今年も宜しくね」
今年最初の出勤に来たのだが、綺麗な着物を着た美少女に声をかけられてしまった。向こうはこちらを知っているようだが、一体誰だろう。
「あ、あれっ？　どうしたのそんなキョトンとした顔して」
この声、舌足らずな喋り方。そしてパッチリとした青い瞳。……コマチソウか。
「分からなかったの？　うわ～、信じらんない～」
あまりにも雰囲気が違い過ぎて分からなかったのだ。すまないと頭を下げて謝る。
「なんてね。あたしだって鏡見て『誰これ!?』って思ったもん」
本当に見違えたようだ。桃色を基調にした着物がよく似合っている。
「えへへ……団長はこういうの好きかなって思って」
コマチソウの頬が着物と同じ桃色に染まる。そのまま小さな手を広げて抱きついてきた。
「それにしても暇だね～。害虫もお正月休みなのかな？」
膝の上に乗ったコマチソウが、脚をパタパタさせながらぼやく。
休みではないだろうが、寒いから活動が鈍くなっているのかも知れない。
「そっか。早く新しい害虫バラしたいな」
可愛らしい顔で物騒なことを言っている。
コマチソウは害虫のパーツを集めるのが好きな花騎士だ。彼女の作った標本を何度も見せて貰ったが、確かに女の子の趣味としては少々変わっているかも知れない。しかし、標本を見せる彼女の顔はキラキラと宝石のように輝いている。その顔が見たくて、新作の標本が出来る度に見せて貰っているのだった。

「年末年始だらだらしちゃってさ～、ちょっと太っちゃったんだよね。だから運動しよ？　はいこれ」
　コマチソウが手渡してきたのは羽子板。どうやら羽根突きをしたいようだ。しかし今は勤務中だし、遊ぶわけには……。
「え～、いいでしょ～。どうせ今日は暇だよ」
　コマチソウが駄々をこね始めたその時、一本の連絡が入った。
「何々、今年最初のお仕事？」
　興味津々で尋ねて来るコマチソウ。彼女の頭をポンと押さえながら、任務の支度を始めた。

「害虫はどこだ～!?」
　コマチソウは着物のまま任務にやってきた。我が団には明らかに戦闘用ではない格好で戦う花騎士も多いので、最近はもう気にならなくなってきた。
　ブロッサムヒル市街地。ここで何人かの少年少女が害虫に襲われたらしいが……。
「おっ、被害者発見！」
　そこには顔中墨だらけで泣いている子供たちがいた。
　彼らの話によれば、羽根突きで遊んでいる最中に害虫に襲われたらしい。
「なるほど、羽根突きが好きな害虫なのかもね。だから今の時期に出てきたのかも」
　しかしそんな害虫がいるだろうか。
「害虫もきっと暇なんだよ。だからあたしたちが羽根突きしてたら、混ざりにくるかも」
　そう上手くいくとは思えなかったが、ここは害虫捕獲のプロに任せることにした。

「行くよ団長、そ～れ！」
　打ち上げられた羽根が冷たい風にひらひらと揺れる。羽根突きなんて久しぶりなので感覚が分からない。思いっきり空振りすると、コ

マチソウはそれを見てけらけらと笑った。
「団長下手くそ～。取り敢えずあたしの一勝ね」
墨で顔に落書きをされる。そう言えばこういうルールもあったな。
「よ～し、どんどん行くよ～」
コマチソウが構えたその時、木陰から蝶の害虫が飛び出してきた。
「アケオメェェェ！」
「うわっ、出た！」
まさか本当に出て来るとは……。
それ以上に驚いたのが害虫の格好だ。着物のようなものを羽織り、手には羽子板を持っている。そんな和風な格好なのに何故か頭はど派手な金髪のトルネードというアンバランスさが、この害虫を一際目立たせている。
「う～ん、この害虫、『チョウチョウフジン』っていうのに似てるな～。でもあいつは羽子板じゃなくてラケットだし、もしかしたら新種かもっ！」
コマチソウが目を輝かせている。
「団長、この害虫捕獲しよ!? あれの仲間なら羽根突き対決で勝てば意気消沈して、簡単に捕まえられるはずだから」
害虫と羽根突き勝負とは……危険ではないだろうか。
「大丈夫。あいつらスポーツマン精神があるし、対戦中は人に危害加えないから」
コマチソウのテンションを見ると断りづらく、結局害虫と羽根突き対決をすることになった。

「よ～し、勝負だ害虫！」
「ヨクッテヨ」
羽根の打ち合いが始まる。コマチソウもさすが花騎士だけあって、身体能力もかなりのものだ。しかし……。
「うわっ、飛ぶのは卑怯だって！」
高く打ち上げた羽根を害虫が上空から打ち落とす。角度の付いた羽根を打ち返すことができず、地面に落ちてしまった。

「あぁ～、負けちゃったよ～」
悔しがるコマチソウに害虫がじりじりと近づいてくる。
「な、何するの!? やめろぉー!」
「うぅ……墨だらけ……」
どうやらこの害虫は負けた者の顔に墨で落書きしてくるようだ。コマチソウも私も既に１０回ずつ負けてしまい、顔中墨だらけにされてしまった。
「ぷっ……団長の顔、面白いことになってるよ」
笑っている場合ではない。このまま害虫を放っておくことは出来ないし、何とか勝たなくては……。
「そうだね～。勝たないと脚とか羽とか貰えないし」
採集する気満々だな……。
「お困りのようね、団長」
その声は!
「ここは私に任せなさい」
赤いトルネードが眩しく光る。花騎士のベッセラだ。
「要はテニスでしょう? 私も幼い頃からやってきたし、害虫なんかに負けることはないわ」
自信満々のベッセラ。非常に頼もしい。
「私も応援します。頑張って下さい、お嬢様」
エキザカムの応援を背に、ベッセラが害虫の前に陣取る。
「さぁ勝負よ、害虫! 優雅に勝ってみせるわ!」
「キナサイ」
「うぅ……墨だらけ……こんなの全然優雅じゃないわ……」
「お嬢様、今すぐお拭きします」
駄目だったか。まぁ、テニスと羽根突きでは大分勝手が違うし、仕方ないか。
しかし本当にどうすればいいのだろう。勝てるビジョンが見えないぞ。

「もうこれは罠を仕掛けるしかないね」
　しかしそれはスポーツマンシップに反するのではないか。
「そんなのどうでもいいの！　勝てばいいんだよ、勝てば。勝てば害虫バラせるんだし」
「というわけで、これが特殊加工された羽根です。目の錯覚を利用して、羽根の動きがブレて見えます」
　何でそんなものを……。というか、それを使ったら我々もやりづらいんじゃないか。
「団長に勝つために持ってきたんだよ。まさか害虫相手に使うとは思ってなかったけど。それに、この専用眼鏡をかければ普通の動きに見えるから」
　……取り敢えず使ってみよう。
「いくぞ、害虫！」
「イクワヨ」
　コマチソウのサーブが高く打ち上がる。打ち返そうとする害虫だったが、
「ナンデ!?」
　思いっきり空振りした。
　その後も何度も対戦したが、一向に打ち返してくる気配がない。
　コマチソウのスマッシュが決まった瞬間、害虫はがっくりと膝?を折った。
「モエツキタ……マッシロニ……」
「やったぁ、あたしの勝ち～！」
　ここまで来ると害虫が少し哀れになってくる。しかし当のコマチソウは全く気にせず勝ち誇っている。
「それじゃ、パーツ獲らせて貰うね」
　ブチッと音を立てて害虫の手足が外れていく。
「アァー！」
　害虫の断末魔が響く中、コマチソウの可愛らしい笑顔がきらめいていた。

「ふぅ～、今日は疲れた～」
　コマチソウは執務室に戻ると、ぐでーっとソファーに寝そべった。だらしなく乱れた着物に、私は目のやり場に困ってしまう。
「あたしも団長も墨だらけだし、もう散々だよ～」
　そう言いながら、「抱きしめて」と言わんばかりに両手を広げて来る。期待通りにその小さな身体を抱くと、コマチソウは耳元で囁き始める。
「だからさ、一緒にお風呂入ろ？　いいでしょ？」
　その甘い囁きに、思わずお姫様抱っこをしてしまった。どうやら私は彼女の罠にかかってしまったようだ。

ポーチュラカのドレスアップ

「だ、団長……どうかな……？」
頬を赤らめながら試着室のカーテンから顔を出すポーチュラカ。
どうと言われても顔だけしか見えないのだが……。
「わわっ！　そうだよね、ごめん！」
カーテンがゆっくりと開いていく。真っ赤なドレスを身に纏ったポーチュラカがそこにいた。
「こんなヒラヒラしたの、落ち着かないんだよ……」
仕方ないだろう。いつもの服でパーティーに出るわけにはいかないのだし。

《数日前》
「パーティー？」
ああ、騎士団にも出資してくれている貴族が主催するパーティーが開かれる。そこに私達も呼ばれているんだ。
「そっか、大変だね団長」
他人事のように言っているが、ポーチュラカも行くんだぞ。
「ええっ!?　ど、どうして？」
貴族の方から活躍している花騎士と話をしてみたいという要望があったんだ。
そこでうちの騎士団のメンバーを考えてみろ。クコやリシアンサス、エキザカムは別の任務だし、ワレモコウやコンボルブルスは人見知りだし、ランタナはランタナだし。というわけで、君が一番適任なんじゃないかと思ったんだ。
とはいえ、本当に嫌なら行く必要はない。適当な理由を付けて断っても問題はないだろう。
「……ううん、行くよ。だって団長のためだもん」
そう言ってもらえると助かる。
「団長のために断腸の思いで決断したんだよ！」
華麗なドヤ顔を決めるポーチュラカだった。

……と、とにかくパーティーに行くのならドレスを買わなければいけないな。
「ドレス!?　え～……」
怪訝そうな顔をするポーチュラカ。嫌なのだろうか。
「嫌というか……あんなにヒラヒラしたの着てたら恥ずかしいんだよ……」
いつもは真っ赤で派手な服やへそが丸見えの服を着てるくせに、何を今更……バナナオーシャンの価値観がいまいち分からない……。

というわけで、乗り気でないポーチュラカを連れてドレスショップにやってきた。店内には煌びやかなドレスが所狭しと並べられている。
「ねぇ、本当にドレスじゃないと駄目？」
もう覚悟を決めたらどうだ。
「うぅ……団長がいつになく冷たい……」
虚ろな目をした彼女の頭にポンと手を置き、耳元で囁いた。私もポーチュラカのドレス姿が見たいのだと。
「え……えぇっ!?」
耳まで真っ赤になるポーチュラカ。体温まで高くなったのがよく分かった。
「も、もうっ！　団長ったら、そんなこと言っても乗り気になんてならないんだよ。私はそんなちょろくないんだよ」
そう言いながらも、ドレスを探し始めるポーチュラカだった。
「あっ、店員さ～ん、私に似合うドレスはどれっす？」
やたらテンションが上がってしまったようだ。このままだと店内でダジャレ連発しそうだったので、慌てて止めに入った。

並んでいるドレスの中で、一際目を引くものがあった。ポーチュラカの好きな色。赤いドレスがそこにあった。
「おぉ……確かに綺麗だよ。でも私に似合うかな……？」
きっと似合うはずだ。試着してみたらどうだ。

「う、うん……」

「……こんなヒラヒラしたの、落ち着かないんだよ……」

仕方ないだろう。いつもの服でパーティーに出るわけにはいかないのだし。

それにとても似合っている。可愛いぞ。そう言うと彼女の頬はドレスに負けないくらい赤く染まった。

「か、可愛い……？　本当？」

答えの代わりに彼女を抱き寄せ、鏡の方を向かせる。白い綺麗なうなじや鎖骨が真っ赤なドレスに包まれ、可愛さと美しさが絶妙に調和している。ポーチュラカのはっきりとした顔立ちも、ドレスとよく似合っている。

「そ、そうかな……？」

うむ。ポーチュラカはいつだって可愛いが、ドレスを着るとそれがより際立つ。

本当に、黙っていれば絶世の美少女だ。

「も、もうっ、そんなに褒められると照れるんだよ……。ん？」

さて、似合うドレスも見つかったことだし、早く会計を済ませよう。テーブルマナーなども軽く教えておかなければならないからな。

「ねえ団長、さっきの言葉、何か含みがあるんだよ？」

当日が楽しみだな。

「団長～！」

そして迎えたパーティー当日。ポーチュラカはやはり緊張している様子だった。客として招かれているのだから、別に緊張しなくてもいいんだぞ。そう言っても彼女の面持ちは変わらなかった。

「だって、貴族がいっぱい集まるんでしょ？　粗相のないようにしないと、って思うと……」

ポーチュラカはいつも通りで大丈夫だ。誰からも愛されているのが、ポーチュラカの良い所なのだから。

「『そ、そう』だよね……」

……実は緊張なんてしていないのではないか。それともダジャレで平常心を保とうとしているのか。

「初めまして、花騎士のポーチュラカと申します」

丁寧にお辞儀をするポーチュラカ。こういうちゃんとした挨拶もできるのだなと感心する。

「本日はご招待頂き、ありがとうございますだよ。私の正体は花騎士兼芸人なんだよ。招待のお礼に、今日は私のショータイムをお見せするんだよ！」

感心したのも束の間、お得意のダジャレを言い始めた。止めに入ろうと思った矢先、貴族たちの笑い声が聞こえてきた。

「おぉ……いつになくウケてるんだよ」

ポーチュラカが目を丸くして驚いている。

「これは私の時代が来たんだよ？　よし、もう一発。今日の会食、どこでやってるか知ってるかい？　食堂だよ」

受けたことに気を良くしたのか、ポーチュラカはさらに畳みかけていく。

蟹の脚を持ち、キョロキョロ周りを見回しながら口に入れた。

「蟹を密かに食べる……」

「私ダンスが苦手なんだよ、誰に相談すればいいだろう」

ポーチュラカがダジャレを言う度に、貴族たちから笑いが起こった。ポーチュラカは彼らの笑顔を見回し、満足そうな笑みを浮かべた。やはりポーチュラカを連れてきて良かった。

その後、貴族たちの間でダジャレを言うのが流行ったとか流行らないとか。

パーティーが終わると、もう外は真っ暗になっていた。ポーチュラカと二人で部屋に戻り、ぐだっとソファーに横になる。

「いやぁ、今日は楽しかったね。皆の笑顔も見れたし」

そう言う彼女自身も満面の笑みを浮かべている。ポーチュラカも楽しめたようで何よりだ。

「うん。貴族の人も話しやすくて良かったよ。もっと堅苦しい人たちなのかなと思ってた」
ところで、もうドレスは脱いだらどうだ。窮屈じゃないか。そう聞くと、彼女は顔を赤くして私を見つめてきた。
「せっかくのドレスだし、団長に堪能して欲しいんだよ……いいでしょ、団長」
そんな可愛らしいことを言われたら我慢できなくなる。
ポーチュラカの小さく暖かい身体を抱いて、ドレスを着せたままベッドに連れ込んだ。
今夜は彼女のドレスのような、真っ赤で情熱的な夜になりそうだ。

クコと雪

あまりの寒さに目を覚ました。まだ薄暗い部屋、時計を見ると午前4時を指していた。

ブルッと身震いをする。流石に今日の寒さは異常だ。

ふと、カーテンを開けてみた。まだ日の無い暗闇の中、白いものが降り注いでいた。

指がかじかんでしまって、書類仕事が中々片付かない。暖房も今日はあまり効きそうにない。

ブロッサムヒルに雪が降るのは珍しい。窓越しに眺めるそれは綺麗に見えるが、大人になると正直あまり好きなものではない。

今日の訓練はどうしようとか、雪かきをやらなければいけないなとか、色々と考えてしまう。それは花騎士たちも同じようで、今日は外に出ている者はほとんどいない。

コンコンと執務室のドアが鳴る。やって来たのはクコだった。

「団長、外、雪。クコ、雪遊び、所望！」

可愛らしい笑顔を浮かべながらそう誘ってくるクコ。帽子にマフラーに手袋と、防寒対策もばっちりで、既に外で遊ぶのは決定事項のようだ。

そこまでやる気になっているクコの誘いを断るのも気が引けたので、乗り気ではないが外へ行くことにした。

「おぉ～……外、真っ白、綺麗……」

クコは一面の銀世界を見渡し、感嘆の声を上げた。ロータスレイクでもブロッサムヒルでも、雪が降ることはそうないし、珍しいのだろう。

「団長、何する？　雪合戦？　かまくら？　雪遊び、クコに享受、所望！」

今日のクコはやけにはしゃいでいる。しかし積もっていると言ってもかなり薄いし、雪合戦もかまくらも難しそうだ。

例えばこういうのはどうだ、と小さな雪うさぎを作って見せる。
「!?　う、うさぎ、可愛い……団長、作り方、クコに享受、希望」
そう言いながらうさぎのようにぴょんぴょん跳ね回るクコ。雪うさぎよりクコの方が可愛いじゃないか、そんな言葉がのどまで出かかった。
「……こう？」
手際よく形を整えていく。後は目と耳を付ければ完成だ。
「目……耳……完成！　団長、クコのうさぎ、評価、所望」
うむ、１００点だ。可愛く出来たじゃないか。そう言って彼女の頭を撫でた。
「えへへ……クコ、もっと作る。あい♪」
早速次のうさぎを作り始めたクコを見つめる。この寒さの中でも元気なクコの姿を見ていると、心の中だけは暖まるようだった。
「あい、３匹目」
順調に雪うさぎを作っていくクコだが、そろそろ手が冷たくなってこないだろうか。
「手……あい、冷たい。少し、痛い」
濡れてしまった手袋を外してみると、クコの小さな指は赤く霜焼けになっていた。
「うぅ……クコ、はしゃぎ過ぎ……？」
赤くなってしまった指をそっと撫でる。確かにはしゃぎ過ぎたのかも知れないが、クコの元気な様子を見ていると私も元気になれた。
「団長、元気に、クコのおかげ？」
その通りだと、彼女の赤いほっぺたを撫でた。
「……えへへ」

「手、冷たい。でも、まだ、帰還、嫌」
クコが私の胸に顔をうずめてそう呟く。
思えばここは二人だけの世界のような気がする。他人は誰もおらず、ただ白い綺麗な雪が静かに降り注いでいるだけだ。私としてもしばらくこうしていたいが、クコの霜焼けも気になる。

「……えいっ」
何かがコートのポケットにずぼっと入ってきた。どうやらクコが手を入れてきたらしい。
「えへへ……温かい……」
そんな彼女が愛おしくて、ついつい抱き寄せてしまった。私のコートにくるまるクコ。しんしんと冷たい空気の中で、お互いの体温を共有していた。

「ん……ココア、美味」
まだまだ降りしきる雪を眺めながら、部屋でクコはココアを、私はコーヒーを飲む。白い湯気が目の前でくるくる回って、心の中まで温めてくれる。ふとクコと目が合って微笑み合う。二人の間だけは空気が温かいような気がした。
「団長……体温、温かい……好き……」
膝の上に乗ってきたクコが、自身の背中を私の胸に預ける。体温に眠気が誘われたのか、こっくりこっくりと舟を漕ぎ始めた。
眠いのなら寝てもいいぞ。そう言って彼女を抱き締める。
「んん……まだ寝たくない……団長と会話、希望……」
彼女の小さな手が私の手に触れる。その手を握り返すと、クコはすぅすぅと寝息を立て始めた。そんな彼女の姿に癒されながら、私もまどろみの中へ落ちていった。

クコと永久の誓い

伝えたいことがあった。
伝えたいことは一つだけしかなかった。
しかし何故だろう。それを言葉にすると、まるで砂で作った城のように脆く崩れていく。
言葉で伝わるものは何て少ないのだろうと思った。

「団長、お気に召す宝石はあったかしら？」
あることでベッセラに相談すると、彼女は私のためにいくつか宝石を見繕ってくれた。
「ふふ……人生の節目の大事な選択なのだから、しっかりと選びなさいね」
優しく微笑むベッセラ。
私は少し照れてしまう。
ベッセラが持ってきた宝石はどれも綺麗で素敵だった。
素人目でもそう思う程に。
しかし、一目見ただけで特に惹かれたものが一つあった。
深いオレンジ色。クコの瞳の色だ。
「あら、それが気に入ったの？　ふふ、良い選択ね」
迷うことなく、その宝石を買わせてもらった。
「団長、今日の商談は本当に素晴らしいものになったわ。後はあなたの心次第。素敵な結果になるように祈っているわ」
「団長様、私も陰ながら応援させて頂きます。フレーフレーです」
ベッセラとエキザカムに見送られて、彼女の屋敷を後にした。
私の心はもう決まっていた。
後はどう伝えるか、それだけだった。

と、ここまではかっこ良かったかも知れないが、その後の私はどうにもみっともなかった。
頭の中でぐだぐだと考えてしまって、何も前に進まない。

彼女の顔もまともに見れない。
伝えたいことはただ一つ。
好きだ。一緒に居て欲しい。
たったそれだけのことでも、言葉にすると何だか嘘くさく感じてしまう。
この気持ちを上手く表現することが出来ない。

執務室のドアが叩かれる。
考え疲れた私は、相手が誰なのかかも確認せずに、入るよう指示した。
「団長、疲労困憊？　薬、飲む？」
く、クコ!?
驚いて椅子からひっくり返りそうになる。
「あい。クコはクコ。団長、動揺、何故？」
な、何でもないんだ。それよりどうしたんだ？
「団長、顔色、悪い。クコ、漢方、持参」
気を使わせてしまったか。私はやはりダメな男だな。
「？　否定。団長、立派。クコ、団長、尊敬。好き」
彼女の口から紡がれた「好き」という言葉。混じりけのない、何とも自然な言葉だった。私もクコに話す時は、こんな風に話していたことを思い出す。
「団長？」
きょとんと見つめて来るクコの頭を撫でる。クコも照れながら受け入れ、お返しとばかりに私の腹を撫でてくる。
いつも通りの光景。そして、いつも通りの自然な言葉が生まれそうだった。
「団長、悩み、存在？」
いや、たった今悩みは晴れた。やはり自分で考えるだけでは何も解決しなかった。クコがいなければ。
執務室の机の中から箱を取り出す。中から宝石のついた指輪が現れる。

「指輪？　プレゼント？」
ああ、クコのために選んだ指輪だ。永久を誓うための……。
まるで最初からあったような言葉が、私の口から紡がれていった。
そして、クコの小さな薬指に指輪を収めていく。
数秒間の沈黙の後、クコの頬には涙が伝った。
私の指がその涙を拭う。温かく優しい涙だった。
「団長。クコ、嬉しい。二人、ずっと一緒、永久に……歓喜」
クコの細い腕が私の背中に回る。
胸に埋もれたクコの頭を、包み込むように撫でる。
彼女の温かさを、柔らかさを肌で感じた。

≪数か月後≫
教会の鐘の音が鳴り響く。
今日は一生に一度の大切な日。
新しいグレーのタキシードは、シャキッとし過ぎていて、何だか落ち着かない。
しかし、花騎士たちには人気らしい。「かっこいい」なんて言われてしまう。彼女に嫉妬されないか心配だ。
海の見える丘に佇む小さな教会には、十数人の花騎士たちが集まっている。
お祝いの言葉があちこちから飛び交う。今日は若い二人の結婚式。
扉が開いて出てきた花嫁。
純白のドレスを身に纏い、両手でブーケを持っている。
その顔は嬉しそうな、恥ずかしそうな、複雑な表情だ。
真っ赤な絨毯を伝い、花嫁が新郎の元へやってくる。
誓いの言葉を囁いた後、背伸びをして唇を重ねた。
「団長……旦那様。好き、ずっとずっと……」
若い二人を祝福するように、空は青く澄み渡っている。
花嫁……クコを抱き上げる。二人の視線が重なり合うと頬が緩み、微笑みが自然と浮かんできた。
静かな、とても静かな教会に、鐘の音と海鳴りがいつまでも響いて

いた。

スキラと幸運の兎

「団長、一緒にパルファン・ノッテに来てちょうだい！」
執務室のドアが勢いよく開かれると、そこには八重歯をキラリと覗かせたスキラの姿があった。
パルファン・ノッテとは、花騎士ヒヤシンスが経営している移動型カジノだ。スキラはそこの熱狂的なファンで、暇さえあれば通っているらしい。
「ね、行きましょうよ。今日は勝てる気がするの。私の勘がそう言っているわ」
勘で勝てるのなら苦労はしない。
というより、スキラはいつもカゲツと一緒にいるのだし、彼女と行けばいいのではないか。そう告げると、スキラはしょんぼりと肩を落とした。
「カゲツは今日別の用事があるから行けないって……だから団長、あなたに頼むしかないのよ」
そう言えば以前スキラから言われたことがある。「歴戦の団長なのだから強運の持ち主のはず」と（全くそんなことはないのだが……）。そう言うわけで、スキラはことあるごとに私をパルファン・ノッテに誘ってくるのだった。
「というわけで、行きましょう！」
しかし仕事が……。
「あ、そう言えばヒヤシンスから伝言貰ってるんだった。『団長の欲しがってた秘密のアレが入荷したわ』ですって」
よし、行こう。

パルファン・ノッテのある港の近くまでやって来た。都会ブロッサムヒルと言っても、この辺りは人通りも少なく、さざ波の音が聞こえてくるだけの静かな場所だ。ベンチに腰掛けた老人が、こっくりこっくりと舟をこぎ出している。
「あ～、団長さんです～。こんにちは～」

そんな空気感にも負けないくらいおっとりとした声が聞こえてきた。振り返るとそこにはうさ耳を付けたツインテールの少女がいた。
「お久しぶりです～。丁度団長さんに会いたいな～って思ってたので、会えてうれしいです～♪」
彼女はリリィウッド所属の花騎士、モンヨウショウだ。うちの騎士団の所属ではないが、何度も任務で一緒になったことがあり、良く見知った仲だ。
「団長さんの騎士団に向かう途中だったんですが、偶然ここに立ち寄って～、そうしたら団長さんがいたんです～。やっぱり私ってツイてますね～」
「ん、ツイてる？」
無言だったスキラが突然反応した。
「あなたツイてるって言ったわよね？　ならその運を私に貸してちょうだい！」
「え、えっと～……」
ぐいぐいとモンヨウショウに迫るスキラの襟首を掴み、落ち着くように言い聞かせる。
「ご、ごめんなさい……」
「えへへ～、いいんですよ～。私の幸運で、皆さんが幸せになってくれるなら、私もとっても嬉しいですから～」
「め、女神様……！　そう言うことなら、早速付き合ってちょうだい。移動型カジノ、パルファン・ノッテに！」
「へ？　カジノ？」

「ぐわぁぁ！」
スキラが当然のようにカモにされている。
しかし、モンヨウショウの幸運体質でも勝てないものだろうか。
「何というか～、私の幸運って好きな人に会えるとか、美味しいものが食べられるとか、そういうものなんですよ～。急にお金が増えたりはしないので、ギャンブルでも意味がないんだと思います～」
なるほど。それならスキラが勝てないのも納得だ。

「うぐぐぅ～、まだよ！　もう一回！」
「スキラさん、もう止めておきましょう？　お金は大事ですから～」
意固地になったスキラの肩を優しくポンと叩く。
「ま、まだよ……まだ私は終われないわ……」
「……団長さん、どうしましょう？　このままだとスキラさん、一文無しになっちゃいます～」
もはや勝てると思われていないことも悲しいが……確かに何とかしなければいけないな。
「何とか幸運を分けてあげられたらいいんですが～……そうですっ！」
何か思い付いたことがあるのだろうか。
「はい～、兎さんの力を借りるんです～」

「な、何よこの格好……」
更衣室から、バニースーツに身を包み、ロップイヤーを付けたスキラとモンヨウショウが現れた。
「兎さんです～。きっと兎さんの真似をすれば幸運が舞い降りてくると思うんです～」
「だからってこんな……」
スキラの人間の方の耳が赤くなる。ここまで照れている彼女も珍しい。
モンヨウショウは兎が大好き……いや、信仰していると言ってもいいだろう。毎日兎に祈りを捧げているという。彼女の幸運体質がそのおかげなのかは分からないが、彼女はそう思っているらしい。
「似合ってます～。とっても可愛いですよ、スキラさん」
「でも、ほら私って胸とか小さいし、こういうのはブプレウルムみたいな身体の方が似合うんじゃない？」
「そんなことないですよ。ちっちゃい方が兎さんみたいで可愛いと思います～」
「それは褒めてるの？　けなしてるの？」
「だ、団長は……どう思う」

うるうるとした瞳をこちらに向けてくる。その上目遣いにやられ、ついつい「可愛い」と呟いてしまった。
「か、かかかか可愛いなんて……何言ってるのよ、も～！」
細い腕がポコポコと私の胸を叩く。目の焦点もあっていないし、大分混乱しているようだ。
「うわぁ～、団長さんとスキラさん、とっても仲良しです～。羨ましいです～」

時間をおいて冷静にさせた後、再び勝負に向かうスキラ。その後ろで、モンヨウショウがエールを送っていた。
「兎さんの格好になりましたし、これならきっと勝てますよ～」
「そんな上手くいくわけ……」
「!?　レイズ！」
スキラの表情がはっきりと変わった。（ポーカーなのだが……）
今まで何の根拠もなくレイズしていたのが幸い？したのか、ディーラーは疑いもなく勝負に出た。
結果、ディーラーはスリーカード、スキラはストレートフラッシュでスキラの勝利となった。
「や、やったわ！　本当に兎のおかげ……？」
その後も何度も高得点の手を連発していくスキラ。彼女のチップはどんどん貯まっていった。
「にひひひ……よし、次の勝負行くわよ！」
「あの～、スキラさん。そろそろ終わりにしましょう？」
「モンヨウショウ？　何言ってるのよ、まだこれからでしょう？」
反論するスキラに、モンヨウショウは首を振った。
「お金は大事～。今は勝っていても、次勝てるかは分かりませんし、程々で止めておくのが一番ですよ～」
私も頷き、本物のギャンブラーなら引き際もわきまえているだろうと諭す。
スキラは渋々ながらもパルファン・ノッテを後にした。

「団長さん、スキラさん、あのお店でキャロットケーキ貰っちゃいました～。しかも丁度三つ。あそこの公園で食べましょう♪」
モンヨウショウはこのように、偶然何かを貰うことが多い。ニコニコと可愛らしい笑顔を見せる彼女の手を引き、公園のベンチに腰掛けた。
「のどかですね～」
「本当ね～」
暖かな太陽の光を浴び、ぐでーっと背骨を伸ばす三人。
「賑やかなパルファン・ノッテで熱い勝負をするのもいいけど、たまにはこうしてのんびりするのもいいわね～」
それはいいが、どうしてまだバニースーツ姿なのだろうか。
「そ、それは……あなたが可愛いって言ったから……じゃなくて！兎の格好が縁起が良いからよ」
「そうですよ～。兎さんは凄いんです～」
しかし周りからの視線が痛い。バニーガールが二人も公園にいれば、そりゃあ見てしまうか……。

「それじゃあ、私はこれで帰ります～。お二人ともお元気で～。スキラさん、お金は大事にしないと駄目ですよ～」
「分かってるわよ。モンヨウショウも元気で」
小さな手を振り合う二人。微笑ましい光景だ。

≪またある日≫
「団長、いる？」
スキラが執務室のドアを勢いよく開ける。またカジノへの誘いだろうか。
「パルファン・ノッテに……と言いたいところだけど、この前大負けしちゃったから、今日は公園にでもデートに行きましょう。お金は大事……だからね」
なるほど、スキラも成長したか……と思ったがそもそも大負けしてる時点でダメじゃないか。

「いいでしょ！　それはそれ、これはこれなんだから」
ぷんぷんと怒るスキラの頭を撫で、落ち着かせてからデートに向かうことにした。

≪余談≫
「団長～、って今日はいないのね」
主のいない執務室の中をスキラが物色し始める。
「えへへ～、団長の椅子。悪くない座り心地ね」
回転椅子でくるっと一回転すると、引き出しに何かを見つけた。手に取ってみるとそれは一冊の本だった。
（そう言えばカジノの景品で何か貰ってたわね。丁度この本くらいの包みだったような）
興味本位でページを捲ってみた。
「何々……『ちっちゃい兎さん　バニー幼○特集』？」
「……」
もう団長の前では二度とバニースーツを着ないと誓ったスキラだった。

イエローパンジーと極寒の夜

寒い……寒すぎる。私はどうしてこんなに寒い季節にウィンターローズに来ているのだろう。
「出張だからだろう？　団長、忘れちゃったの？」
イエローパンジーにツッコまれる。いや、忘れたわけではないが……。

一カ月後、ウィンターローズの騎士団との合同作戦が行われる。今日はその下調べのために出張に来たのだった。地元民がいた方がいいだろうということで、イエローパンジーを連れて。
「今日は良い調査と話し合いが出来ました。それでは、作戦の日を楽しみにしております」
現地の騎士団長と握手を交わし、その日の調査は終わった。
「ごめんな、団長。作戦会議では全く役に立てなくて。あたし、考えるのは得意じゃなくてさ～」
手を頭の後ろに回しながら「えへへ……」とはにかむイエローパンジー。
そもそもそれは私の職務だし、イエローパンジーはイエローパンジーなりの職務を果たせばいいのだと言っておく。
「あたしの職務……取り敢えず今は団長に道案内をすることだな」
ウィンターローズにはほとんど来たことが無いので、帰り道も何も分からない。取り敢えず今晩泊るホテルまでの道を教えて欲しい。
「よしっ！　それじゃ頑張るぞ！　団長、あたしについて来て！」
手をぐっと握って気合を入れる彼女がとても頼もしく感じた。

「あれ？　ここをこう行って……こっちじゃなかったっけ？」
かれこれ1時間は彷徨っている気がする。辺りも暗くなってきたし、そろそろ着いてもいいと思うのだが、もしかして迷ったのか。
「そ、そんなことっ！　ほら、ネオン街には入ったし、もうちょっとだよ」

本当だろうか。まあ確かに地図を見るとこの近くではあるらしい。
「……あった。着いたぁ～」
ホテルの名前を何度も確認し、ホッと胸を撫で下ろす。
「どうだ、団長。ちょっと迷っちゃったけど、ちゃんと着いただろ？」
やはり途中で迷っていたのか。
「あっ！　ま、まぁいいだろ、結果オーライってやつ？」
彼女の能天気さに笑うと、彼女もつられて笑顔になる。キンと冷えた空気の中に暖かいものが混じった。
……と、そんなことをしている場合ではない。ずっと極寒の中を彷徨っていたのだ、早くホテルに入らねば凍死してしまう。
「凍死なんて大げさだな、団長は」
いや、笑い話ではなく。というかイエローパンジーは何故普段着なのに平気そうなんだ。私は念入りに厚着して、それでも寒いのに。

「おっ、いい部屋！　団長、見てみて！　景色が綺麗だよ」
部屋に入るや否や、イエローパンジーは窓際まで駆けていった。相変わらずの元気さだなと苦笑し、私もその後へ続いた。
大きな窓からは街が見下ろせる。夜の闇を照らしている色鮮やかなネオンが美しい。
「結構高いんだな。人があんなに小さく見える」
嬉しそうに私に笑いかけるイエローパンジー。その愛くるしさに、私も冷たくなった頬を緩ませた。
「それにしても、綺麗な夜景が見えるホテルに二人で泊まるとか、これはもうデートだな」
言われてみればそうかも知れない。二人で同じ部屋に泊まった方が安かったのでそうしたのだが、嫌ではなかったか。
「嫌なわけない。だってあたしと団長の仲だぞ、同じ部屋に泊まるくらい普通だって」
そう言って腕を絡ませて、上目遣いで私を見つめてくる。
「あっ、でも姉と妹にはからかわれるかも。その時には一緒に言い訳考えてくれよな」

「それにしても、歩き回ったらお腹減っちゃったよ。夕食まで時間あるし、何か食べたいな」
歩き回ったのは誰のせいだ、という言葉を胸の奥に押し込める。
下の階には軽食をとれる店があるらしい。何か食べたいものはあるか。
「うーん、こういう寒い日はやっぱりアイスだな。アイスが食べたい！」
何故だ。せっかく部屋で暖まれたのに、何故また冷える必要があるのだ。
「団長知らないの？　寒い日に食べるアイスは最高なんだぞ」
知るか。知るわけないだろう。

結局イエローパンジーの熱意に負け、アイスを食べることになった。何故か専門店もあることだし。ウィンターローズにアイス専門店は必要なのだろうか……。
「おぉ、フレーバーが色々ある！」
やたらとはしゃぐイエローパンジー。
それにしても、やたらと繁盛しているのが気になる。もしかしてイエローパンジーと同じ価値観の人が多いのだろうか。
「あたしは王道のバニラにしたぞ。そこに苺のシロップをたっぷりかけて……ほら美味しそう」
確かに美味しそうではある。しかし出来れば暑い日に出会いたかった……。
「あぁ、確かに暑い日でもアイスは美味しいよね」
「あれ、団長スプーンが進んでないぞ。食欲ないの？」
そういうわけではないのだが……。
「それともあたしに食べさせて貰いたいとか？　まったく仕方ないなぁ……ほら、あ～ん」
私の口にスプーンが近づいてくる。そのスプーンを持つ彼女の頬は苺のシロップにも負けないくらい赤く染まっていた。

「……どう、美味しい？」
口の中で冷たいアイスクリームが溶けていく。これは美味しい。バニラの上品な甘さと苺の酸味が調和し、絶妙な味を奏でている。
「おぉ。あたしもそんな感想言いたい！」
それではお返しに私から食べさせてあげよう。そう言ってスプーンをイエローパンジーに差し出す。
「えっ!? あ、あ～ん……」
耳まで真っ赤にしながらアイスを頬張っているのが可愛らしい。
「んぅ……これ、思ったより恥ずかしいんだな……」
恥ずかしさでいつの間にか二人の身体は暖まっていた。

夕食を食べ、風呂にも入ったし、あとは寝るだけか。
そう思っているとイエローパンジーが部屋に入ってきた。いつもの二つ結びを解いた長い髪からは湯気が上がっている。
「団長、お風呂あがったぞ～。さて、何する!?」
もう寝るぞ。明日も早いのだし。
「えぇ～、遊ぼうよ～」
子供のように駄々をこねている。そんな彼女も可愛いが、この寒い夜では遊ぶ気にもなれない。早く布団をかぶって寝てしまった方がいいだろう。
「う～ん、団長がそう言うなら……」
電気を消し真っ暗になった部屋。夜の冷たい空気がすぐそこまで這い寄ってきているのを感じる。
……いや、それだけではない。何か物音が……。
「よっ、団長」
布団の中を見るとイエローパンジーの顔があった。
「ぷはっ！ 団長が寒いかな～と思って来たよ。一緒に寝よう？」
いや、出張先だしさすがにそれは……。
「固いこと言うなって。ほら、こうやってぎゅっとしてれば寒くないでしょ？」
彼女の細く白い腕が私の背中に回る。

鼻の先に感じるシャンプーの匂い。控えめだが確かに膨らんだ、柔らかな一部分の感覚。
「うわっ。団長、心臓バクバクだ。って、あたしもか……」
虫や鳥の声すら聞こえない静かなホテルの一室。その中だからこそ、二人の心臓音は余計に響く。
永遠のような沈黙の後、私から口を開き、彼女の服に手をかけた。
その時、
「すぅ……すぅ……」
その吐息を聞き、ハッと彼女の顔を見る。穏やかな寝顔がそこにはあった。

「んぅ～、よく寝た～！　おはよう、団長」
……おはよう、イエローパンジー。
「ん、どうしたんだ？　目の下にクマが出来てるぞ」
昨日あまり眠れなくてな……。
「あはは。もしかして団長って、枕が変わると眠れないタイプ」
……そういうことにしてくれ。
結局昨晩は一睡も出来なかった。眠い目を擦りながらイエローパンジーを見る。
「どうした、団長？　……もう、そんなに見ないでよ。団長ったら、あたしのこと好き過ぎだろ」
その柔らかい笑顔に昨晩の温もりを思い出す。
今日は、昨日よりは暖かく過ごせるんじゃないかと、何の根拠もなくそう思った。

クコとのマイホーム

「んちゅっ……旦那様、好き♪」

朝の白い光の中でクコとキスをするのが最近の日課になっていた。新婚ほやほやの二人は幸せいっぱいで、悩み事などには縁もないように思えた。

いや、一つだけ悩みがある。

今まで住んでいた騎士団寮で二人一緒に暮らし始めたのだが、最近は少し狭さを感じていた。どうせならマイホームに住もうかとクコに提案する。

「あい、いい提案。この部屋、二人、狭い。それに、これから、家族、増える……」

クコが幸せそうに自分の腹を撫でる。私も彼女の腹を撫で、再びキスを交わした。

「だんちょ、だんちょ！　ランタナ達からプレゼントがあります。さて、何だと思いますか？」

騎士団の廊下で突然ランタナに声を掛けられた。ランタナのことだし、変な物じゃないかと疑ってしまう。

「失礼な！　今回はもの凄〜いものだよ。まあ私だけじゃなくて花騎士皆で出資したんだけど」

ランタナから渡されたのは一枚の紙。『新婚ほやほやの二人へ、ブロッサムヒル○○番地に家を送ります　花騎士一同』

こ、これは……。

「えへへ……だんちょ、家が欲しいって言ってたでしょ？」

しかしそんな高価なものを貰っていいのだろうか。

「いいのいいの。花騎士皆、だんちょには感謝してるし、そのお礼」

あまりの嬉しさにランタナを抱き締めてしまう。

「う、浮気だぁ〜!!」

浮気ではない！

「団長、新居、ここ？」
手紙に書いてあった場所に来てみたが、ただの空き地だ。あるのは一つの箱だけ。
「側面、紙、付いてる」
箱に付いていた紙には『説明書』と書かれていた。
『夢のマイホームをあなたの手で組み立てよう！　簡単ＤＩＹホームキット』
……これは。
「家、組み立て、可能？」
まあやってみるか。
「あい。夫婦、共同作業」
微笑むクコの頬にキスをして、さっそく作業に取り掛かることにした。

コンコンと釘を打つ音が響く。
説明書に書かれている順番で組み立てるだけなので、案外簡単そうだ。
「あい、団長。釘」
お礼代わりにキスをして、再び釘を打ち付ける作業に戻る。寒い中の作業だが、クコと一緒だと心の中までポカポカと温かいようだった。

「団長、ご飯、出来た。休憩、推奨」
二階部分を組み立てている時にクコから声を掛けられた。今行くから少し待っていて欲しいと伝え、のこぎりで木材の余分な部分を切っていく。その時、
「団長っ!?」
世界が逆さまになった。気付いたら地面に思い切り激突していた。
「団長、平気？　薬、必要？」
い、いや大丈夫だ。尻が結構痛いが……。
「団長、おっちょこちょい♪」

そう言ってまたキスをすると、痛みも和らぐような気がした。私にとってはクコが薬のようなものなのかも知れない。

≪一週間後≫

「完成……？」

出来た……のか？

そこにあったのは家というにはあまりにもいびつな形をした何かだった。

「お～い、来てやったぞだんちょ、クコ。っ!?」

「にいに、クコ。ヘナ、新居祝い……なの。……？」

花騎士たちが次々と新居祝いにやって来る。しかしその家を見た者は誰もが言葉を失った。

「何だこの前衛的な家……カリガリ博士か!?」

説明書通りに作ったと思うのだが、どうしてこうなった。

「玄関はどこにあるんですか？」

リシアンサスに尋ねられたクコが家の壁をとんとんと叩くと、壁が回転し中に入れるようになった。

「あい」

「えぇ……」

ちなみに本来の玄関は二階についている。二階からすぐに外に出たい場合などには便利だ。

「な、何はともあれ、団長とクコさんのマイホーム完成をお祝いして、花騎士を代表してこのポーチュラカが祝辞を述べさせてもらうんだよ」

ポーチュラカはこほんと咳をしてマイクを握った。

「家が出来て良かったね。イエーイ！」

「……」

……。

「それにしても、こんな前衛的な家で不便じゃないですか」

「少し、不便。でも問題なし。旦那様と一緒、それだけで、幸せ♪」
腕にすり寄ってくる彼女の頭を撫で、頬にキスをした。
「なんだこのバカップル……」

「風が強くなってきたねぇ」
窓がバタバタと音を立てている。今日の天気は荒れそうだ。
その時、バキッという音が鳴った。
「な、何か変な音がしたんですけど、大丈夫ですか!?」
大丈夫だろう、多分。
「雨も降ってきたんだよ。ってうわぁ！」
私の頭の上にも雨が降り注いでいる。屋根がちゃんと付いていないからな、そりゃあ雨漏りもするだろう。
「雨漏りってレベルじゃないんだよ。これはもう雨そのものだよ」
そういう時は傘を差せば解決だ。
「あい。相合傘♪」
「何だこいつら……」

雨はまだまだ降り注いでいる。こんなにずぶ濡れになると流石に寒くなってきたな。
するとまたバキバキと音が響いた。
「ま、また音が……！」
少し心配になってきたので外に出てみることにした。
何だ、壁が一枚剥がれただけか。釘で打ち付けておこう。そう思ってトンカチを構えると、背中に何かが追突したきた。驚いて後ろを振り向くがそこには何もなかった。
何だ気のせいか。そう思った矢先、さらに強い衝撃が私の背中を襲った。
見ると家が回転していた。

「ねぇ、何か床が動いてない？」
「床というか……これは家が動いてるんじゃ……」

「うぉぉぉ！　回ってる！　家が回ってる！」
「危険、皆、避難……なの！」
「って言っても、こんなに回ってたら外に出るのなんて無理ですよ」
　我が家が！　我が家が回っている。と、止めなければ！
　しかし、当たり前だが人力で家を抑えられるはずはなく、吹っ飛ばされるだけだった。
　と、その時、クコが家の中から飛ばされてきた。
「痛いっ！　だ、団長、マイホーム、回転！　ど、どうする……？」
　どうすると言われても……。
　結局我々にできるのは、回転し崩壊していく我が家を眺めることだけだった。

「だんちょ、今日は楽しいメリーゴーランドをありがとう」
　やつれた様子で帰っていく花騎士たち。
　さて、それではこの家だったものの片付けはどうするか……。
「マイホーム、粉々……」
　俯くクコの頭を撫で、大丈夫だと励ます。
「団長……」
　これからもこういった困難なことがあると思う。それでもクコと一緒なら乗り越えられると、私は信じている。
「……あい♪」
　笑顔を取り戻した彼女と口づけを交わし、家だったものの片付け作業に取り掛かるのだった。

「そうして、夫婦の絆は更に深まったのでした。めでたし、めでたし」
「いや、全然めでたくないですよ！　何ですかその話は!?」
「ランタナが考えただんちょとクコへのプレゼント計画なんだけど」
「大惨事なんだよ！　そもそも組み立て式の家なんてあるの？」
「さあ？」
「結婚祝いなんですから、もっとちゃんとしたものを贈りましょう、ね

？」

「団長、お届け物。プレゼント、花騎士からの」

リボンで包まれた箱を開けてみると、オレンジと青のペアグラスに、『花騎士一同より』と書かれた手紙が添えられていた。

ミズキと冬の夜景

「わぁっ、街が真っ白ですよ。綺麗ですね、団長様」
街を一望できる高台の上、ミズキは白い息を吐きながら感嘆の声を上げた。

≪数日前≫
「ウィンターローズに旅行ですか？」
うむ。この雑誌で紹介されいるウィンターローズの街の夜景がとても綺麗だったので、是非二人で見に行きたいと思ったんだ。
「本当に綺麗ですね……」
雑誌を覗き込むミズキ。その横顔がとても可愛らしい。
「って、それってデ、デートですよね!?」
そのつもりだったのだが、嫌だったか。
「嫌だなんてそんな……すっごく嬉しいです。嬉しいですけど、ちょっと恥ずかしいですね」
真っ赤に染まる頬をそっと撫でると、ミズキは静かに目を伏せた。

凍えるような森林地帯を抜け、ウィンターローズの街に着いた。
白く降り注いだ雪の上に、街の灯りが色をつけている。
「団長様、見て下さい！　雪ですよ、雪！」
いつもは真面目なミズキが珍しくはしゃいでいる。
「リリィウッドでもブロッサムヒルでも、雪なんてあまり降らないですからね。やっぱりこれだけ積もっているのを見るとテンションが上がります」
はしゃぎ過ぎて転ばないようにな、そう言おうとした瞬間、ミズキの身体が宙を舞った。慌てて彼女をこちらに引き寄せると、自然と抱き締めるような形になる。
「わ……あわわっ！　す、すみません団長様！」
赤面して慌てるミズキが可愛らしかったので、思わずギュっと抱き寄せてしまった。

「だ、ダメです！　今抱き締められたら……その……」
何かを言い淀んでいるミズキ。その理由はすぐに分かった。彼女の首筋を触った手に水が滴っている。
「うぅ……汗が止まりません……」

タオルで汗を拭いながら、ミズキは申し訳なさそうにこちらを見つめてくる。
「ごめんなさい団長様。少しはしゃぎ過ぎちゃいました。それに汗で汚してしまって……」
そんなに気にすることはない。それにミズキの汗なら汚くないし、むしろ大歓迎だ。
「だ、団長様！　変なこと言わないで下さい！　また変な汗が出てきちゃいましたよ……」
難儀だな。そう言って二人で顔を合わせて笑い合った。

やがて夜も深みに入り込んできた。真っ黒な闇の中で、二人の吐く息がやけに白く感じる。
「夜は特に寒いんですね。団長様、こんなこともあろうかとマフラーを編んできました。団長様にプレゼントです」
ミズキが手渡してくれたのは赤いマフラー。確かに首元が寒くなってきたので丁度良かった。礼を言って首に巻いてみた。
「似合ってますよ、団長様。素敵です」
そうだろうか。しかしこのマフラー、結構丈が余るな。
「それじゃあ散策に行きましょう」
そう言って歩き出したミズキを引き留める。
「？　どうかしましたか？」
彼女の首に余ったマフラーを掛けてみる。なるほど長さは丁度いいな。
「な、なな何してるんですか団長様!?」
こうして二人で巻いた方が暖かいかと思ってな。
「た、確かに暖かいですけど、今は駄目です！　恥ずかしくて汗かい

ちゃいますから！」
　真っ赤になってじたばたと暴れるミズキを抱き寄せ、そのまま夜の街を歩き始めた。
「あぁ～～……」

　かれこれ数十分はこの格好で歩いたのだが、そろそろ慣れたか？
「未だに恥ずかしいですけど、もう諦めました。それに、団長様とくっついて歩けるのは嬉しいですから」
　ミズキの腕が私の腕に絡みつく。同時に何か柔らかいものが腕に当たった気がしたが、気にしないようにした。
「あれ、何ですかね？　皆向こうに向かって行ってます」
　歩いているのはほとんどはカップルのようだ。
「私達も行ってみましょう」
　ミズキが私の手をぎゅっと握った、その時、
「？　どうかしましたか、団長様？」
　激痛が走った。
　手が痛い。手の骨が痛い。
　……そう言えばミズキは握力が強いんだった。
「団長様、大丈夫ですか？　冷や汗が凄いですよ。体調が悪いんですか？」
　だ、大丈夫だ……。だが少しだけでも手の力を緩めてもらえると助かる……。
「うわぁっ！　ご、ごめんなさい！」

「うぅ……今日は団長様に迷惑をかけてばっかりです。せっかくのデートなのに……」
　まあ気にすることはない。ズキズキと痛む手を撫でながら彼女を慰めた。
　気を取り直してカップル達が向かっている方へ行ってみよう。
「そ、そうですね。行きましょう」
　今度はそっと優しく手を握ってくれる。こちらも彼女の小さな手

を握り返し、二人で目を合わせてから歩き出した。

「わぁ……凄いです。キラキラしてます」

ミズキが感嘆の声を上げる。街路樹にイルミネーションが煌めいている。どうやらカップル達に人気のスポットだったらしい。

「えへへ、何だかロマンティックですね。カップルの皆さんが集まって来るのも分かるというか」

うむ。こうしていると確かにロマンティックな気分になってくる。イルミネーションに照らされたミズキの横顔が、いつもよりも更に素敵に感じた。

「団長様？　あっ……」

軽く頬にキスをする。ミズキも瞳を潤ませて私を見つめてきた。その瞳に魅入られ、今度は唇へとキスをする。ミズキは目を閉じて私を受け入れてくれた。

ミズキの首元はまた汗で濡れているようだ。このままウィンターローズの夜風に当たると風邪をひきそうだし、そろそろホテルに戻るか。

「そうですね。もの凄く寒くなってきましたし」

ブルブルと震えるミズキを抱き締め、そのままホテルへと帰っていった。

「ホテルからの夜景も素敵ですねぇ」

大きな窓からは、先程まで歩いていた街並みを一望できる。煌びやかな光も蛍のように小さく揺れていて、これはこれで趣があると思った。

「うわぁ、結構汗かいちゃってます。やっぱり厚着だと駄目ですね」

このままだと風邪を引きそうだし、着替えてきたらどうだ。

「それじゃあ先にシャワー浴びてきますね」

「団長様、備え付けの浴衣が可愛かったので着てきました」

身体に湯気を纏いながらミズキが部屋に戻ってきた。

浴衣は薄い緑色。ミズキのイメージカラーにもぴったりで、とても良く似合っている。
「本当ですか？　嬉しいです」
浴衣姿のミズキがチラチラと視界に入る。浴衣というのは身体のラインが浮き出るものだ。ミズキは身長は小さいが、尻や胸は女性らしい豊かな曲線を描いている……端的に言えば扇情的だ。
「だ、団長様……そんなに見つめないで貰えると助かります。恥ずかしくてまた汗が出ちゃいそうです」
いじらしく身体をくねらせる彼女に我慢は限界を迎えた。彼女の小さな身体をベッドに押し倒す。
「だ、団長様⁉　……どうぞ」
ゆっくりと目を瞑るミズキ。極寒のウィンターローズだが、二人の夜は熱い夜になりそうだ。

海賊島の謎を追え（前編）

「その昔、この海にはたくさんの海賊たちがいたそうです。ある者は己の欲望のために、またある者はロマンを追い求めるため、皆大海原へ挑み、そして果てていきました」

暗いテントの中、ハツユキソウの白い顔が蝋燭の灯でぼんやりと浮かび上がる。クコ、ワレモコウ、イキシアの三人は、息を飲みながら彼女の話に耳を澄ませていた。

「志半ばで死んでいった彼らの無念がこの海には眠っているんです。夜になってこの海に来てみて下さい。苦しそうなうめき声が、冷たい海風に乗って運ばれてくるはずですから……」

そこでフッと蝋燭を消す。テントの中の花騎士たちを真っ暗闇が包んでいった。

「どうでしたか？　地元民に伝わる怪談話でした」

「ハツユキソウの話、面白い。でも、うめき声、幻聴。風や波の音、うめき声、聞こえる」

「モコウもそう思う？　そういう伝説が、普通の音もうめき声に聞こえさせているです？」

「うぅ……この騎士団ではあんまりウケが良くないんですよね、怪談話……」

クコとワレモコウの正論に、ハツユキソウはがっくりうな垂れる。うちには冷静な花騎士が多いから、そう言った話はあまり怖がられないのかも知れないな。一人、テントの隅で震えているイキシアを除いて。

「ど、どうしてこっちを見てるの団長さん？　こ、怖くないよ……。お姉ちゃんなのに怪談が怖いわけ……」

別に無理する必要はないだろうに。

「団長さん、皆、何やってるの？　そろそろ調査始めよう？」

テントの入り口をひょいと持ち上げ、コンボルブルスが顔を出した。

彼女の言う通り、今日はこの近辺の調査に来たのだった。

ブロッサムヒルの港都市ヨーテホルク。航路を利用しての物資の輸出入が盛んな都市であるが、ここで最近飛翔性害虫が急増しているという報告があった。しかも通常の害虫だけではなく、極限指定クラスの害虫も多数目撃されているということだ。

「そうでしたね。浜辺にテント張って怪談話してる場合じゃありませんでした」

ハツユキソウは怪談話をするのが大好きだ。今日もここの地元民に話を聞いて触発されたのだろう。花騎士たちも歩き疲れていたので、丁度いいタイミングではあったのだが。

「もう、おーそーいー！　いつまで休憩してるの!?」

先に調査を行っていたコマチソウが頬を膨らませる。

「もうあたしとコンボルブルスで何体か害虫捕まえてみたよ。ほら、これがハエ型で、これがアブ型で～」

「うっ！」

コマチソウのバックからじゃらじゃらと害虫のパーツが出てくる。他の花騎士たちは顔をしかめるが、コマチソウは気にもせず嬉しそうにそれらを並べていく。

「ま、詳しく調べてみないと分かんないけど、本土の害虫とはちょっと違うと思うよ。独自に進化した種類だと思う」

それはつまり……どういうことだろう。

「あたしが考えるに、これはどこか未開の島に生息していた害虫で、何らかの理由で本土の人たちを襲うようになった、とか？」

「島……」

コンボルブルスとクコが顔を見合わせる。きっとフロッタン島のことを思い出しているのだろう。あそこでも独自に進化した害虫が生息していた。

俯きがちなクコの頭を撫で、大丈夫か、そう囁く。

「……あい。クコ、問題なし。過去、受領」

それならいいが、あまり無理はしないように。
「あい♪」
「よ～し、それじゃあ一旦戻ろう。ちゃんとした施設でこの害虫のこと調べたいし」
その時、地鳴りのような音と共に人々の叫び声が聞こえてきた。
「さ、叫び声……何があったんですか」
怯えるハツユキソウを手で制し、コマチソウはいつになく真剣な表情で地面に耳を付けた。
「……羽根音が聞こえる！　かなり大型の害虫が近くにいるよ！」
「コマチソウさん、場所は分かる!?」
「こっち！」
風を切るようなスピードで先行するコマチソウ。我々も彼女に付いていくと、ヨーテホルクの騎士団が海賊帽を被ったハチ型の害虫三体と交戦していた。
「何で海賊帽……？」
騎士団側には傷付き倒れている花騎士もいて、防衛線が突破されるのも時間の問題のように見える。格好はともかく、この大きさ、この強さ、極限級の害虫と見て間違いないだろう。
「たりやぁっ！」
コマチソウが虫取り網で不意の一撃を与える。
「怯んだ！　皆、今のうちに！」
イキシアの号令でこちらの花騎士と騎士団側の花騎士が一斉に攻撃を加えていく。
「ブンブン、攻撃！」
物理攻撃で弱った害虫にクコの魔法攻撃が炸裂する。外殻が破壊され、害虫たちは崩れ落ちていった。
「おっと、終わっちゃいましたか～。ごめんなさい、遅れちゃって」
交戦が終わってから数秒後、ハツユキソウが手を頭の後ろに当てながら申し訳なさそうに現れた。
「いやぁ、害虫も強そうでしたが皆さんも強かったですね～」

「ふぅ……それにしてもこんなに強い害虫どこから……っ!?」
害虫の内一体の身体がピクリと動くと、急遽起き上がり逃げるように飛んで行った。その動線上には……
「ハツユキソウさん!」
「ぎゃぁぁぁ!　は、離して下さい!」
害虫がハツユキソウを捕まえてどこかへ去って行こうとする。
「は、離してっ!」
「ギッ!!」
ハツユキソウが無意識に放った氷攻撃によって害虫は今度こそ倒れる。しかしその下は海になっていて、
「ぎゃっ!?」
ドボンと音を立て、一人と一匹が沈んでいく。花騎士たちが駆けつけると、やがて雪女のようなシルエットがぷかっと浮かんできた。海と雪女とは随分とミスマッチだなと思ってしまう。

「うぅ……寒い……ありがとうございます、皆さん。死ぬかと思いました……」
季節外れに稼働させられた暖炉の前で震えるハツユキソウ。彼女の肩をポンと叩いてから、イキシアがヨーテホルクの騎士団の花騎士たちに話し始めた。
「あの害虫が現れた時のこと、詳しく聞かせてくれない?」
「はい……」
「とはいえ、私たちも咄嗟に駆け付けたので詳しくは……ただ、害虫たちは海の方からやって来たようでした」
「海……そう言えば海の方から地鳴りのような音が聞こえたです?あれも関係ある?」
「おそらくは。最近、あの地鳴りが聞こえると害虫が出てくるんです」
地鳴りと害虫……そこに何の関係があるのだろう。詳しく調査する必要がありそうだ。
「団長、あたしはハツユキソウを連れて騎士団に戻るよ。害虫のこと、色々調べたいし」

では我々はまだこの近辺の調査を続けよう。
「ほら、行くよハツユキソウ」
「くしゅんっ！　そ、それじゃあ皆さん、また会いましょう～」

「団長さん、ここの騎士団から船を借りてきたよ」
では海の調査を始めよう。幸いこちらにはプロが二人いるからな、心強い。そう言ってクコとコンボルブルスに微笑みかける。
「あい。クコ、お役立ち」
「海と湖はちょっと違うけど任せて。失望はさせないから」

「たっ！」
船上に侵入してきた害虫と花騎士たちが交戦していく。
「海上にこんなに害虫が……何かがおかしい？」
しかも進むにつれ段々増えていってるような気がする。
「あ、あれ！　島じゃない!?」
イキシアが指差した先、数百メートル先だろうか、確かにそこには島があった。しかし何か様子がおかしい。明らかに人工物と思われる壁で囲まれている。
「っ!?　団長、危険！」
クコが突然私を突き飛ばした。見ると先ほど私がいた場所には矢が刺さっていた。
「まだ来るよ！」
「大丈夫、たぁっ！」
コンボルブルスが飛んでくる矢を次々と槍で落としていく。
「矢は私が全部落とす！　気にせず進んで！」

「や、やけにおどろおどろしい島だね……」
島の目の前までやって来ると、害虫の攻撃も矢もぴったり止んでしまった。諦めたのか、それとも……。
「……取り敢えず上陸するです？」
島に一歩足を踏み入れると、真っ黒なカラスが数十羽、一斉に飛び

去っていった。
「ひっ！」
「イキシアさん、ただのカラスだよ」
しかしこの島は明らかに様子が変だ。人の気配は全く無いが、そこかしこに人工物と思われる物が散乱している。大砲に剣、朽ちた船。そして……。
「……骸骨？」
ボロボロの黒い服に包まれ、茶色く汚れた人骨が静寂の中で佇んでいた……。

《一方その頃》
コマチソウたちはヨーテホルクの街にある研究施設を借り、害虫のパーツを隅々まで調べていた。
「う～ん……」
「コマチソウさん、何か分かりましたか？」
顕微鏡で害虫のパーツを調べるコマチソウに、ハツユキソウがきのこのスープを差し入れる。
「この外殻や羽根の強靭さ……本土の害虫に比べて異常に発達してる……ふふっ。面白いなぁ……」
「……」
若干引いてしまうハツユキソウだった。
「どうですか、調査の方は？」
二人に話しかけてきたのは白衣を着た初老の男性。白く立派な髭がトレードマークの彼はこの研究施設の所長だという。
「う～ん、本土にいない種類の害虫だってことは分かったけど、他は何とも言えないね」
「この近くには人の住んでない島とかありませんか？」
「島……ですか。いくつかありますが、どこも害虫のほとんどいない平和な島ですね」
所長は自慢の髭をいじりながらそう答えた。
「ただ、いやしかし……」

「？」
「いや失敬。数百年前に沈んでしまった島のことをふと思い出したもので」
「沈んだ島……詳しく聞かせてくれませんか？」
「ハツユキソウ、そういう話好きだよね～」
「えへへ……」

一呼吸おいて、男性は話し始めた。
「あなた方は、海賊の伝説を聞いたことがありますか？」
「はい！　この近くは昔たくさんの海賊がいたんですよね」
はしゃぐハツユキソウを見て、老人は優しく微笑んだ。
「ええ。もう３００年も前のことになりますがね。その海賊たちの中でも最も強く、この一帯の海を仕切っていた男がいました。本名は分かっていませんが、『シルバー』と呼ばれ、ある者には恐れられ、ある者には慕われていたということです」
「シルバー……」
「そのシルバーが拠点としていた島がこの近海にあったのです。『海賊島』と呼ばれていたようですが、そこにはシルバーが生涯集めた金銀財宝や、中には当時の政府の機密事項が記された書類なども集められていたようです」
「でもその島は沈んでしまった」
「はい。流石のシルバーも老いには勝てず、海賊島にごく一部の仲間だけを連れて晩年を過ごしていました。しかしシルバーは政府すら恐怖に陥れた大海賊。彼の老いを好機と思う者も少なくなかったでしょう」
「ってことは、シルバーは誰かに殺されたの……？」
「はい。彼を疎ましく思った政府によって殺された、という説が有力です」
二人の喉がゴクリと鳴った。
彼女たちの脳裏にはある映像が浮かんできた。燃え盛る島の中、シルバーが政府の男たちに銃を突きつけられている場面だ。

そんな窮地でも、シルバーは余裕の笑みを絶やすことはない。
『俺を殺すつもりか？　ふははっ、ならば殺せ！　だが俺のこの身体がバラバラに引き裂かれようとも、俺の魂は誰にも消せやしねぇ！』
銃声が鳴り響く。シルバー海賊団の、髑髏の書かれた旗が燃え落ちていく……。

「シルバーが殺された後、彼の遺体は海賊島ごと葬り去られました。他の海賊たちへの影響を恐れたのでしょう。こうして大海賊シルバーの物語はあっけなく終わりを告げたのです」
男性が悲しそうな眼差しを見せる。その瞳は一体何を見つめているのか。
「長い話になってしまいましたね。申し訳ない」
「いえ、面白かったです。所長さんは随分シルバーに詳しいんですね」
「私も彼のファンですからね。こんな年寄りになっても、やはりロマンというのは忘れられないものです。ふふ……」
「ねぇ、今ふと思ったんだけど、その海賊島がまだ残ってる可能性もあるの？」
コマチソウの質問に、所長は目を見開いた。
「……実はシルバーの財宝は、そのほとんどが見つかっていないのです。単純に海底に沈んだのか、それとも……まあ、推測の域を出ませんがね」
「可能性はゼロじゃない……か。ねぇ所長、海賊島のあった大体の場所って分かるの？」

《その頃、団長たちは》
「だぁっ！　はぁ……はぁ……」
島に踏み入れると、たくさんの害虫たちが襲いかかってきた。まるで侵入者を追い出すかのように。
「この害虫たち、港都市で戦ったのと同じ種類じゃない？　きゃぁっ！」
「イキシア!?」

イキシアの身体が吹き飛び岩壁へ激突する。彼女を吹き飛ばしたのは、他の害虫よりも明らかに大きく、禍々しい邪気を纏ったハチ型の害虫だった。黒いマントを羽織り、髑髏マークの付いた帽子を被っている。
「ギャァァァ!!」
「ぐっ！」
うめき声にも似た咆哮が島中に響き渡る。その声一つだけで、私も花騎士たちも気圧されていく。
「っ!? 来るよ！」
海賊害虫が動き出した。そう思った瞬間、既に害虫はワレモコウの目の前でサーベルを振り下ろそうとしていた。
「ぐぅっ!?」
「ワレモコウさん!?」
間一髪その攻撃を避けたワレモコウだったが、その風圧で身体は大きく吹き飛ばされてしまった。
ワレモコウを倒した害虫は、次の標的をイキシアに定める。
「ぐっ……！」
何とかサーベル攻撃を槍でいなしたイキシアに、間髪入れず次なる攻撃が襲い掛かってきた。
「……今っ！」
コンボルブルスが隙を見て害虫を背後から攻撃しようとする。しかし、
「がぁっ！」
海賊害虫は瞬時に上半身を１８０。回転させ、彼女の槍を押し返す。彼女の小さな身体は軽々と吹き飛ばされてしまった。
「この人数では分が悪い？ 撤退するです？」
ワレモコウの声に、イキシアとコンボルブルスが害虫から離れる。そして、
「撤退、了解。魔法、ドンっ！」
クコの必殺の魔法攻撃が害虫に直撃する。さしてダメージは受けていないようだが、足止めには充分な時間が稼げた。

「はぁ……はぁ……皆、大丈夫？」
「な、何とか……」
何とか船に乗り込み島から離れることに成功したが、飛翔性害虫の追手は無慈悲に襲い掛かってくる。
「皆、疲労。このまま、退避、危険」
このまま船を壊されでもしたら一溜まりもない。絶体絶命かと思われたその時、聞き覚えのある声が聞こえてきた。
「お～い、皆～！」
水平線の上に一台のクルーザーが見える。一瞬幻覚かと思われたそれは、着実にこちらへ近付いてくる。そしてそれに乗っているのは……
「コマチソウさん！」
「コマチソウ……助かったです？」
へとへとになりながら研究所が所有している船に座り込む五人。
「それにしても所長、やっぱりあの島は……」
「はい。あれこそ正に海賊島。大海賊シルバーの島！」
我々は遠ざかる島を見つめる。必ずまた戻ってくると誓いながら。

海賊島の謎を追え（後編）

あの『海賊島』での戦いの後、港付近での戦闘はますます激しさを増していった。

もはやこれはヨーテホルクだけの問題ではない。ブロッサムヒルの全戦力を結集させこれを制圧せよ、という命令が下された。

我々の騎士団は島に乗り込んで戦う前線部隊に任命された。勿論戦力を評価されたので光栄なことではあるが、正直複雑な思いがあった。島で戦った海賊害虫、あれと戦うのなら犠牲が出る可能性もある。花騎士たちは皆大切な存在だ。誰一人失いたくない。しかし確実に勝利を手にするためには……。

「団長、元気、無い。病気？　薬、飲む？」

いつの間にか目の前にいたクコが心配そうに顔を覗き込んでくる。

大丈夫だ、病気ではない。ただ今後の決戦のことで悩んでいてな。

「団長、心配無用。クコ、守る。皆、団長も、必ず」

クコの小さな身体が今日はやけに大きく見える。そこでハッと気付く。私は恐れているだけなのだと。海賊害虫のあまりの強さに戦意を失っているだけなのだと。

しかしクコはあの害虫と戦ってもなお自信を失くすことはない。また一つクコに教えられてしまったか。

「団長、戦う、一緒に」

そう言って小指同士を絡ませて約束した。

騎士団では、あの海賊害虫を倒すための準備が急ピッチで進められていた。

「この毒と……この爆薬も持ってこう。ふふ、楽しみだなぁ」

これから決戦だというのに、コマチソウは随分と楽しそうだな。

「あっ、団長。当然でしょ、あんな強くて珍しい害虫、中々お目にかかれないからね」

動機はともかくポジティブなのは良いことだ。

「まぁでもあたしも怖くないと言ったら嘘になるけどね。だから準備

は入念にするの。団長にも、はいこれ」
手渡されたのは……普通の短剣のようだが。
「おっと、あんまり触らないでね。毒が塗ってあるから。いざと言う時の護身用に持ってて」
そういうことならありがたく頂いておこう。

「団長、ポーチュラカ帰還したんだよ。長い期間逢えなくて寂しかったんだよ」
遠征に出ていたポーチュラカの部隊が帰還した。勿論彼女たちにも今回の作戦に参加してもらう。持てる戦力の全てを出し切らなければ戦いに勝つことはできないだろう。
「噂は聞いたんだよ。強力な害虫を倒すため、皆で協力するんだよ！」
ポーチュラカのいつものダジャレにも、今日は何だか癒されるようだった。

「団長さん、見て見て！　ベルガモットバレーの技術者さんに頼んで、船にバリアを貼れるようにしてもらったんだ」
「これで海上の害虫とは戦わずに海賊島に辿り着ける？」

そして迎えた作戦当日。
「では手筈通りに？　ポーチュラカとイキシアの部隊が他の騎士団と共に先行して雑魚敵を殲滅、モコウ達はボスの海賊害虫に集中するです？」
クコ、コマチソウ、コンボルブルスがこくりと頷き、船に乗り込む。
「よ～し野郎ども！　だんちょの騎士団の底力を見せてやれ～！」
「指揮は私が執るんだよ!?」
「わっはー！　やってやりましょう！」
「私達らしく優雅に勝つわよ」
「参りましょう、ベッセラお嬢様」
「皆、準備はいい？　出発するよ！」
こうして総力戦の火蓋が切られた。

「おぉっ、本当に普通の害虫の攻撃くらいではビクともしませんね」
バリアを貼った船が飛翔害虫たちを押しのけながら進んでいく。
そして、
「突っ込め～!!」
害虫たちを吹き飛ばしながら船は海賊島に突っ込む。
「喰らえ～!」
船を降りたポーチュラカ達はコマチソウが作った爆薬を一斉に投げつける。砂塵を巻き上げながら、害虫たちの身体が粉々にはじけ飛ぶ。
「凄い威力なんだよ。でも……」
煙が晴れていくと、その中から大型害虫の姿が現れる。
「流石に大型には効きませんね……」
「それなら私達が直接倒すしかない！　いっくじょー!」
「船での突撃に爆弾……あまり優雅とは言えないわね。でも……」
ベッセラの傘が次々と害虫を貫いていく。
「たまにはこういう戦いもいいわね」
「流石ですお嬢様。私も……えいっ！」

花騎士たちの健闘により、島の害虫はどんどん駆逐されていく。
我々の部隊は雑魚敵は無視し、島の中央部へ向かっていた。
「皆上手く立ち回ってくれてる？　後はモコウ達がボスを倒すだけです？」
「これは……地下への入り口？」
島の丁度中央。足元にあった分厚い鉄の扉を開けてみると、暗く長い階段が地下へと続いていた。
「シルバーの隠れ家かな？」
「……取り敢えずその話は後です？」
ワレモコウの表情が突然強張る。彼女の目線の先には、あの害虫がいた。

「ようやくお出ましだね……この前みたいにはいかないっ！」
「クコ、援護」
　クコの魔法攻撃が炸裂、不意の攻撃に害虫がよろめく。その隙をついてコンボルブルスが害虫の胸元に飛び込み一撃を放った。
「ギギィ!?」
　害虫も反撃してくるが、コンボルブルスは身体を反らせそれを回避、次の一撃を害虫の胸元に打ち込んだ。
「ぶんぶん！」
「ギッ……」
　コンボルブルスのヒット＆アウェイとクコの遠距離からの魔法攻撃が害虫を翻弄していく。
（戦えてる……でもこれで終わるような相手じゃないよね）
　コマチソウの不安通り、害虫の動きは速さを増していく。同時に身体が赤みを帯びていき、発熱による蒸気が放出されていた。
「だぁぁぁっ！」
　コンボルブルス渾身の一撃が放たれる。しかし、
「ギィッ!!」
「ふ、防がれたっ!?」
　攻撃をサーベルで受け止めた害虫はコンボルブルスを吹き飛ばし、一直線にクコに突進してきた。
「あぅっ！」
「クコっ!?」
　軽々と吹き飛ばされたクコの身体をワレモコウがキャッチする。
　ワレモコウの視線が僅かに動く。コマチソウは冷や汗をかきながらそれに頷く。
「はぁ……はぁ……たぁぁぁっ！」
　ボロボロになりながらも立ち上がり害虫へ向かっていくコンボルブルス。無論その攻撃は簡単に防がれてしまうが、それはただの陽動であった。
　害虫の側面からコマチソウが全力で迫る。手に持っているのはいつもの武器の虫取り網ではなく、

「そりゃぁっ！」
「ギギギ⁉」
　緑色の液体が入った瓶を投げつける。飛び散った液体は害虫の全身にぶちまけられていく。
「ギギィ……ギッ⁉」
「よし、効いてる効いてる」
　害虫がもがき苦しんでいる。
　コマチソウが投げつけたのは毒薬の入った瓶だった。
「普通の生き物なら即死する神経毒……これを浴びて生きていられるのは流石だね」
　トドメを刺すためにじりじりと距離を詰めていくコマチソウ。しかし次の瞬間、彼女の身体は害虫の攻撃によって宙を舞っていた。
「えっ……えっ⁉」
　事態を飲み込めていない彼女に害虫の追撃が襲い掛かる。
「コマチソウ、危険です⁉」
「ギッ……！」
　しかしすんでの所でワレモコウの魔法が害虫に命中し怯ませる。その隙に花騎士たちは害虫から距離を取った。
「何あの威力……こ、こんなことって……」
　珍しく狼狽えるコマチソウ。彼女としてはこの毒で決着がつくと考えていたので当然か。
「落ち着くです？　相手は未知の害虫、こちらの思惑が外れることもありえる？」
「……そうだよね。あたしの考えが甘かったかも。ワレモコウ、一旦距離を取ろう。コンボルブルスもクコも疲弊してるし、援軍を待たないと」
「賛成です？」
「害虫、モコウが相手です？」
「ガァァァ⁉」
「……」
　かなりのダメージは受けているが、それでも未だに通常の害虫以上

の迫力を放つ海賊害虫に、ワレモコウは気圧されてしまう。
それでも魔法攻撃を害虫に放っていく。ダメージを与えるためではなく、気を引くために。
「ワレモコウ、下がって！　よ～し、点火！」
地面に撒かれた火薬にコマチソウが火を付ける。衝撃で木々が揺れ、黒煙が天に昇っていく。
「団長、今のうちに距離を取って他の部隊と合流するよ」
分かった。そう返事をして、クコとコンボルブルスを抱えながら走っていく。

≪ポーチュラカ部隊≫
「爆発音!?　ボス害虫戦が本格的に始まったみたいだね」
「雑魚敵は私達が引き受けます。あなた方は仲間の援護に行ってあげて下さい」
ポーチュラカ達と一緒に戦っていたヨーテホルク騎士団の花騎士がそう進言する。
「ありがとう！　お互い無事帰還しようね！」
「はい！」
「だんちょ、待ってろよ！　生きてろよ！」
ポーチュラカ、リシアンサス、ランタナの三人は風を切るようなスピードで木々の間を駆けていく。しかしその行く手には……。
「ぐうっ!?」
「リシアンサスさん！」
一本のナイフがリシアンサスの肩に突き刺さった。それが飛んできた方向を見ると、木の上にベージュ色のマントを羽織ったアリ型害虫の姿があった。大きさは普通だが、明らかに通常の害虫とは異なる空気感を醸し出している。
「ヒューー……」
害虫はナイフを弄びながら草笛を吹いている。余裕綽々といった様子だ。
「随分とすかした害虫ですね……」

木から降り、颯爽と投げナイフ攻撃を繰り出す害虫。それを避けながら、リシアンサスは二人にこそこそと話し始める。
「ポーチュラカさん、ランタナさん。この害虫は私が引き受けます。二人は団長さんの所へ」
「でもあの害虫、かなり強そうだよ。怪我してるリシアンサスさん一人じゃ……」
「大丈夫です、死ぬ気はありませんよ。投げナイフは私の得意分野です。害虫なんかに遅れは取りませんって」
笑顔を見せるリシアンサス。しかしその額には脂汗が滲んでいた。
「さぁっ、勝負です！」
リシアンサスと害虫のナイフが空中で衝突する。と同時にポーチュラカは走り出した。
「リシアンサスさん、ありがとう。どうかご無事で」

「……行きましたか」
「ヒュー……」
「すかしてるのも今のうちです。あなたを倒して、必ず皆と合流してやりますからね！」
「シュッ!!」
害虫が目にも止まらぬ速さでナイフを投げていく。リシアンサスも何とかそれについていくが、
「ぐっ……」
肩の痛みに一瞬動きが鈍る。害虫はその一瞬の隙を見逃さなかった。
（ここまでですか……団長さん達はどうか無事に帰還して下さい……）
迫りくるナイフにリシアンサスが諦めたその時だった。
「たぁっ！」
「ランタナさん!?」
ランタナの短剣がナイフを弾き飛ばした。
「どうして戻ってきたんですか!?」

「リシアンサスが気になってね。だんちょの方はポーチュラカに任せてきた。誰か一人でも死ぬとだんちょが悲しむからね」
「……ありがとうございます」
「お礼なんていいからさ、二人で一緒にあいつ倒そう！」
「はい！」

《イキシア部隊》
「よし、雑魚は大体倒した！　私達も団長さんと合流しよう！」
「了解。でもその前に……」
「？」
「隠れてないで出てきなさい」
　ベッセラが指さした方向、岩壁しかないように見えたそこから、蜘蛛型の害虫の姿が浮き出てきた。真っ黒なボディーに黒装束姿。素早い動きと隠蔽能力は、どこか忍者を思わせた。
「岩の影に身を潜めていたようね。こそこそと隠れて、優雅じゃないわ」
「ジャッ!!」
「イキシア、先に行ってちょうだい。この害虫は私とエキザカムが引き受けるわ」
「う、うん。二人とも、気を付けてね」

「厳しく行きますよ！」
　エキザカムが放った一撃をかわし、忍者害虫は再び影に姿を隠した。そして、
「っ!?　あうっ！」
「エキザカム!?　大丈夫？」
　エキザカムの背後から害虫が突然姿を現し、攻撃を加えた後に再び姿を消した。
「速い上にこの隠蔽能力……かなり厄介ね……そこっ！」
　ベッセラの飛ばした斬撃も害虫は軽々と避けていく。
「くっ、せめて姿がちゃんと見えれば……」

（このままではやられてしまいます……何か手は……）
「ぐぅっ！」
岩の影から影へと巧みに隠れる害虫に翻弄される二人。こちらの攻撃は当たることはなく、体力だけが消耗されていく。
その時、エキザカムがあることを思いついた。
（影……それなら……）
「お嬢様っ！」
「……ん」
二人が目線で合図を取り合う。長年主従関係を結んできた二人だ、もはや言葉は必要なかった。
（この一撃で決めなければ負ける……集中……集中よ、私）
緊張した面持ちのベッセラに、エキザカムは微笑みかける。
「お嬢様。ベッセラお嬢様なら大丈夫ですよ。私も応援しますから」
「エキザカム……ふふ、そうね。私なら、私達なら必ず優雅に勝てるわ」
いつも通りの優雅な笑顔に戻ったベッセラ。最後の一撃が今、放たれようとしていた。

≪団長部隊≫
「くそ～……やっぱり爆弾くらいじゃビクともしないか……」
煙が晴れ、中から害虫の姿が現れる。ダメージはほとんど受けていないようだった。
援軍が来るまで時間を稼ごうと思ったが、負傷者を抱えているこちらは直ぐに追いつかれてしまった。
「もうここで戦うしかない？」
「よ、よ～し、いっちょやってやるか！」
後ろは海、朽ち果てた船が横たわるこの場所が最後の決戦の場となった。
「ぐあっ！」
「うぅっ!?」
かなり弱っているとはいえ、相手は極限級を超える害虫。コマチソ

ウもワレモコウも押し負けていく。
「団長さん、私も戦う……」
「く、クコも……皆、守る」
花騎士たちは懸命に戦ってくれている。私にも何か……何か出来ることはないのか。
「う、うわぁっ！」
「コマチソウ!?」
害虫のサーベルがコマチソウの頭上に振りかざされたその時だった。
「とぁっ！　ポーチュラカ、参上だよ！」
「ギギィ……」
ポーチュラカの圏がサーベルを弾き飛ばす。
「てやぁぁっ！」
「!?」
害虫の背後から巨大な光の矢が襲い掛かる。
「ごめん、遅れた！」
イキシアも合流する。体力が少しずつ回復しているクコとコンボルブルスも武器を構え、これで六対一。数の上では圧倒的に有利だが、私には何か胸騒ぎがしていた。

≪リシアンサスとランタナ≫
「くっそー！　害虫に近づけない！」
「くっ！　攻撃が熾烈過ぎます……どこかに隙は……」
害虫の投げナイフを防ぐのが精一杯のリシアンサスとランタナ。
「こ、こうなったら……リシアンサス！」
攻撃を防ぎながら、ランタナは何かをリシアンサスに耳打ちする。
「……っ!?　そ、そんなのダメです！　失敗したら死んじゃいますよ！」
「大丈夫大丈夫。ランタナはそんなやわじゃないよ。それにリシアンサスだって、一人でここに残る時は死ぬ覚悟してたでしょ？」
「うっ！　それはそうですけど……」

「大丈夫。信じてるよ、リシアンサス」
「……分かりました。花騎士の底力、見せてやりましょう！　そして皆で生還してハッピーエンドです！」
「よっしゃー！　いっくじょー！」
「害虫、ランタナが相手だ！　うぉぉぉ!!」
　単身、害虫に突っ込んでいくランタナ。
「ヒューー……」
　害虫は飽くまで冷静にナイフで彼女を迎撃しようとする。
　何本かのナイフがランタナの身体に突き刺さるが、それでも彼女は止まることはない。
「ヒュッ!?」
　そんな彼女の気迫に、害虫は焦りを見せる。しかしそれこそが花騎士たちの狙いだった。
「はぁ……はぁ……やっと慌て出したね。でももう遅い！」
　ランタナの背後、害虫にとって死角となっていた場所からリシアンサスが現れる。
「喰らえ、正義の嵐！」
　リシアンサスの必殺技、『ジャスティーストーム』が害虫を襲う。流石の害虫もこれを防ぐことは出来ず、全身に無数のナイフが刺さっていく。そして、
「ヒューーーッ!!」
　害虫の身体が粉々に砕け散る。それを確認し、二人は安堵の表情を見せ、その場に倒れ込んだ。
「うぅ……もう動けない……」
「団長さん、ポーチュラカさん、皆さん……どうかご無事で」

《ベッセラとエキザカム》
「行きますよ！」
　エキザカムが攻撃の構えを見せると、害虫はすぐさま岩影に隠れようとする。その時、
「とぉっ！」

エキザカムの槍が上空に放られる。大きなサファイアが付いたそれは日光を反射し、辺りを青く美しい光で照らしていく。
「ジャッ!?」
「そこねっ！」
身を潜める影を無くした害虫に、ベッセラの必殺の一撃が放たれる。
「ジャァッ……」
崩壊していく害虫の身体。勝利を確信すると、二人はその場に座り込んだ。
「はぁ……はぁ……何とかなりましたね」
「そ、そうね……でもかなり消耗してしまったわ。団長達にも早く合流したいのだけど……」

《団長部隊》
「はぁっ！」
「たぁぁぁっ！」
六人の花騎士の力を合わせてもなお、海賊害虫との力は拮抗していた。
「つ、強すぎるよ……」
すると害虫の身体が突然赤く発光し始めた。
「何か来る!?　害虫から離れるです!?」
害虫の身体から放たれた無数のレーザーが花騎士たちを襲う。
「くっ、避けきれない！」
「はぁ……はぁ……だぁっ！」
「クコ、皆、守護！」
コンボルブルスの召喚した植物のツタと、クコの魔法攻撃がレーザーから花騎士たちを守る。しかし彼女たち二人は逃げ遅れ、害虫の攻撃をもろに受けてしまった。
「が……はっ……」
「うぅ……団長……」
血を吹き出しながら倒れる二人。

「クコさん、コンボルブルスさんっ！」
それでも害虫の攻撃は緩むことはない。その熾烈な攻撃に押されていく花騎士たち。
しかし、今の害虫にはどこか焦りのようなものを感じる。奴を着実に追い詰めているのは間違いない。
「はぁ……はぁ……」
「くそぉ、もう少し、もう少しなのに……」
ここまで追い詰めたが、花騎士たちの消耗も害虫同様激しい。このままでは全滅するのも時間の問題だ。どうにか……どうにかしなければ……。

『おい、そこの兄ちゃん。あんたは戦わねぇのか？』
幻聴だろうか。男の声が聞こえた気がする。
『おいったら。聞こえてるんだろう、俺の声が』
その声はだんだんはっきりと聞こえてくる。耳というより、脳に直接響くような声だ。
『あんた、部下に戦わせておいて自分は戦わねぇのか？』
そうではない。しかし、花騎士でもない自分があのレベルの害虫相手に何が出来るのだろうか。
『ま、あの害虫が滅茶苦茶強いのは分かるけどな。でもあんたにも出来ることはあるだろう？』
私に出来ること……それは一体……。
『俺も害虫と戦ったことはねぇから良く分からんが、一つだけ言えることがある。戦いは強い奴だけが勝つわけじゃねぇ。あんたにも分かるだろう？』
強い者だけが……？
そこでふと腰に付けた短剣の存在を思い出す。
『弱いからこそ出来ることもあるってことだ。ま、精々頑張れよ』
声がどんどん遠ざかっていく。
待ってくれ。あなたは一体……。

……今のは一体何だったのだろう。しかし今は考えている暇はない。私は私の出来ることをしなければ。
「ぐあぁっ！」
害虫の攻撃に傷付いていく花騎士たち。私は騎士団長として、今程無力感を感じたことはない。私はこんなにも弱くちっぽけな存在なのだと改めて分かった。
しかし、弱いからこそ出来ることもある。あの声が教えてくれた。
害虫は花騎士の方だけを気にしている。私など気にもしていないだろう。だからこそ、攻撃出来る隙があるはずだ。
コマチソウのくれた毒の付いた短剣。私の腕力ではこれを奴に突き立てることもかなわないだろう。一か所、イキシアの光の矢が付けた傷痕以外には。
ゆっくり、ゆっくりと近付いていく。悟られたらお終いだ。足音が出ないように注意しなければ。
心臓ははち切れんばかりに暴れている。短剣を刺したとしても、大したダメージは与えられないかも知れない。反撃で自分は殺されるかも知れない。それでも、やらなければ。花騎士たちを守るためにも……。
「はぁ……はぁ……っ!? ごしゅ」
ワレモコウが気付いたと同時に、私は短剣を害虫の背中の傷に突き刺した。
「ギィィィ!!」
「ご主人っ!?」
「団長さんっ!?」
その時見た空は、まるで海のように青く透き通っていた。
害虫を刺した瞬間、私の身体は宙を舞った。害虫の反撃をもろに喰らってしまったのだ。
全身の骨が粉々に砕け散る音が聞こえた。もう助からないかも知れない。最期に愛おしい花騎士たちの姿を目に焼き付け、静かに瞼を閉じていった。

「だ、団長……うわぁぁぁっ！」
ポーチュラカが涙を流しながら害虫を斬りつけていく。
「ギィッ!?」
再び毒を喰らった害虫の動きはどんどん鈍くなっていく。もはや花騎士の攻撃に対応することは出来なくなっていた。
「ギィィ……」
「逃がさない！」
ポーチュラカの剣幕に動揺し、背中を向け逃げ出した害虫を、コマチソウの虫取り網が拘束する。
「皆、今だぁっ！」
ポーチュラカ、イキシア、ワレモコウの必殺技が次々害虫に命中していく。
「ギャァァァ！　アァ……」
断末魔が止み、害虫の身体は崩壊を始める。遂に海賊害虫との戦いが終わりを告げたのだった。

ここはどこだろう。真っ暗な闇の中。俗に言うあの世というやつだろうか。
『安心しな。まだ死んじゃいねぇよ』
聞き覚えのある声が聞こえた。この声は確か、害虫との戦いの時に聞いた……。
『よっ、また会ったな』
気が付くと自分の目の前には中年の男が立っていた。大きな身体に海賊帽と黒いマントに眼帯。見るからに海賊といった風貌だ。
あなたはもしや伝説の大海賊、シルバーじゃないか。
『伝説か……そう言われるとちと恥ずかしいな……』
男は人差し指で頬をちょんとつついた。
『いかにも。俺は海賊、キャプテン・シルバーだ。ここ海賊島で死んじまったんだが、成仏できずに今でも魂だけで彷徨っているらしい』
ということは自分はやはり……。
『いや、あんたはまだ死んじゃいない。早く部下の元に帰ってやれ。

あんたのことを待ってる奴がたくさんいるんだろう?』
　言われて花騎士たちの姿が思い浮かぶ。私が倒れ、皆悲しんでいるかも知れない。
『分かるぜ。仲間を置いて死ぬのは辛いよな。俺がそうだった。なぁ、ちょっとだけ昔話を聞いてくれないか？　久しぶりに人間と話せて嬉しくてな』
　こくりと頷いた。シルバーと話したことを教えたら、ハツユキソウ達はさぞ喜ぶだろうなと思う。
『政府の人間が俺を殺そうとしていると知った時、俺は海賊島にシェルターを作り、そこに仲間たちを避難させた。そして俺自身は政府の前に立ち塞がった』
　殺されると分かっていても……か。
『ああ。俺は殺されても構わない。だが仲間たちまで道連れにされるのは癪だったんでな。さっきのあんたと一緒だよ』
『政府は俺を殺した後、海賊島を大砲で破壊して回った。俺が存在していたことすら消すためにな。シェルターは何とか無事で、仲間たちは政府たちの目をかいくぐって逃げおおせたらしい。良かったよ』
　シルバーはニカッと歯茎を見せて笑う。噂に違わぬ豪快な男だなと思った。
　そう言えば、成仏していないと言ったが、何か未練があるのだろうか。そんな風には見えないが。
『未練ねぇ……俺は世界中の海をこの目で見てきたし、世界の色んな秘密を見てきた。それこそが俺の追い求めた夢とロマンだ。だからそこに未練はねぇ。ただ一つ、俺が死んだ後の海賊島を害虫に乗っ取られたこと、それだけが未練かねぇ……。だからあんたには感謝してるよ、騎士団長殿』
『じゃあ、そろそろお別れだ。あんたは仲間の元に、俺はあの世に行ってくらぁ』
　もう成仏出来るのだろうか。
『ああ、おかげ様でな。あっ、そうだ。地下のシェルターに行ってみろ。俺の残した財宝が眠ってる』

しかしそれはあなたの物だろう。
『別にもう要らないしなぁ……それに、財宝なんておまけだよ。もっともっと大切なものが、この世界にはあるんだからな。ま、あんたは言わなくても分かるだろうが』
花騎士たちの顔を思い浮かべ、こくりと頷いた。
『それじゃ、これでおさらばだ。くれぐれもこっちには来ないようにな』
シルバーの身体が光になって消えていく。彼に一礼をして、私も仲間たちの元へ帰ろうと思った。

「……ちょう。団長っ！」
泣き声が聞こえる。花騎士たちの悲しそうな泣き声が。
「っ!? ご主人、目を覚ましたです!?」
「団長……クコ、歓喜……うぅ……」
「団長～！」
花騎士たちは皆それぞれ目に涙を貯めている。何とか腕を動かし、彼女たちの頭を撫でて微笑みかける。
帰ろう、私達の騎士団へ。
「あい♪」
「はい！」
「うんっ！」

《数ヶ月後》
私と花騎士たちの怪我はすっかり治り、我々は再び海賊島の調査へと向かっていた。
「騎士団長殿、ご同行を許してもらいありがとうございます」
研究所の所長にも同行してもらうことにした。シルバーにも詳しい彼なら何か分かることもあるだろうと思ったからだ。
「それにしても団長さん、シルバーと話したなんて凄いじゃないですか～」
ハツユキソウが手揉みをしながら私に話し掛ける。害虫との決戦

の日にシルバーと対話したことを話すと、それ以来ハツユキソウは興味津々に私にそのことを尋ねてくるようになった。

「ここが地下シェルターへの入り口ですか」

海賊害虫と戦う前に見つけた鉄の扉。それを開けて階段を降りていく。カンカンと甲高い足音が響き渡る。

一番下まで降りると、そこにも鉄の扉があった。

「おぉっ、これは凄い！」

先に部屋に入った所長が感嘆の声をあげる。

「シルバーが残した財宝ですよ！　それに彼の海賊団の旗に……これは地図でしょうか？」

所長が手にした何枚かのボロボロで黄ばんだ紙。そこには春庭全域の地形が記されていた。

「シルバーが冒険した場所を記録したものかも知れません。詳しく調査してみますが、これは貴重な資料ですよ！」

深いしわの付いた顔が子供のように無邪気に笑う。彼がどれだけシルバーを追い求めてきたのか良く分かった気がする。

「しかしこの財宝、いったいどのくらいの価値になるんですかね？花騎士全員で分け合っても結構残りそうですね……ふふふ……」

いや、この財宝はここに置いておこう。

「私もそれが良いと思います。飽くまでこれはシルバーのものですからね」

「そ、そうですよね！　いやぁ、私もそう思ってました！」

「ありがとうございました団長殿、ハツユキソウさん。おかげで貴重な体験をすることが出来ました」

優しい笑顔の後、彼は海に向かって一礼した。

「キャプテン・シルバー、どうか安らかに……」

「シルバーの魂も成仏して天国に行けたんですかね？」

「いや、彼が行ったのは地獄でしょう」

所長のその言葉に、ハツユキソウはぎょっとした。

「海賊というのは結局犯罪者です。天国に行くことは出来ないでしょう。ただ……」
彼は海を見つめる。夕日が映り、鮮やかなオレンジ色になった海を。
「ただ、彼は地獄に行ってもなお冒険を続けていることでしょう。自分の夢とロマンのために」
「……そうですよね」
海賊島での死闘は終わりを告げた。誰もいなくなったこの島で、キャプテン・シルバーの遺品だけが輝きを放っている。彼が追い求めた夢とロマン、そういったものを我々は次の世代に受け継いでいかなければならないなと思った。

笑顔の力

「だ、団長さん……どうしましょう……」
狼狽える新人花騎士たちに、大丈夫だと言って肩を叩く。とは言え、この状況は非常にまずい。前にも後ろにも極限指定害虫。簡単な調査任務のはずがどうしてこうなったのか。

《数時間前》
新人花騎士三名を連れて、リリィウッドとブロッサムヒルの国境にある森の中にやってきた。
「だ、団長さん。今日はよろしくお願いします！」
そう緊張することはない。今日は森林地帯の調査任務。害虫と交戦する予定もない。
「そ、そうですよね」
初々しさが可愛らしい。しかし彼女達もこれから経験を積み、立派な花騎士になっていくことだろう。そんな彼女達のために私も出来る限りのことを教えようと思った。

「害虫の足跡……食べ残された木の実……こういう所から生息する害虫を推測できるんですね」
うむ。しかし何かがおかしい……足跡が大きすぎるのだ。この辺りは小型の害虫しか生息していないと言われているのだが。
「そ、それってつまり……」
一旦戻った方がいいだろう。ベテランの花騎士を連れ、本格的に調査をする必要がある。
その時、背後の草むらが揺れる音が聞こえた。息を殺して草むらの向こうを覗く。
極限指定の害虫。腕利きの花騎士でも単体で倒すことは困難な害虫がそこには居た。
こちらにまだ気付いていないのが幸運か。この場は早く逃げなければ。そう指示をするが、一人の花騎士が腰を抜かしその場に座り込

んでしまった。更に不幸なことに、彼女の足元にあった木の枝がパキッと音を立てた。その音は無情にも静かな森の中に鳴り響いてしまった。
「グガァァァ!!」
「こ、こっちに来る……」
動けなくなってしまった花騎士たちを抱え全速力で逃げる。相手はトライサンボン型の害虫。動きが直線的なので、木や岩といった物陰を利用しながら逃げれば私の脚でも逃げられるはずだ。しかし、
「だ、団長さん！　向こうからも！」
逃げる方向にもまた同じ害虫の姿があった。私は咄嗟に横の草むらの中へ逃げ込む。獣も入らないような背の高い草が並んでいて、とてもじゃないが普通に走れる場所ではない。しかし今はなりふり構っている暇はない。何とかあの害虫たちを撒かなければ。

1時間程経っただろうか。流石に三人の新人花騎士を抱えながら走るのは厳しい。その場にへたり込み、荒い息を吐き続ける。
「団長さん、私達を置いて逃げて下さい。一人なら逃げられます」
そんなことは出来ない。花騎士を置いて逃げるなど、騎士団長失格だ。
「団長さん……」
しかし二匹の害虫はまたしても我々を発見し、全速力で突進してこようとする。
もうダメか……そう諦めかけた時、斬撃音と害虫の叫び声が聞こえた。
「大丈夫ですか、団長さん、皆さん!?」
オレンジ色のポニーテールが華麗に舞った。駆けつけて来てくれたのは花騎士のサントリナだった。
「こんな所に極限級の害虫が出るなんて……偶然この近くの任務に来ていて良かったです」
「グルルル……」

サントリナの斬撃は害虫の角を簡単にへし折ってしまった。
やけになり突進してくる害虫を軽々とかわし、サントリナは次々と攻撃を当てていく。
この強さ、流石『伝説の花騎士』と呼ばれるだけはある。
「す、凄い……」
固唾を飲んで彼女を見守る新人たち。しかしその背後には……
「危ないっ！」
「えっ？　きゃぁぁぁ！」
潜んでいたもう一匹の害虫が新人の一人を襲う。
死を覚悟した新人花騎士だったが、害虫の攻撃が来ないことを不思議に思いゆっくりと目を開けた。
「……え？」
「大丈夫ですか？」
サントリナの足元に血溜まりができている。彼女の横腹を害虫の角が突き刺していた。
「あ……う……」
「怪我は無いみたいですね。良かったです」
それだけ言うと、サントリナは電光石火の斬撃であっという間に害虫たちを切り刻んでしまった。

「そ、そんな……サントリナさん……」
涙を浮かべる新人にサントリナは優しく微笑みかける。
「泣かないで下さい。笑顔が一番ですよ。ほら笑って下さい。ニコーって」
しかし彼女の顔色はみるみる青ざめていく。力が抜けて倒れそうになったサントリナを抱き抱え、急いで騎士団へ戻ることにした。

「うぅ……団長さん……」
あれから丸二日、サントリナは目を覚まさない。時折苦しそうにうわ言を言い、再び眠りにつく。それの繰り返しだった。
「この出血量では、普通の人間ならとっくに死んでますよ。まだ生き

ていられるのは、花騎士だからなのか、彼女だからなのか……」
騎士団の専門医が眉をしかめながら私にそう伝える。
花騎士といえど、あの怪我をしたらただではすまないだろう。サントリナを生かしているのは精神力か、それとも生への執着か……。
「先……輩……。皆……」

ここはどこだろう。何も見えない真っ暗闇。私はさっきまで害虫と戦っていて……そうか、新人の花騎士さんを庇って……。ということは私は死んだのかな。
『サントリナ』
私を呼ぶ声が聞こえる。聞き覚えのある、優しい声。
「先輩……」
忘れもしない。復讐のことしか考えられなかった私に笑顔を思い出させてくれた、優しい花騎士の先輩。
『サントリナ、新人の花騎士を庇ったのね。私と同じように……』
「先輩がくれたものをお返ししただけです」
『そう……』
『疲れたでしょう？　正義のため、皆のためと言っても、あなたは一人の人間。体力的にも精神的にも限界がある』
「私は……」
思い浮かんだのは皆の笑顔。仲間の、新人の花騎士さんの、そして団長さんの。
「確かに、皆の笑顔と平和のために戦うのは、辛く厳しかったです。でも、復讐のために戦うよりずっと良い。それは先輩も分かってますよね？」
『そうね……でもあなたの辛そうな顔を見ていたらつい』
「えへへ、先輩はやっぱり優しいですね」

『サントリナ！』
『サントリナちゃん！』
「皆……」

目の前には、昔私が暮らしていた村の人々がいた。思わず涙が溢れる。
「皆、守れなくてごめんなさい……」
『サントリナちゃんのせいじゃないよ。むしろ私達の方が謝らないと。あなたが花騎士になって戦いに明け暮れるようになったのも、もとはと言えば……』
「違う！　違いますよ。皆のせいじゃない」
『サントリナちゃん、辛かったら戦わなくてもいいんだよ？　あなたは優しい娘だから、きっと戦うのも辛いでしょ？』
「……はい。それでも私は……私は戦います。皆の笑顔のため、平和のために」
『立派な花騎士になったのね。そこまで言うのなら、私達にはあなたを止める権利は無い』
『でも忘れないで。私達はいつでもあなたのことを見守ってるから』
見守ってくれている。それだけで心がほんの少し軽くなった気がした。
「はい……はい！　先輩、皆、ありがとうございます！」
遠くへ消えてしまう、私が大好きだった人々。そして今私が大好きなあの人の声が、近づいてきているのを感じた。

「うぅ……こ、ここは……」
真っ白なベッドの中、サントリナがゆっくりと目を開ける。思わず彼女の華奢な身体を抱きしめてしまった。
「わっ！　だ、団長さん!?　ここは……病院ですか？」
状況が把握出来ていない彼女に、害虫の攻撃に倒れた後、丸二日眠り続けていたことを説明する。
「ご心配をおかけしました。私ならもう大丈夫です！　あいたたた……」
サントリナが横腹を押さえる。まだ傷が痛むのだろう。無理はしない方がいいと諭し、再びベッドに寝かせた。
「団長さん、ずっとサントリナに付いててくれたんですか？　ありが

とうございます！」
サントリナの笑顔が眩しく光る。それを見ただけで私の心も暖かくなっていく。彼女が日頃から言っている「笑顔は最大の武器」とはこのことなのだと思い知らされた。
「あの、団長さん。私寝ている間、死んだ先輩や村の皆に会ったんです」
そうか。
「信じてくれるんですか？」
サントリナの言うことだ。疑う必要はないだろう。
「えへへ……」
サントリナは恥ずかしそうにはにかんだ。
「それで、辛いんなら戦わなくてもいいんだよって言われたんです」
今まで一緒に過ごしてきて、サントリナの優しさは痛いぐらいに分かっている。そんな彼女が何を犠牲にして戦っているのかも。
騎士団長としては失格かも知れないが、本当は彼女のような花騎士を戦わせるのは辛い。出来ることなら普通の少女として穏やかに、彼女の大好きな笑顔に囲まれながら生きて欲しい。
「団長さん……えへへ、やっぱり団長さんも先輩と同じくらい優しいんですね。でも、だからこそ守りたいんです。あなたみたいな優しい人が死なないように」
今まで微笑んでいたサントリナが真剣な眼差しでこちらを見つめてくる。
まだあどけなさの残る顔立ちに、小さく華奢な身体。少女のような白い腕にそっと触れる。
それならサントリナの無垢な笑顔は誰が守ってくれるのだろう。こんな小さな身体で皆を守っているのに、彼女自身はこうして傷付いていくことしか出来ないのだろうか。
「団長さん？」
だから……サントリナの笑顔は私が守ろうと思う。私には君のような強さはないが、それでも出来ることはあるはずだ。そう伝えると彼女の頬には涙が伝った。

「ご、ごめんなさい……そんなこと言われるのは初めてだったので……」
流した温かい涙を拭い、彼女はにっこりと微笑んだ。
「えへへ……それじゃあ、守ってくださいね、団長さん♪」
サントリナが目を閉じる。彼女の華奢な肩を抱き、そっと唇を近付けた。その時、
「失礼します」
「わぁぁっ!? ……って、あなたは」

病室に入ってきたのは、先日サントリナに助けられた新人花騎士だった。
「サントリナさん、助けて頂きありがとうございました。それと、私のせいで怪我をさせてしまってすみません」
そう言って深々と頭を下げる。そんな彼女にサントリナは優しい笑顔を向けた。
「あなたのせいじゃありませんよ。気にしないで下さい」
「で、でも……」
新人花騎士は包帯の巻かれたサントリナの身体を見て、申し訳なさそうに俯いた。
「そんな悲しい顔をしないで下さい。笑顔が一番ですよ。ほら、ニコーって」
それでも浮かない顔をした彼女に、サントリナは静かに語り始める。
「私も昔先輩に助けられたんです」
「えっ……」
「その先輩は良く『笑顔が一番の武器』だって言っていて、私も先輩と一緒にいると笑顔になれたんです」
「……」
「だから先輩が私を庇って死んでしまった時も、この人の後を継いで皆の笑顔を守ろうって思ったんです」
「だからあなたも、いつか後輩を助けられる花騎士になって下さい。

そうなってくれれば私も嬉しいです」
「は、はい！」
新人花騎士の元気のいい返事に、サントリナも笑顔を返す。新人花騎士はきらりと涙を輝かせながら彼女に笑顔を見せたのだった。

≪数日後≫
「いらっしゃい、団長さん」
サントリナの部屋に招かれた。怪我もすっかり完治したようで、今日は退院祝いで一緒に鍋を食べようと誘われたのだった。
部屋の中に入ると、きのこや野菜の美味しそう香りが漂い、空腹を刺激された。
しかしサントリナは友人が多いので他にも誰かを呼んでいるのかと思っていたが、どうやら私一人らしい。
「そ、その……今日は団長さんと二人で過ごしたいなって思ってるんです」
サントリナの頬が赤く染まる。そんな彼女の身体を抱きしめ、この前出来なかった口づけを交わすのだった。

春の風

厳しかった冬もとうとう終わりを告げ、外では鳥や虫が楽しそうに歌っている。あぁ、春だ。のどかな春だ。そして春と言えば、

「きゃぁっ！」

花騎士がひらひらと舞うスカートを抑える。

そう、春と言えば強い風の吹く季節。風と言えばパンチラ！　嗚呼、何と甘美な響きだろうか。

「団長さん、何してるの？」

黒く長い髪をなびかせながら話しかけてきたのは、花騎士兼軍師のブリオニア。相変わらず綺麗な髪だな、と恒例の挨拶をする。

「あ、ありがとう。それで、こんな風の強い所で何してるの？」

学問だ。

「こんな所で？」

そうだ。この中庭は隙間風が強く吹くし、学問にはもってこいの場所だ。

「学問と風に何の関係が……」

まあ見ていなさい。丁度向こうから二人組の花騎士が歩いてきているだろう。

「それでこの前～……きゃっ！」

桃色か、素晴らしい。少女的な可愛らしさを存分に引き出している。ワンポイントの赤いリボンも可愛らしい。

「……これ、学問というより覗きなんじゃ……」

いや、これはれっきとした学問だ。パンツには全てがある。生きとし生けるもの全ては、パンツの中から生まれる。そしてそれはいずれ戻るべき場所でもある。つまりパンツを知るということは、この世界の謎を解き明かすための高尚な学問なのだ。

「そう……まぁ、捕まらない程度に頑張ってね……」

去ろうとしたブリオニアの手を引く。

「まだ何かあるの？」

ブリオニアは学ぶのが好きだと聞いたことがある。一緒にこの世

界の不思議を解き明かさないかと誘ってみることにした。
「確かに勉強するのは好きだけど、そんな変態行為には興味ない。これぽっちも」
そう言うな。ブリオニアにもパンツの、パンチラの魅力というものを教えてやろう。
「別にいいんだけど……」

二人で柱の影に隠れていると、小さな人影が見えた。あれは花騎士のウサギゴケだな。
「あんまり話したことはないけど、小さくて可愛い子だよね」
うむ。まぁブリオニアも負けていないがな。
「そ、そういうのはいいから……」
顔を真っ赤にして照れている。そのいじらしさがまた可愛らしい。
ところで、ウサギゴケはどんなパンツを履いてると思う？
「やっぱりウサギ柄の可愛いやつかな？」
ふふ、そう思うか。
「な、なにその不敵な笑みは……」
その時、風でウサギゴケのミニスカートが舞い上がった。その時我々が目にしたものは、
「黒い……紐パン……？」
「どうしてあんな子がそんな過激な下着を……」
これがパンツの奥深さだ。何となく分かってくれたか。
「ふむ……普段人に見せないものだからこそ、その人の本当の内面を知ることができる……それが戦いに活きることも……」
いつもの癖で独り言を始めるブリオニア。だがそこに再び風が吹いてくる。
「……ん？　団長さん、どこ見て……」
私の視線を感じたのか、ブリオニアの目線が下に向けられる。そこでやっと自分のスカートが捲れていることに気付いたようだ。
「まったく。でも私はタイツ履いてるし、パンツは見えにくいでしょ？　残念だったね」

いや、これはこれで！
「何なの本当に……」

「団長ちゃんとブリオニアちゃんだ～。何やってるの？」
「ヘチマさん、良い所に。団長さんが私じゃ手に負えない。助けて」
「何があったの？」
　事の経緯を説明した。
「なるほど、パンチラね。団長ちゃん、気持ちは分かるけど、そんな覗きみたいなことしちゃ駄目だよ」
「えっ!?」
「どうしたの、ブリオニアちゃん？」
「な、なんでもない……」
「それに、どうせ覗くんならうちの旅館に来なよ。女の子の綺麗な肌が見られるよ」
「もっと駄目でしょ……」
　裸か……確かにそれもいいが、今はパンツが見たい気分なんだ。
「花騎士の誰かに頼んでみれば？　あなたって結構人気あるみたいだし、パンツを見せてくれる人もいるんじゃない？」
　違う、違うのだブリオニア。誰かに与えられるだけのパンツに価値はない。自分の手で掴み取らなければ！
「掴み取るのは犯罪だから止めようね？」
「あ～、分かるかも」
「二人とも本当に何なの……」

「よし、団長ちゃん。うちの旅館においで。ベルガモットバレーだから、ここよりも風が強くて見やすいと思うよ」
　良い考えだ。早速お邪魔しよう。
「それじゃあまず、ミニスカートを履いてきた子は温泉を無料にして～」
　いや、待ってくれヘチマ。
「？」

風で揺れるロングスカートもまた趣がある。
「なるほど！」
「なるほどじゃない……」

その日、ヘチマの温泉旅館は大繁盛だった。見知った花騎士たちも多く遊びに来ていた。
「スカートデー？　浴衣じゃなくて普段着のスカートを履いてると温泉が無料だって」
「へ～、気前いいね」
「いいねいいね。綺麗な子がたくさん……」
我々は草むらの影から彼女達を観察する。特にここ、温泉へ行くための渡り廊下は風が強く吹き、絶好のパンチラスポットと化している。
「これ普通に犯罪なんじゃ……」
「しっ、次のお客さん来たよ」
むっ、あれはコンボルブルスだな。膝丈よりも長いスカートと銀色の髪が美しくなびいている。
「ん～……ロングだから見づらい……あっ」
青いスカートの中にあったのは、白くてもこもこした……
「かぼちゃパンツだ！」
「なるほど。パンツって言ってもこれじゃ興奮しないでしょ？」
いや、コンボルブルスのようなクールで大人びた少女が、こんなに可愛らしいものを履いてるとは。そのギャップが素晴らしい。眼福だ！
「そう……でもあんまり大きな声出すと……」
「誰かいるの!?」
「ほら、気付かれた」
ま、まずい……。気配を消さなければ。
「……気のせいかな」
コンボルブルスが背を向けて歩き出す。
心臓がドクドクと高鳴り、冷や汗が溢れ出した。もう少しでバレる

ところだった……。
「団長ちゃん、もっと気を付けないと」
「そもそも覗きをしなければいいんじゃない？」

ほう、くまさんか……。
「絆創膏……」
「履いてない!?」
と、何だかんだでその後はバレずに満喫することが出来た。

打ち上げ代わりに宿の温泉で温まることにした。今日の営業も終わったので、この広い露天風呂は三人だけの貸し切りとなっている。
「ふぅ、眼福眼福～」
「まったく、どうして私まで……」
とか何とか言って、結局最後まで付き合ってくれたじゃないか。ツンデレさんだな、ブリオニアは。
「いや、本当にそう言うのじゃないんで……」
それにしてもこの露天風呂から見える景色、素晴らしいな。
「木も花も色付いてきたね」
「もう春だからね」
そう、季節はもう春だ。花咲き誇る桃色の季節。
「今年の春も良い季節になればいいね」
「ふふ、そうだね……」
桜の花びらが一つ、湯舟の上に落ちる。
三人の微笑みが優しい春の空気の中に溶け込んでいった。
しかしこの時の私達は知らない。この後騎士団に帰ると、憲兵とナズナから厳重注意を受けることを……。

にんじんみたいに

外は静かな闇に包まれている。春とはいえ、夜はまだ少し肌寒い。その冷たい闇の中を小走りで通り過ぎていく。

溜まっていた書類仕事を片付けていたらこんな時間になってしまった。だからと言って明日の仕事を休めるわけではないので、今晩は簡単に晩飯を済ませて寝てしまおう。そう思って自室のドアを開けると、ほんのりと玉ねぎや人参の甘い香りが漂ってきた。

「あっ、お帰り～。今日は遅かったね」

キッチンに立っていたのはエプロン姿のキャロットだった。何で私の部屋にいるのだろう。

「この前合鍵貰ったからね～」

それはそうだが、この時間まで待ってくれていたのだろうか。キャロットだって今日は任務があったはずだ。

「いいのいいの。疲れてる時は一人より、二人一緒に居た方がいいでしょ？　私だって、団長さんと一緒にいたいし」

彼女の明るい声と笑顔に癒される。キャロットと居るといつだって元気を貰える。

「団長さん、お腹空いてる？　カレー出来てるよ。勿論甘口で」

このどこか安心できる香りは、キャロットのカレーの香りだったか。

「安心……えへへへ、嬉しいな」

顔を綻ばせるキャロット。私もまた、冷たい頬が緩むのを感じた。

「お客様～、こちらの席にどうぞ～」

店員のような掛け声で椅子に座らせられる。彼女は実家が海の家で、その手伝いをしてるうちにそういう話し方が癖になったらしい。

「どう？　美味しい？」

キャロットのくりくりの瞳が私を見つめてくる。

美味しい。そう答えると彼女はその瞳を優しく閉じて微笑んだ。

キャロットのカレーはいつも甘口。彼女の好みでもあるらしい。

私は辛口派だったのだが、キャロットに出会ってからはすっかり甘口派に変えられてしまった。辛みの少ない柔らかな口当たりは、こんな疲れた時には特に美味しく感じられる。
「団長さん、凄く幸せそうな顔してるね」
それはそうだろう。キャロットがいて、こんな美味しいカレーを食べられるのだから。
「うわ～……その言葉、女の子は勘違いしちゃうよ～。このすけこましし～」
いたずらそうに笑うキャロット。別に勘違いさせるつもりはないのだが……。
「団長さんは天然だからね」
そう言って彼女は腰を上げた。
「団長さんが食べてる間に、ちょっと片付けしちゃうね。洗濯物あるなら出しておいて」
分かった。そう言って彼女の背中を眺める。
しかし、キャロットのエプロン姿は中々唆るものがある。いつもの格好から上着を脱いで、その上にエプロンを着けているので、背中が丸見えだ。
白い背中、肩、そしてうなじ。うなじから長く伸びる、金色のツインテール。白いフリフリのエプロンも良く似合っている。
と、しばらく見惚れていると、彼女の顔がこちらに振り返った。
「団長さん、さっきから視線を感じるんだけど……」
言われてギクッとする。悪いことをしたと彼女に謝ろうとしたその時、
「もう、お客様困ります～。当店はそういうお店じゃないんですよ～♪」
再び悪戯めいた笑顔が覗き、私もホッと肩を撫で下した。
「そういうのは後で……ね♪」
指で鼻先をツンと突かれ、彼女は再び洗面室の方へ行ってしまった。
……後で何なのか。キャロットと居ると安心するし癒されるが、た

まにこうしてドキドキさせられる。甘口カレーのように、優しい甘さの中にほんのりと刺激がある。おかげで毎日退屈することがない。
「わぁぁぁっ！」
洗面室の方からドンガラがっしゃんと尋常じゃない音がした。おそらく滑って転んだのだろう。
……こういう刺激は求めていないのだが。

「えへへ……団長さんごめんなさい……」
膝に絆創膏を貼って、恥ずかしそうに笑うキャロット。大した怪我ではなくて何よりだ。
「せっかく良妻っぷりをアピールするチャンスだったのに……」
そんなことをしなくてもキャロットの良さは誰よりも分かっているつもりだ。
「団長さん……えへへ、嬉しい。よし、気を取り直して次のサービスに参りま～す」
他に何かあるのだろうか。
「うん。すっごく気持ちいいことしてあげるね♪」
気持ちいいこと……それはつまり……。

「団長さん、結構溜まってるね～。自分でしたりしないの？」
そう言えば最近は忙しくて、している余裕が無かったな。
「言ってよ～。私が毎日だってしてあげるんだから♪」
「それじゃあお客様、キャロットの耳かきをご堪能下さい」
耳の中をごそごそと、細い耳かきが動き回る。なるほど確かにこれは気持ちいい。
いや、それよりもキャロットの太ももが気持ちいい。少女のように柔らかな肉付きが私の頭にしっかりとフィットしている。そしてこのスパッツの感触も素晴らしい。
「団長さん、すけべなこと考えてる？」
そ、そんなことはない！
しかし静かな夜だ。昼間の喧騒が嘘のように。キャロットの吐息

がやけにはっきりと聞こえる。そして規則正しい心臓の音。それがまるで子守唄のように聞こえ、私はこっくりと舟を漕ぎだした。柔らかい手の平が、私の頭を撫でたような気がした。

朝の雫が目の中に一滴二滴、私を目覚めさせる。ゆっくりと起き上がり背伸びをする。

いつの間にベッドの上に移動したのだろう。もしかしたらキャロットが運んでくれたのかも知れない。と、そこで彼女の姿が見えないことに気付いた。

台所には昨日のカレーの残りが、甘い香りを漂わせている。

きっとキャロットは先に出掛けたのだろう。

カレーをよそい、お茶を入れる。何だか寂しい。一人暮らしにも慣れたはずなのに、どうしてこんなに寂しさを感じるのだろう。そんな疑問を頭の中で巡らせながら、カレーを口に運んだその時だった。

「たっだいま～！」

元気な声が玄関の方から聞こえてくる。明るい笑みを浮かべて、キャロットがそこに立っていた。

「ちょっと買い物に行っててね。朝ごはんも一緒に食べたいから急いで戻ってきた」

そうか。

何でもないように装うが、心の底は嬉しさで満たされていた。

「野菜が安く買えてね～、それで～」

朝の優しい日差しの中、二人で摂る朝食はとても賑やかだ。

にんじんを一口。甘くて苦いそれが今の生活に重なって見えた。

もうすぐ出掛ける時間だが、もう少しだけ、このまま居たいと思った。

お嬢様学園へ潜入せよ！（前編）

「わぁ～！」
　試着室の中からサントリナの感嘆の声が聞こえてくる。
「団長さん、団長さん、見て下さい！　制服、すっごい可愛いですよ！」
　カーテンから顔を出して、ぴょんぴょんとポニーテールを揺らすサントリナ。珍しくはしゃぐ彼女がそもそも可愛らしいが、身体が見えていないので制服評は何とも言い難い……。
「あ、そうでした！　ごめんなさい……」
　恥ずかしげに試着室から出てくる。
　白いブラウス、赤いリボン、紺色のブレザーと膝丈スカート、そして紺色のハイソックス。古き良きオーソドックスな制服といったところか。いつも通りのポニーテールも制服に良く似合っている。
　何故こんなコスプレ？をしているかというと、今回の任務がある学園への潜入任務だからだ。
「えへへ、学生服って憧れてましたから、着られて良かったです。まさか花騎士になってから着ることになるとは思いませんでしたけどね」
　サントリナは騎士学校には通わずに花騎士になったので、学校生活への憧れが強いのだろう。
　と、そうこうしているうちに他の花騎士の準備も整ったようだ。
「団長～、あたしこういう格好はちょっと……」
「お待たせしました、団長様。今回の任務、精一杯頑張りましょう！」
　エキザカムは平気そうだが、コマチソウはかなり恥ずかしそうだ。いつもの服の方が露出が多くて恥ずかしいと思うのだが……。
「バナナオーシャン民だから露出は別に。でもこういうきっちりした服は苦手なの～」
　取り敢えず数日間は我慢してくれ。それにこの任務で捕獲した害虫はコマチソウの好きにしていいのだし、そのためなら頑張れるのではないか。
「うぅ……うん！　何とか頑張ってみる！」

三人の花騎士を連れて潜入するのは、ブロッサムヒルでも有数のお嬢様学園、春華（しゅんか）学園。ここでは最近、怪奇現象に悩まされているらしい。金品や食料がなくなったり、音楽室の肖像画の表情が変わったり、理科室の人工模型がひとりでに動き出したり。

「罪の無い学生さん達を怖がらせるなんて許せません。必ず私達が成敗してみせます！」

いや、後半二つはよくある学校の七不思議だと思うのだが……。

しかし一つ、特に気になるのは生徒数が三人増えているということだ。

「害虫が生徒さんに成りすまして潜んでいるのかも知れない、ってことですよね？」

理事長はそう睨んでいるらしい。だからこそ知り合いである私の上司に相談して、騎士団が調査に乗り出すことになったのだ。

「特殊な脳波を出す害虫もいるからね。その脳波で、あたかも自分たちが本当の学生だと思い込ませてるって可能性は充分にあると思うよ」

だとしたら学生達は危険と隣り合わせということになる。理事長の計らいで、学生達にこのことは知らせていないらしいが、知られればばたちまちパニックになるだろう。だからこそ我々は秘密裏に事を解決しなければならない。

「うん。だからあたし達三人が呼ばれたんだよね」

今回の任務を遂行するにあたっては、最少人数での編成が求められた。素早く害虫を発見、駆除でき、容姿も学生に溶け込みやすい花騎士を。

まずは害虫のプロ、コマチソウ。そして戦闘のプロ、サントリナ。最後にお嬢様のプロ？、エキザカムだ。

「いやいや、お嬢様のプロって何!?」

仕方ないだろう。コマチソウもサントリナもお嬢様の何たるかが分からないのだから。

「そりゃあそうだけどさ～」

「大丈夫ですよ、コマチソウ様、サントリナ様。ベッセラお嬢様のメイ

ドの私が、お嬢様としての振舞い方をバッチリ教えて差し上げます」
「ええ、お願いしますね、エキザカムさん！」
にこやかに握手を交わす二人を、コマチソウは苦笑いを浮かべながら見つめていた。

「ここが春華学園……」
「ついに来たね……」
流石お嬢様学園というべきか、校門が私の背丈の三倍程はありそうだ。校舎や校庭も、まるで城のような広大さだ。
「よくいらっしゃいました。ではこちらへ」
整った白髭を生やした、清潔感のある老人が校舎の中へ案内してくれた。
「では団長様は職員室へ。花騎士の皆様は教室へお願い致します」
「あれ、そう言えば団長さんはどういう設定なんですか？」
新任の体育教師だ。

「サントリナです。皆さん、どうぞよろしくお願い致します」
私は、エキザカムさんに言われた通り、スカートの端をつまんで広げて見せた。これがお嬢様式の挨拶らしい。
（怪しい人は……今の所見当たりませんね……）
それにしても、教室ってこんな感じなんだ。３０人くらいの生徒さんが机を並べている。どの人も上品そうな、綺麗な人ばかり。この中で、私は浮いていないかな……。そう不安に思っていると、ほとんどの生徒さんが私の周りに集まってきた。
「サントリナさん、どちらからいらしたの？」
「綺麗な髪ですわね。普段どのようなお手入れを」
「何か習い事などやっていらっしゃるのかしら？」
「え、え～と……」
まさかこんな質問攻めされるとは。気圧されて困っていた時、
「皆、席に戻りなさい」

黒髪ボブカットの、きりりとした目の少女の一声で、他の皆は静まり返った。
「サントリナさん、私はこのクラスの学級委員長、カオル。授業が終わったら学園を案内するから、少しだけ付き合って」
「は、はい！　了解しました！」
（た、助かった……）
可憐という言葉が似合う少女だった。その切り揃えられた前髪も相まって、どこか古風さも感じられる。

「ここが噴水広場。あっちが中庭ね。それでそこを通り過ぎると温室があるから……」
「随分と広いんですね～」
私がキョロキョロと辺りを見回していると、カオルさんがこちらを振り向いてきた。
「……あなたもしかして、生まれは庶民だったりする？」
「え？」
「間違ってたらごめんなさい。他意はないの……」
俯いてしまった彼女に、何か言葉をかけようとした時だった、校門の方から歓声が聞こえてきたのは。
「何でしょうか、あの声」
「空蝉の君（きみ）でしょ」
「空蝉の君？」
カオルさんが無言で指差す方を見る。そこにいたのは他の生徒よりも頭二つ分は背の高い、色白の金髪美人だった。その周りに大勢の生徒たちが、黄色い歓声をあげながら集まっている。
「あの長身と中性的な顔立ちで、この学校一の人気者なの。色白で儚そうな雰囲気から『空蝉』なんて言われてる」
「確かに綺麗な人ですね」
空蝉の君……何か引っ掛かるものがあるし、覚えておこう。

放課後、コマチソウさんとエキザカムさんと、廊下で合流した。

「どうですか、進捗は？」
「こっちは全然……」
「私のクラスにも怪しい人はいませんでした」
「う～ん、やっぱりそう簡単にはいきませんね。ごきげんよう♪」
「「ごきげんよう♪」」
　廊下ですれ違う人に三人でお嬢様式のあいさつをする。
「お二人とも、自然とあいさつできましたね。凄いです」
「エキザカムにみっちり教え込まれたからね～」
「これからどうしますか？」
「取り敢えず学園の隅々まで調べてみよう」
　そう言ってコマチソウさんが先頭に立って歩き始める。
「ごきげんよう♪」
　……何だかんだ彼女も楽しめているようで良かった。

「これが勝手に動き出すという、理科室の人工模型ですか」
「いや、それはただの学校の七不思議だと思うけど……」
　夕焼けに骸骨が不気味に照らされている。そもそも何でこんなものが飾ってあるんだろう。
「害虫の標本とか置いてないかな？」
「無いと思いますよ……」
　その時、骸骨がカタカタと動き始めた。
「!?　な、何!?」
　幽霊……いや、そんなはずは……。
「……そこです！」
「ゲェッ！」
　エキザカムさんが懐から槍を取り出し、部屋の角に向けて攻撃を放つ。すると突然、ハエ型害虫の姿が現れた。
「一体どこから……」
「よぉし、捕獲だ！」
　コマチソウさんが網を構えると、害虫は教室の外へ出ていこうとする。

「待てぇ！」
　三人でそれを追いかける。するとドアが開き、
「邪魔しないで欲しいな、花騎士くん達」
「空蝉の君……？」
　鼻筋の整った美しい顔が目の前に現れる。その碧い瞳を見つめていると、段々と視界がぼやけていく。立っていることもままならず、私達はその場に座り込んでしまった。
「ふふ……」

「はっ！　……ここは？」
　茶色い天井、白いベッド、窓の外で揺れる木々。見たことのない景色だ。
「おはようサントリナ」
「おはようございます、サントリナ様」
　部屋を見回すとベッドは三つあって、エキザカムさんとコマチソウさんがそれぞれ寝そべっていた。
「あの、二人とも。ここは一体……？」
「寮でしょ。昨日からこの学園に転校してきたからね」
　そうだった。昨日、ここに転校してきたんだった。
　転校？　どこから？　何故転校してきたんだっけ？　思い出そうとすると頭が痛くなる。
「まぁそう暗い顔しないでさ。心機一転、学園生活を楽しもう！」
「えいえいおー！」
「……」
　何かが釈然としない。それでも学園生活が楽しみなのは私も同じだ。
「……よし」
　制服に着替えてリボンを結ぶ。そうだ。せっかくの学園生活だし、楽しまないと損だよね。
「早くしないと置いてっちゃうよ、サントリナ」

「えへへ、待って下さい～」

≪その頃、団長は≫

「先生～、先生～♪」

何人かの生徒と一緒に校庭でソフトボールを楽しむ。汗が日差しに当たってキラキラ光る。うむ、これぞ健全な教師と生徒の交流だ。

しかし学園とは良いものだ。右を見ても左を見ても、制服を着た若き乙女たち。良き……実に良き……。

「先生～、そっちにボールが行きましたわよ」

よし、任せておけ！　そう意気込み、ボールに向かって全力疾走する。そして見事スライディングキャッチして、掴んだボールを生徒たちに見せると、黄色い歓声が校庭に響き渡った。

「きゃ～、先生素敵～！」

嗚呼、素晴らしき哉。ようやく我が世の春が来たようだ。

……何か忘れているような気がするが、まぁ些細なことだろう。それよりも、今この一瞬を楽しまねば！

任務を忘れ、学園生活を楽しむ花騎士たちと団長。果たして彼らは害虫から人々を守るという使命を果たすことが出来るのか。

続く。

お嬢様学園へ潜入せよ！（後編）

「たぁっ！」
　私の一振が相手選手の剣を弾き飛ばし、青空の下に生徒たちの歓声が響き渡った。
「くっ……参りました」
　悔しそうな顔をしながらも、相手は握手を求めてくる。
「強いですわね、サントリナさん。剣の心得が？」
「はい。剣は昔から……」
（あれ？　どうして剣を始めたんだっけ？　それに、何かとても悲しいことがあった気がする……）
　大切なことだと思うけれど、何故か思い出せない。頭の奥が、霧がかかったようにもやもやしている。
「サントリナさん、お疲れ様」
　学級委員のカオルさんがタオルを渡してくれた。
「ありがとうございます、カオルさん」
　私が笑顔を見せると、彼女も静かに微笑んだ。
「学園にも大分慣れたみたいだね。最初は凄く深刻そうな顔をしてたから、心配してたんだ」
「そう……でしたか？」
「うん。まるで、何か使命を果たそうとしてるような……」
「使命……痛た……」
　その言葉を復唱しただけで、頭が締め付けられるような痛みが走る。
「だ、大丈夫？」
「大丈夫です……少しジッとしていれば治りますから……」
　今まで何度もこの頭痛が襲ってきた。今のように何かを思い出した時に痛むことが多い気がする。それが不思議だった。
「サントリナ～！」
　校門の方から聞き慣れた声が聞こえてきた。

「コマチソウさん、エキザカムさん」
「こんな時間ですし、帰りましょう。今日は美味しそうなお茶を頂いたので、帰ったら早速淹れてみますね」
いつもの帰り道をいつものメンバーで歩く。皆の笑顔が夕焼けに照らされる。当たり前なことなのに、そんな時間がとても愛おしく感じる。
「そう言えば、三人ってどうやって仲良くなったの？」
「どうって……同じ日に転校してきて、寮でも同じ部屋だったので」
「凄い偶然だよね」
偶然……確かにそうだ。偶然にしては出来過ぎている。そもそも、私は転校してくる前から、彼女達のことを知っているような気がする。漠然とした疑問を抱えながら、三人の寮へ帰っていった。

「♪～」
エキザカムさんは、先程言っていたお茶を鼻歌交じりに淹れている。朗らかな空気が流れる中、私はずっと抱えていた疑問を言ってみた。
「最近、何か大切なことを忘れているような気がするんです……」
その言葉にエキザカムさんは手を止めた。
「……実は私もです。お二人にこうしてお茶を淹れるのも良いですが、私には大切な人がいて、その方のお世話をするのが何よりも幸せだったと思うんです」
「あたしも。最近のあたしは空っぽって感じなんだよね～。大好きなことを忘れちゃったような……」
「「う～ん……」」
◇◆◇◆
カオルさんと廊下を歩いていると、聞き慣れた歓声が聞こえてきた。
「空蝉の君……相変わらず凄い人気ですね」
「ま、あの容姿ならね」
男性と見間違うような、スラッとした長身。綺麗に整った顔。確か

に女の子に好かれる要素が多い。
「サントリナさんは興味ないの？」
「私はあんまり……」
「そう。私もああいう気取った人は好きじゃないんだよねぇ」
　咄嗟に辺りを確認した。空蝉の君のファンが近くにいたらまずい。
「私、元は庶民の出だから、ああいう『いかにも』なお金持ちは苦手」
「そうだったんですか……」
　転校してきた日に、「庶民の生まれなんじゃないか」と聞かれたのを思い出した。
「本当の両親は私の小さい頃に亡くなって、今の両親に引き取られたの」
　その話にデジャヴを感じた。
　両親が……親しい人が亡くなった記憶。私にもそんな記憶があるような気がした。
　いや、そもそも何故私は自分の過去が分からないのだろう。覚えているのはこの学校に転校してからの数週間のみで……。
（この胸の痛み……皆……先輩！）
「そうだ……そうだったんだ……」
「サントリナさん？」
「カオルさん、頼みがあります」
◇◆◇◆
「いやぁ、空蝉の君っていいよねぇ～」
　コマチソウが、窓の外の空蝉の君を見つめている。だらしない表情で。
「コマチソウ様は空蝉の君のファンなんですね」
「うん！　特にあのフォルム……たまんないよね……」
（……フォルム？　確かにスタイルは良いですが、そんな言い方しますか？　それじゃあまるで……）
「ところでところで、エキザカムだってさっきから空蝉の君のことジロジロ見てるじゃん」
「私は彼女の付けている宝石が気になるんです。私、宝石磨きが趣味

なんですよ」
「変わった趣味だね……」
（ん？　変わった趣味？　それ、あたしも良く言われてたような……）
（そう言えば、どうして宝石磨きが好きになったんでしたっけ……）
　その時、二人の脳内に稲妻のような衝撃が走った。
「「あぁっ！」」
◇◆◇◆
「サントリナ！」
「サントリナ様！」
　コマチソウさんとエキザカムさんが形相を変えて走ってきた。
「その様子……二人も思い出したみたいですね」
「いや～、もうばっちり！　それにしてもあの害虫、あたしに害虫採集のことを忘れさせるなんて許せない！　絶対捕まえて標本にしてやる！」
「私もです！　ベッセラお嬢様を愚弄するなんて……今回ばかりは厳しく行きますよ！」
「落ち着いて、二人とも」
　興奮状態の二人を、落ち着いた声が止めた。
「カオル……？」
「私が頼んだんです。空蝉の君を倒すのに協力して欲しいって」
「よ～し、それじゃ団長を交えて作戦会議だ！」

　きゃっきゃっと女生徒たちが長いスカートをなびかせながらはしゃいでいる。そんな様子を間近で見ることが出来るのは教師の特権だ。本当に、この学校に来れて良かった。
「先生♪」
　生徒が呼んでいる。行かねば。
「団長さん！」
　背後から声をかけられ、ピタリと立ち止まった。
　そこにいたのは四人組の女生徒たち。内三人は何やら見覚えが

あった。
「もう、何やってんの団長。早く気付いてよ」
団長……先生ではなく団長……そうか、私は……。
◇◆◇◆
というわけで、騎士団長、完全復活だ。
「遅いよ～。今まで何やってたの？」
何か幸せに満ちた時間だった気がするが……記憶が曖昧で良く覚えていない。
「まぁ、何にせよこれで明確な敵が分かったわけですし、後は対策を立てるだけです」
「そのことなら、私にいい考えがある」
サントリナのクラスメイトだという女生徒、カオルが手を上げて発言すると、おもむろに紙と筆を取り出した。
「これをこうして……」
カオルは紙に文字を書き始めた。古風な彼女と書道というのは実に良く似合っている。
「出来た」
彼女が見せた紙には、達筆且つ荒々しい文字でこう書かれていた。
『果たし状
空蝉の君へ剣での勝負を申し込む
明日○月○日の１５時に武道館で待つ
サントリナ』
「……何ですか、これ？」
「果たし状。あの空蝉の君が全校生徒の前で負けたら、もうこの学園には居られなくなるんじゃないかなって」
勝負に負けたくらいでそうなるだろうか。
「う～ん。確かにあの手の害虫はプライドが高いし、惨めったらしく負けたら逃げ出すかもね」
「果たし合いなんて恰好良いです。当日は応援させてもらいますね、サントリナ様」
「って、私が戦うのは確定ですか……まぁいいですけど……」

≪翌日≫
掲示板に張り出された紙を見て、生徒たちがざわついていた。
「あの空蝉の君に勝負を挑もうなんて……なんという命知らずな……」
「誰ですの、このサントリナとかいう小娘は？」
「確か最近転校してきた二年生ですわ」
「相当頭がお悪いのでしょう。こんな小娘、空蝉の君が相手をする前に私が叩きのめして差し上げますわ！」
口々に罵声が飛び交う中、そよ風のような爽やかな声が届けられた。
「どうしたんだい、皆」
「う、空蝉の君……」
サラっとした長い金髪をなびかせ、空蝉の君は生徒たち一人一人に優しく微笑みかけた。
「果たし状のことは知っているよ。大丈夫、私は負けない。何といっても私は『君たちの』空蝉の君だからね」
「きゃぁぁぁ～！」
きざな台詞に黄色い歓声が飛び交う。満足そうな笑みを浮かべながら、彼女はおかっぱ頭の二人の生徒に目で合図を送っていた。
（楽しみだね……あの花騎士が全校生徒の前で無様に負けるなんて……）
◇◆◇◆
そしてついに決戦の日がやってきた。『春華の戦い』。そう呼ばれ、後世まで言い伝えられる戦いが、今始まろうとしていた。
武道館には空蝉の君の活躍を見ようと数百人の生徒たちが押し寄せていた。その妙な熱気の中、サントリナは飽くまで冷静に自身の剣を磨いている。
「凄い人ですね……」
「そうだね……ってエキザカム、その恰好は何？」

「これですか？　学ランと言って、応援団の正装らしいです。団長様がおっしゃっていました」
「団長……」
　そんな目で見るな……やはり応援団と言えば学ランにハチマキなのだ。
「この格好をしていると、何だか力が湧いてくるような気がします。今日は張り切って応援しますよ！」

「やぁ、君がサントリナだね。今日はよろしく頼む」
　武道館の中央、審判の前で向かい合う二人。空蝉の君が差し出した手を握り返すと、会場からはブーイングが起こった。
「完全アウェイだね……サントリナさん、頑張って」
「よろしくお願いします」
　サントリナは空蝉の君に近付き一礼する。その時、空蝉の君が彼女の耳元で囁いた。
「まさか暗示が溶けるとは、流石花騎士だ。しかし、暗示にかけられたままの方が幸せだったんじゃないか？」
「っ!?　どういう意味です？」
「そのままの意味だよ。私に逆らわなければ幸せな学園生活が送れたものを……」
「花騎士としての任務ですから。空蝉の君、一つ約束して下さい。この勝負、私が勝ったら学園から出ていって欲しいんです」
「……いいだろう。まぁ君が私に勝てるとは思えないがね！」
　空蝉の君はすぐさま武器を構えて彼女に打ち込んだ。
「くっ！」
（速い……それにリーチが長い……間合いに入りにくいですね）
　空蝉の君の長い腕から繰り出される猛攻を、サントリナは二つの剣で受け流していく。
「どうした？　反撃してこないのか？　それとも出来ないのか？」
　高笑いする彼女を、サントリナは冷静に見つめる。
（隙は……そこ！）

「ぐっ！」
重心を低くし、空蝉の君の懐に入り込む。そのまま剣を振り上げるが、空蝉の君はバックステップでかろうじてその攻撃をかわした。いや、本人はかわしたと思ったが、実際には攻撃はかすっていた。額から血が流れ始める。
（くそっ……思ったよりも強い。そう簡単に勝たせてはくれないようだね……それならこちらも奥の手を使おうか）
空蝉の君の目が発光を始める。その様子を見て、コマチソウが身を乗り出した。
「サントリナ！　奴の目を見ちゃダメ！　また暗示をかけようとしてるよ！」
「なっ!?　しまっ……」
◇◆◇◆
蝉の声が耳に、頭の中にまでこだましている。四方八方霧に覆われているような、ぼやけた視界の中、いくつかのシルエットがくっきりと浮かんできた。
「サントリナ！」
「サントリナお姉ちゃん！」
「皆……」
そこにいたのは、以前私が暮らしていた町の人達。害虫に殺されてしまった人達……。
「サントリナ」
肩をポンと叩かれる。その声は、その顔は忘れられるわけがない。
「先輩……」
私をかばって死んでしまった先輩が、何故か私の隣に佇んでいた。
「サントリナ、もう戦うのは止めなさい。あなたが学園で幸せに暮らしてくれれば、私も嬉しい」
「でも、花騎士としての任務が」
「任務なんてどうでもいいの。誰もあなたの幸せを邪魔することなんて出来ないんだから」
先輩が両手を広げる。私は吸い込まれるように彼女に近付いて

行った。
「そうよ。来なさい、サントリナ」
「……ごめんなさい、先輩」
　後ろ手に隠していた剣で、私は先輩の身体を真っ二つに切り裂いた。割れた身体の中から、蝉型の害虫がその姿を現した。
「き、貴様……！」
「私は戦います！　皆を守るために！　それが先輩に教えられたことだから！」
「後悔するぞ！　お前は一生、死んだ人々や花騎士たちの亡霊を背負いながら生きるんだ！」
　視界が晴れていく。もはや迷いは無かった。
◇◆◇◆
「がはっ！　な、何故暗示が効かない!?」
　サントリナの攻撃が空蝉の君に直撃する。いつも爽やかな笑顔の彼女からは想像もつかないような、苦痛に歪んだ表情がむき出しになった。
「許さない……町の皆や先輩を弄んだあなたを、私は絶対に許さない！」
　サントリナは涙を流しながらも、攻撃の手を休めることはない。
「や、止めろ！　がは……わ、私はお前達に幸せを与えてやったんだ。ぐぁっ！　悲しい過去も忘れさせてやった。何が気に食わないんだ!?」
「私達は過去を受け継ぎ、幸せな未来を自分の手で掴み取るんです。あなたに与えられる必要なんてありません！」
「ぐぁぁっ!!」
　訓練用の剣とは言え、彼女の握力で握れば、それはもはや凶器となる。並みの人間には致命傷となるような攻撃を数十発受け、流石の空蝉の君もその場に倒れこんだ。
「が、がは……」
「空蝉の君……」
　生徒たちの顔色がみるみる青ざめていく。あの空蝉の君が負けた

という事実を、誰もが受け止められないでいた。
「私の勝ちです。さぁ、早くこの学園から去りなさい」
サントリナの剣が空蝉の君の面前に向けられる。血が滲むような激しい歯軋りの音を響かせ、空蝉の君は憎悪の表情でサントリナを睨んだ。
「こうなったら……夜叉！　羅刹！」
「はっ！」
ギャラリーの中から現れたのは、黒いおかっぱ頭の二人の少女。見た目は普通の少女のようだが、白目が赤く、異形の雰囲気を醸し出している。
「奴を殺せ！　私を助けろ！」
「御意」
自身の身体程の大きな鎌を取り出し、二人はサントリナに襲い掛かった。
「がっ……」
しかし吹き飛ばされたのは夜叉と羅刹の二人の方だった。
「コマチソウさん、エキザカムさん！」
「空蝉の君さぁ～、ルール違反は淑女としてどうなの？」
「一対一なら応援に徹していましたが、ここからは私達も参戦します」
「く……そ……」
空蝉の君は何とか立ち上がると、花騎士たちに背を向け、武道館の出口へ駆けていった。
「逃げた!?　サントリナ、奴を追って！　こいつらはあたし達が押さえておくから！」
「分かりました！　二人とも気を付けて！」
数百人の観客を飛び越えて、風のように走るサントリナ。その身体能力に驚愕する生徒たちをよそに、私もサントリナを追うことにした。
「団長さん、私も行く。生徒の避難誘導とか、出来ることはあると思うし」

「宵闇の波動！」
「ぐっ……！」
　羅刹の手から放たれた衝撃波に吹き飛ばされ、二人の花騎士は壁に身体を打ち付けた。
（凄い威力……それにあのコンビネーション……全く隙が見えない）
「ふふ……我々は共に産まれ共に生きてきた、謂わば一心同体の存在」
「愚かな人間よ、あなた達に勝ち目はありません」
　二人の必殺技、「宵闇の波動」は、その威力故に溜めの時間を要する。しかし夜叉と羅刹は、一人が必殺技を放ち、もう一人が溜めを行うことでその隙を失くしている。加えて呼吸すらピタリと揃った連係。そこにはコンマ一秒の隙も無かった。
「コマチソウ様、私達には彼女達のような連係は出来ません。ですから、それぞれの長所を活かし合うことでしか、勝利の道は無いと思います」
　そう言うと、エキザカムはコマチソウに耳打ちを始めた。
「……でもエキザカム、これ失敗したら……」
「大丈夫。私はコマチソウ様を信じていますし、コマチソウ様が私を信じて下されば」
「……うん、分かった。いっちょやってみるか！」
◇◆◇◆
（くそ……何だあの強さは……とにかく逃げなければ！　生徒達の記憶は暗示でどうにでもなる）
　まだ生徒達の残る放課後の廊下を、空蝉の君は必死に走った。注目を集めているが、もはやなりふり構っている場合では無かった。
「たぁっ！」
「なっ!?　ぐぁぁっ！」
　突如現れたサントリナが、空蝉の君を背中から切り裂いた。今握っているのは訓練用の剣ではなく真剣だ。背中がぱっくりと割れ、空蝉の君は激しい痛みにのたうち回った。

「がぁぁぁ！　や、止めてくれサントリナ！　生徒達には危害を加えない。約束する。だから見逃してくれ！」
　恥も外聞も投げ捨て、空蝉の君は頭を地面に擦り付けた。その惨めな姿に、サントリナの足は一瞬止まってしまった。
　その一瞬の間に、空蝉の君は周囲を見渡した。その血走った目に映ったのは、動揺する生徒達。そして、生徒を避難させようとするカオルの姿だった。
◇◆◇◆
「害虫、私が相手です！」
「愚かな……宵闇の波動！」
「ぐぅっ！」
　羅刹が放った衝撃波を、エキザカムは自身の必殺技で受け止めようとする。
「……たぁっ！　はぁ……はぁ……」
「ほぅ、宵闇の波動を弾きましたか。しかし一撃防いだところで無意味」
　今度は夜叉が波動を放つ。
「ぐっ！　あぁっ！」
　よろけながらも、エキザカムはその一撃も弾き飛ばした。
（おかしい……何故こんな無意味なことを……？）（それに、もう一人の花騎士は何処に？　彼女の閃光が邪魔して背後が見えない……）
「ここだよ」
「!?　な、何だこの網は!?」
「夜叉！」
　夜叉がコマチソウに捕まり動揺する羅刹。その隙にエキザカムは一気に距離を詰めた。
「厳しく行きますよ！」
　彼女の必殺技、「スウィートエイミング」が羅刹に直撃し、彼女の身体は崩壊を始めた。
「主……申し訳ありません……」
　二人を倒したことを確認すると、エキザカムはその場に倒れ込ん

だ。
「コマチソウ様、流石の速さでした」
「エキザカムこそ、良くあれを二発も防げたね」
　コマチソウはエキザカムの手をぐっと握る。
「でもまだ終わりじゃない。サントリナの援護に行かなきゃ」
◇◆◇◆
「頼む……」
「そんな約束、信じると思いますか？」
　しかし一瞬の隙があれば十分だった。床を突き破って現れた触手が、カオルの全身を拘束した。
「きゃぁっ！」
「カオルさん!?」
「おっと、動くなよサントリナ。動けばこの娘も他の生徒も死ぬぞ」
「ひ、卑怯な……」
「黙れ！　元はと言えばお前らが悪いんだ。お前らが私を否定しなければ……」
「サントリナさん！　私には構わないで！　害虫を倒して！」
「黙れぇ！」
　空蝉の君が睨むと、触手はカオルの身体をきつく締め付けた。
「ぎゃぁぁ……あぁ！」
「止めなさい！　あなたの狙いは私でしょう。他の人は関係ないはずです」
「ふふ、それもそうだな……ではまずは武器を置け」
「……」

　金属音が響く。サントリナの双剣は床に落とされた。
「サントリナさん……」
「大丈夫ですよ、カオルさん」
　心配そうに見つめるカオルに、サントリナはいつも通りの柔らかい笑顔を見せた。
「ふん、随分と余裕そうだな。ではまずは……」

空蝉の君が合図をすると、サントリナの身体に触手が纏わりついた。
「すぐに殺しはしない。私にこんな惨めな思いをさせた罰だ。じわじわとなぶり殺しにしてやる」
「まずはその細い脚を折るか、それとも目を抉ってやろうか。皮を剥ぐのも捨てがたいな……」
「あなたの悪趣味な妄想はいいですから、早くやったらどうですか?」
「……やれ」
触手がサントリナの右腕に集まる。メキメキと力が加えられ、サントリナの顔に苦痛の色が滲んだ。そして、
「ぐぅぅっ!」
バキッと鈍い音がした。触手が離れると、サントリナの右腕は曲がってはいけない方向に曲がっていた。
「サントリナさん……うぅ……ごめんなさい。私が捕まらなければ……」
「カオルさん、泣かないで下さい。あなたが悪いわけじゃありませんから。ほら、ニコ~♪ って」
冷や汗をかきながらも明るい笑みを絶やさないサントリナ。そんな彼女を、空蝉の君は冷ややかに見つめていた。
「健気なものだな。だがその笑顔もすぐ消え失せる」
「……」
「っ!?」
サントリナの睨みに、空蝉の君は思わず後ずさってしまった。
(な、なんだこの気迫は……)
人質を取り、右腕をへし折り、間違いなく有利なのは空蝉の君の方だ。しかしサントリナから放たれる気迫は、彼女を震え上がらせるのに充分なものだった。
(く、くそ……震えが止まらない……あんな小娘相手に……)
「伝説の花騎士」。復讐のために害虫を狩っていたサントリナは、その圧倒的な戦闘能力と鬼神のようなオーラから、いつしかそう呼ばれるようになっていた。

ある者は、オーラで害虫を倒したと言う。今のサントリナから放たれるオーラを見ると、それもあながち間違いではないのかも知れない。

「どうしました？　もう終わりですか？」
（そ、そうだ。今有利なのは私……奴の右腕は折ったのだし、左腕を折ればもう抵抗は出来なくなる）
「ふ、ふん……強がるな。二人の花騎士は夜叉と羅刹が足止めしているし、しばらく援軍は来ない。左腕を折れば、貴様はもう終わりだ」
「そうですか。ところで、誰かを忘れてませんか？」
「何だと……？　がぁっ！」
　必殺の団長キックが奴の頭に直撃した。いくら害虫とはいえ、不意を突けばこんなものだろう。サントリナが注意を逸らしてくれていたのも功を奏した。
「き、貴様……たかが人間風情が……」
　ピキピキと青筋を立てる空蝉の君。もはや元の美形は完全に消え去っていた。
「もういい！　見せしめに生徒達を殺してやる！　後悔しろ、花騎士、騎士団長！」
　空蝉の君が合図を送る。しかし生徒の悲鳴は聞こえてこなかった。
「な、何故だ……」
「へぇ～、これも身体の一部なのかな～？」
「!?」

「コマチソウさん、エキザカムさん！」
「おまたせしました！」
「触手は全部採集済み。生徒達もどさくさに紛れて逃がしておいたよ」
「な……な……」
（くそ……終わった……。だがこうなれば、サントリナだけでも道連れに）

そう思い背後を振り返るが、彼女の姿は無かった。
（一体どこに……）
「……これで終わりです、空蝉の君」
「!?」
突然自分の目の前に現れたサントリナに驚愕する空蝉の君。サントリナが左腕を一振りさせると、彼女の首は冷たい床の上に転がった。

「サントリナさん！　サントリナさん……」
「カオルさん……」
サントリナの折れた右腕を泣きながら擦るカオル。
「ごめんね……痛いでしょう」
「少し痛いですけど、大丈夫ですよ。それにカオルさんは悪くありませんから」
「でも……」
「それじゃあ、笑って下さい。そうすれば、この痛みもどこか行っちゃいますから♪」
ニコっと笑うサントリナ。その優しい笑顔を見て、カオルも泣きながら笑みを浮かべた。

≪その後≫
「～♪」
鼻歌を歌いながら手紙に封をするサントリナ。随分とご機嫌のようだが、何かあったのだろうか。
「あっ、団長さん。えへへ、あれからカオルさんと文通してるんですよ。学園のこととか、聞いてるだけでも楽しくなってきます」
可愛らしい笑顔を見せるサントリナには、あの学園に通う生徒と変わらないあどけなさを感じた。世が世でなければ、彼女もちゃんと学校に通えていたのかも知れない。そう思うと、胸の奥が締め付けられるようだった。

「だ、団長さん！　そんな悲しそうな目をしないで下さい。ほら、ニコ～ですよ」
　しかしサントリナだって、本当は学校に通いたいだろうに。
「そうですね……それじゃあ、害虫がいなくなって平和になったら、その時はちゃんと通いたいです。団長さんも先生になって一緒に通いましょう」
　それはまた、素敵な未来図だな。そのためには教員試験に合格しなければならないが、彼女の笑顔を見ていると頑張ってやろうという気分になった。

夏祭りと不思議な夜

「団長、祭りだぁぁぁ！」
執務室のドアが勢い良く開き、ソリダゴが元気な声を響かせた。
「近くでお祭りがあるから行こうよ！　コンボルブルスと三人で、ね？」
祭りか。楽しそうだが、仕事が貯まってしまってな……。
「ちなみに、私とコンボルブルスは浴衣を着るよ」
むっ……それは行かねばなるまい。早速準備をしよう。

街へ出てみると、屋台がたくさん出ていた。射的や型抜き、お面にたこ焼き。そんな賑やかな雰囲気の中、ただ一人清廉な空気を纏った少女が佇んでいた。
「あっ、団長さん……」
青を基調とした、涼しげな浴衣。白く長い髪は一つに結い、白いうなじを覗かせている。
息を呑むような美しさ。コンボルブルスの周りだけが、まるで一枚の絵画のように切り取られていた。
「ど、どうかな、この浴衣……似合ってる？」
最早言葉は必要ない。彼女を優しく抱き締めた。まだ幼いが、仄かに女性を感じさせる、滑らかな身体の凹凸をその手で包み込んだ。
「あぁ～！　抜け駆けはずるい！　団長、私も、私も！」
いつの間に来ていたのか、ソリダゴがぴょんぴょん跳ねて抱っこをせがんでいる。言われた通り抱き締めると、ソリダゴは珍しく恥ずかしげな表情を見せた。

「お祭りと言えば屋台！　たこ焼き食べよう、たこ焼き！　あっ、でも熱々だから直ぐには食べられないよね。……口の中べろべろになっちゃうし」
「私が冷ましてあげる」
寒色系の浴衣が似合うコンボルブルスに対して、ソリダゴは明るい

黄色の浴衣が良く似合っている。
「ふぅ～ふぅ～。はい、あ～ん」
「あ～ん……ん、いい感じに冷ましてある。流石コンボルブルス」
外見だけでなく中身も正反対な二人だが、こうして仲良くしているのを見ると、まるで姉妹のようにも見える。
「団長さんも食べる？　はい、あ～ん」
コンボルブルスがこちらにもたこ焼きを向ける。それを口で受け取ると、彼女の頬は真っ赤に染まった。
「あはは、コンボルブルスのほっぺた、りんご飴みたい……そうだ、りんご飴も食べよう！」
ソリダゴに手を引かれるコンボルブルス。何とも忙しいが、祭りの雰囲気には合っているのではないかと思った。

「見てみて、夜は花火もやるって！」
ソリダゴが花火大会の看板を指差す。
「……」
「あっ……ご、ごめん、コンボルブルス」
俯きがちのコンボルブルス。そうか、コンボルブルスは夜眠ってしまうから、花火を見たことがないのか。
「私のことは気にしないで。ソリダゴと団長さんは、二人で花火を楽しんで」
その儚げな表情が私の胸を刺す。どうにか彼女にも花火を見せてあげたい。そう思いながら歩いていると、足元の方からチリンと音がした。
「あっ、猫ちゃん……」
白い小さな猫が歩いていた。しかし、この喧騒の中で、鈴の音がはっきり聞こえたのが不思議に感じた。
「どこに行くんだろう？」
「調査してみる？」
ソリダゴのその言葉に、コンボルブルスはこくりと頷いた。

猫を追っていると路地裏に出た。日の光が遮られ、ひんやりとした空気が流れてきた。
「涼しいね、ここ」
「猫は涼しい場所が分かるらしいからね」
「にゃーお」
「わっ」
見ると、三匹程の猫がコンボルブルスの素足に頭を擦り付けていた(少し羨ましい……)。
「随分人懐こいね。飼い猫なのかな?」
コンボルブルスの小さな手が猫の頭を撫でる。猫は喉をゴロゴロ鳴らし、彼女に腹を見せた。
しかし不思議だ。路地裏に一歩足を踏み入れると、先程までの喧騒が嘘のように静かになる。そして、チリンチリンと鈴の音だけが鳴り響いている。
「ここは猫達だけの場所なのかもね。あんまり邪魔しないように、私達は早く出よう」
「にゃーお」
コンボルブルスは名残惜しそうに猫の頭を一撫でして、そのまま路地裏を後にした。

表通りに出てみると、何か様子がおかしい。人が誰一人いない。そして、
「あれ? もう夜……?」
ぽっかりと丸い月が出ている。先程まで夏の日差しが輝いていたはずなのに。それに、何故夜なのにコンボルブルスが起きているのだろう。
「何々? どういうこと~!?」
ソリダゴの元気な声が夜空にこだまする。
「コンボルブルスは大丈夫なの?」
「うん……今日は眠くならないみたい」
夜どころか、辺りが暗くなっただけで眠くなるコンボルブルスが

……一体何が起こっているのだろう。

「う～ん、分かんない！　どうして誰もいないんだろう？」

歩き回ってはみたが、あんなに賑やかだった街に人っ子一人いない。人間がいない街は、こんなにも広く寂しいものなのだなと思い知らされた。

「にゃー」

「あっ、さっきの猫ちゃん……」

気付けば周りには数十匹の猫が集まっていた。チリンと鈴の音が、寂しい街の中に響く。

「この街、こんなに猫がいたんだ」

「普段は人のいない所にいるから、気付かなかったんだろうね」

その時、乾いた音が響き、夜空がパーンと明るくなった。

「わぁ！　花火だ！」

「これが花火……こんなおっきいの初めて見た。綺麗……」

コンボルブルスの頬に涙が伝う。

「あれ……？　私、どうして泣いて……」

いつの間にか声も震えている。ソリダゴはそんな彼女の頭を撫でた。

何時間経っただろうか。時が忘れる程、花火の美しさに見とれていた。

「……はっ!?　忘れてた！　早く人を探さないと！」

『おやおや、これは珍しいお客さんですな』

不思議な声が聞こえてきた。耳ではなく、頭の中に直接響くような声が。

「ね、猫が喋ってる……」

声の主は、一匹の黒猫だった。

『まぁ、そう驚かずに。長年人間と関わっていると、言葉も解るようになるのです』

猫は優しい声で言った。

「ここはどこなの？」
『ここは貴方達の世界の裏側。我々は人目を避けて、良くこの場所に来るのです。ここは人間の世界よりも静かですから』
「それじゃあ、邪魔しちゃった？　ごめんね」
『いえいえ。それに、我々は貴方達のことを良く知っているんですよ。花騎士の方ですよね』
「そうだけど……」
『いつも街を害虫から守ってくれている方だ。少しくらい得をしても良いでしょう。花火、楽しめましたか？』
「……うん！」

『ではそろそろお別れです。またご縁があれば』
「うん。今日はありがとう」
「またね～！」
猫に手を振って、光の差す方へ歩く。ふっと身体中の力が抜け、意識が遠のいていく。
◇◆◇◆
「……はっ！」
目を覚ますと先程の路地裏だった。祭り囃子が聞こえる。戻ってきたのだ。
「夢……じゃないよね⁉」
ソリダゴも私も同じことを体験したのなら、恐らく夢ではないだろう。
「花火……綺麗だった……えへへ」
目を柔らかく閉じ、そっと微笑むコンボルブルス。そんな彼女の頭を撫でる。
「団長さん、ソリダゴ、今日のこと忘れないよ……絶対に……」
ゆっくりと目を閉じる。日が段々と沈んでいく。彼女を背中におぶり、賑やかな通りを歩いて行った。

ヘチマの夏

「う～……夏飽きたぁ……」
いきなり執務室にやってきて、とぼとぼとこちらに歩いてくるのは、花騎士のヘチマ。長い二つ結びの黒髪、緑色の着物、そしてツヤツヤの肌が美しい花騎士だ。
「もう、この暑いの飽きちゃったよ～。団長ちゃん、どうにかして～」
そう言って私の膝の上にポスンと乗っかってきた。
どうにかと言っても、私にはどうすることも出来ない。それに暑いのなら、まず身体を密着させるのを止めたらどうだ。
「って、ホントだ!? どうして団長ちゃんの膝の上に……暑くてボーっとしてたんだろうね……」
割りと重傷だな。首筋に汗もかいているようだし、もっと涼しい格好をした方が良いのではないか。
「あっ、団長ちゃん、あたしのうなじ見てたでしょ？ もうっ、好きだね、団長ちゃんも♪」
ヘチマの小さな可愛らしい指が、私の首筋を撫でる。いつの間にか私の体温も高くなり、汗が出始める。それは恐らく暑さのせいだけではないだろう。

「ま、百歩譲って暑いのは仕方ないにしても、もうちょっと楽しいことがしたいね」
未だに膝の上から降りず、脚をパタパタさせながらヘチマが言った。
夏の行事と言えば、海なんか良いんじゃないか。女性の肌も見られるのだし。
そう言うとヘチマはむっと唇を結んだ。
「むっ、団長ちゃん、それは聞き捨てならないなぁ。心外だよ」
花騎士の風呂を覗いている癖に、何を今更……。
「そっちじゃなくて！ あたしが見たいのは、見られてるとは知らずにおおっぴらになった女の子の肌！ 裸なら何でも良いってわけ

じゃないんだよ！」
う、うむ……。あまりの気迫にそう返事をすることしか出来なくなる。
「それに、海って日焼けしやすいしね。ちゃんと日焼け止め塗っておかないと……今思ったけど、女の子に日焼け止め塗るのはやってみたいかも。後でブリオニアちゃんにお願いしてみよ♪」
ブリオニア……苦労を掛けるな……。

他に夏の行事と言えば、花火なんてどうだろうか。
「いいね、いいね。それじゃあ、うちの温泉宿でやろう！　夏休み取れるでしょ？」
夏休み……懐かしい響きだ……そんなものもあったな……。
「って、休みはちゃんと取らないとダメ～！　肌にも身体にも悪いよ！」
そうは言っても、忙しいんだ……休みなんて中々取れないのだ……。
「よしっ、決めた！　団長ちゃんはうちの温泉宿で夏休みを過ごすこと！　一年の疲れを、あたしがたっぷり癒してあげる！」
ぐっと拳を握るヘチマ。いつの間にか話がすり替わっているような気もするが、ヘチマがやる気になり、私も癒されるのなら両得ではないだろうか。
◇◆◇◆
「いらっしゃい団長ちゃん！　さぁさぁ、お荷物はこちらに」
扉を開けるなり、三つ指をついて出迎えるヘチマ。しかし先程まで一緒に歩いていたではないか。
「こういうのは雰囲気が大事なの。さぁお客様、お部屋はこちらになります♪」
案内された部屋はどこか懐かしい香りがした。畳や木の匂いだろうか。まるで少年の頃に戻ったような、そんな伸び伸びとした気分になった。

「じゃあ団長ちゃん、ゆっくり体を休めてね。えいっ！」
そう言いながら、ヘチマはまた膝の上へ……働かなくていいのか、女将。
「お休みの日だからいいの～。それに、今日はお客さんもそんなにいないからね」
ぷにぷにと柔らかそうなふくらはぎをパタパタさせる彼女が愛らしく、その華奢な肩を抱き寄せた。
ふと背中に視線を感じたので振り返ると、そこにはニコニコとこちらを見つめる従業員達の姿があった。いつから見られていたのだろうか。流石にこんなイチャイチャしているのを見られるのは恥ずかし過ぎる。
「いいじゃん。見せつけてあげようよ、団長ちゃん。大丈夫、従業員の皆は分かってるから。あたし達のカ・ン・ケ・イ♡」
言われてみれば、今日は従業員とすれ違う度に「あらあら」と笑われていたような気がする。
「皆、キミのことを歓迎してるんだよ」
歓迎……？　女将と恋仲だからだろうか。
「うん。それに、団長ちゃんはその……将来的にはこの宿の……」
顔を真っ赤にして、口をもごもご動かしている。何となく言おうとしていることは分かったので、そのまま頬に軽くキスをした。
「あぅ……」

「女将、団長様、良く冷えたスイカがありますよ」
「お夕飯の支度が整いました」
「お布団は一つでよろしいですか？」
何だか、至れり尽くせりだな……。
「たまにはいいんじゃない？」
ヘチマもずっと膝の上に座って、すっかりお客様気分のようだ。
「たまにはいいの。ほら夕飯食べて、花火やりに行こう」
今日の夕飯は天ぷらか。
「ベルガモットバレーは自然豊かだからね、今日は山の幸をふんだん

に使ってみたよ」
流石新鮮な山菜は違うな。噛む度に、この山菜たちが育ってきた風景が思い浮かぶようだ。
「団長ちゃんも中々ロマンチックなこと言うね……」

口の中に贅沢な旨味を残したまま、我々は花火のために庭へ出た。薄暗い夜の庭で、青く茂った草木が月光に照らされている。その中を一つ、風が通り抜ける。
「涼しい風だね」
長い黒髪を揺らしながら、ヘチマが呟く。彼女がたなびかせたのは、いつもの着物ではなく、涼しそうな薄緑色の浴衣だった。私もお揃いの浴衣を着ている。夕飯の後に着替えさせられた。
「さて団長ちゃん、これが花火だよ。しかも知り合いの花火師に作ってもらった特注品なの」
その中の一本を手に取ってみる。形はよくあるススキ花火のようだが、紙の部分が質素な萌葱色。火を付けてみると、白いぼんやりとした輪郭の光が、夜の闇の中に広がった。
「うわぁ～、月みたいだね」
柔らかく温かみのある光は、確かに月に良く似ている。
花火を持つヘチマもまた、花火の光で照らされる。小さいが確かに女性的な凹凸を描く身体のライン、そして誰よりも綺麗な玉の肌が浮かび上がる。その絵画のような美しい光景に、私は思わず息を呑んだ。
「もう団長ちゃん、そんなに見つめないでよ～……えっ、綺麗？　も、もう～……」
顔を真っ赤にしながら、私の背中をポカポカ叩くヘチマ。そんな仕草もまた愛おしく感じる。

静かな夜の中、線香花火がパチパチ燃える音だけが鮮明に響く。先程から口数が少ないヘチマの頬も、ぼんやりと光る。
線香花火がポトリと落ちると、彼女は無言で私に抱き付いてきた。

「もうちょっとだけこうしていたいかなって……キミと一緒にいるの、ビックリする程飽きないんだよね……」
ドキドキと心臓の音が聞こえる。これはヘチマの音なのか、私の音なのか、それとも両方だろうか。
小さな身体を抱き締めると、体温が驚く程高くなっているのが分かった。しかし、その温度はどこか心地好さを感じた。ずっとこうしていたいと思わせる程に。
しかし、浴衣のヘチマをずっと夜風に晒していたら、いくら夏とは言え身体に悪いだろう。
部屋に入ろう。私がそう言うと、彼女はこくりと頷いた。
「えへへ、それじゃあ一緒に寝よう。一つしか敷いてないお布団で、ね？」
そう言えばそうだったな……果たして今日は眠れるのかどうか……。
「どっちにしても、キミのことはあたしが癒してあげるから。今までも、これからも、ずーっとね」
その愛らしい笑顔を見ていると、それだけでも疲れが癒されていくようだった。

《翌朝》
「団長ちゃん、団長ちゃん。今日は何しよっか？　ただダラダラするだけでもいいよ。キミと一緒なら、何しても飽きないからね」
ヘチマが私の腕に身体を擦り付けながら歩く。恥ずかしいが、悪い気分ではない。
「あっ、女将。昨日はお楽しみでしたね。ふふ……」
すれ違った従業員に声を掛けられる。
「こ、こら～！　女将をからかうんじゃな～い！」
怒った仕草をするヘチマも、従業員も、幸せそうな笑顔を浮かべている。
いずれこの宿で仕事をする日が来ても、彼女達となら仲良くやれそうだなと思った。

ソヨゴと夏と雪女？

（ん、あれは……？）

ソヨゴが廊下を歩いていると、不思議な格好の人物を見つけた。全身分厚い白い着物に覆われたその姿。今が冬ならばまだ気にならないが、季節は夏真っ盛りである。そんな暑い日に厚着をしているのは、ソヨゴが知っている花騎士の中には一人しかいなかった。

（ハツユキソウさんだ……）

ついつい物陰から観察してしまう。ソヨゴは人見知りで、初めて会う人間はこうしてじっくり観察する癖がある。ハツユキソウは初対面ではないが、その雪女のような姿に緊張を覚えているのだ。

（何か……疲れてる？　あっ、雪女さんだから夏が苦手なんだ）

（はぁ……夏は忙しい……皆さんに抱き付かれたり、怪談を聞かせてあげたり。夏自体は好きなんだけど……）

勘違いをしながら、ソヨゴはハツユキソウの背中を見送った。

◇◆◇◆

「団長さ～ん……」

書類の整理をしていると、蚊の鳴くような声が聞こえてきた。見るとソヨゴが、だらんと腕を伸ばして立っていた。

「暑いです～……」

そう言って抱き付いてくる。前髪が汗でぺったりと貼り付いているのが可愛らしい。

しかし抱き付くと余計暑いのではないか。

「そうですけど、今は立ってるのもキツくて」

どうせ抱き付くのならハツユキソウの方がいいのではないか。ひんやりして気持ちがいいぞ。

「やったことあるんですか……でもハツユキソウさん、何だか疲れてましたよ。やっぱり雪女さんだから夏が苦手なんですかね？」

彼女はバナナオーシャン出身だし、むしろ暑いのは好きだと言っていたが。

「え？　バナナオーシャン？　誰がですか？」

ハツユキソウが。
「え……？」
あの外見から勘違いされ易いが、ハツユキソウはバナナオーシャン生まれ、バナナオーシャン育ちなのだ。その場のノリでウィンターローズ所属にされてしまったらしいが……。
「そうなんですか……全然知らなかったです。っていうか、バナナオーシャンにも雪女さんがいるんですね」
そもそも雪女ではないのだが……。
「わたし、ハツユキソウさんのこと、全然知らないんですね。雪女さんだから話すのも緊張しちゃって。これからはちゃんと話してみたいと思います」
その時、執務室のドアがガチャリと開いた。

「団長さ～ん、ちょっとかくまって下さい～。花騎士さん達がやたらめったら抱き付いてきて……って、ソヨゴさんもいたんですね。こんにちは」
「こ、こんにちは……」
ソヨゴは挨拶だけして私の後ろに隠れてしまう。ちゃんと話すとは何だったのか。
「だってあの雪女さんですし、やっぱり緊張しちゃいますよ～……」
（……勘違いの予感！）
「……」
ハツユキソウをじっと見つめたまま、押し黙ってしまったソヨゴ。
そこで、ソヨゴがハツユキソウに抱き付きたいらしい、そう言って助け舟を出してあげた。
「!?　だ、団長さん!?」
「そ、そんな……ここでも抱き付かれるなんて……。まあソヨゴさんなら良いですけど。それに、団長さんも良いですよ……」
ではお言葉に甘えて。ソヨゴを手招きしながらハツユキソウに近付いていった。
「し、失礼します」

二人でぎゅっと抱き付く。このひんやり感が癖になりそうだ。それに身体の肉付きも素晴らしい。普段は厚着で隠れているが、こうして触ると女性らしい膨らみを随所に感じる。特に尻だ。腰から尻にかけてのラインが素晴らしい。
「団長さん、凄くセクハラ的なこと考えてませんか……？」
「はぁ～……気持ちいいです～……」
「ソヨゴさん、ぐったりしてますけど大丈夫ですか？」
夏バテだろう。ウィンターローズ出身の花騎士には良くあるんだ。
「なるほど、それなら怪談なんてどうですか？　身も心もひんやり涼しくなりますよ」
「か、怪談……あ、あんまり怖くないやつからお願いします……」
ごくりと喉を鳴らすソヨゴ。そんなに怖いのなら無理しない方がいいのではないか。別に怪談が苦手だから子供っぽいとは思わないのだし。
「そうですよ。怪談が苦手な大人はたくさんいますからね。この前の怪談会でも泣いちゃう花騎士さんがいて……」
ハツユキソウは程々にな。

「そう言えば、ハツユキソウさんはバナナオーシャン出身なんですよね？　ここより暑いでしょうし、大変じゃありませんでしたか？」
「いやいや！　むしろ夏は私の季節です。この低い体温と怪談話で、そこかしこから引っ張りだこでした」
「凄いですね～」
「まあ、ブロッサムヒルに来てから、冬の間は……邪魔者扱いでしたが……」
「……」
言葉に詰まった二人に、外に出ようかと誘ってみる。
「でもお仕事は大丈夫なんですか？」
大丈夫だ。そもそもこんな暑くては進むものも進まない。一回外でリフレッシュした方が能率が良くなるはずだ。これはこれで仕事の内なのだ。

「そ、そうなんですか……？」
◇◆◇◆
というわけで、公園にやってきた。平日の昼間だからか、のどかな空気が流れている。
木陰に座り込むと、涼しい風が花騎士達の髪を撫でた。
「ふぅ～……涼しいですね……」
「ちょっと寒くないですか？」
「え？」
ハツユキソウの感覚は常軌を逸している。基本的に我々の暖かいは彼女にとっての寒いだ。ソヨゴも気を付けるんだぞ。
「ひ、ひどいですよ団長さん～……確かに寮で同室だった人には『この部屋暑過ぎる！』って言われて出ていかれましたが……」
そんなこともあったな……それからハツユキソウはずっと一人部屋か。
「はい。寂しいですよ団長さん～、たまに遊びに来てください～」
男女間だし、そう易々と遊びには行けないだろう。騎士団の規律にも関わることだし。
「うぅ～、そうですよね……」
「……」
しょぼくれるハツユキソウを、ソヨゴは無言でじっと見つめていた。
「あっ、団長さん、あれって……」
ソヨゴが指さしたのは移動式のアイスクリーム屋だった。
「やっぱり。あのお店、最近花騎士さん達の間で人気があるんですよ。甘さが評価できるって」
それは単なるダジャレじゃないのか？
結局三人分のアイスを買ってきて、再び日陰に戻ってきた。しかしウィンターローズ出身者にとってアイスは馴染みがないのではないか。
「そんなことありませんよ。ウィンターローズでは冬にアイスを食べ

るのが好きな人が多いんです」
　確かに、以前そんなことを言っていた花騎士がいたような……。
「冬にアイスなんて……想像しただけでも凍えそうです……」
「だ、大丈夫ですかハツユキソウさん」
　ブルブルと震え出したハツユキソウに、ソヨゴがそっと抱き付く。
「あぁ……暖かい……人肌ってこんなに安心するものなんですね……」

「大丈夫ですか、ハツユキソウさん？」
「大丈夫ですけど、アイスはあまり食べられそうにないので、良かったらソヨゴさんが食べて下さい。はい、あ～ん……」
　そう言ってスプーンをソヨゴに差し向けるハツユキソウ。しかしソヨゴが恥ずかしそうにしていると、その手は直ぐに引っ込んだ。
「ご、ごめんなさい！　調子乗っちゃいました！」
「い、いえ……あむっ！」
「!?」
　ソヨゴが引っ込んだ手に持っていたスプーンに食いつく。そのままあむあむと咀嚼を始めた。
「お、美味しいですか……」
「は、はい……」
　頬を染め合う二人。何とも微笑ましい光景だ。
　……しかしおかしい。何故私が蚊帳の外なのだ。こういうのは私がやる側かやられる側のはず……何故……。
「どうかしましたか、団長さん？」
　いや、何でもない。二人が喜んでいるのなら水は差さないようにしておこう。

≪その後≫
「はぁ～……今日も一人寂しい夜が続く……」
　ハツユキソウの部屋。蝉の鳴き声が聞こえる夜に、ハツユキソウはしみじみとキノコのスープを飲んでいる。その寂しい後ろ姿は、まる

でくたびれた労働者の如し。
　そんな彼女に、今晩は一人の来客があった。
「は～い」
　ドアを控えめにノックする音に、ハツユキソウはすぐさま反応した。静かな夜には、どんな小さな音でも目立ってしまうのだ。
「夜遅くにすみません」
「ソヨゴさん。どうしたんですか？」
　白く長い三つ編みに、ぱっちりとした赤い瞳。同じウィンターローズ所属の花騎士、ソヨゴだった。
「実は……同室になるのでご挨拶に来ました」
「え……ど、同室!?」
「はい。わたしから団長さんにお願いしたんです。わたしも一人部屋だったから丁度いいなって。勿論、ハツユキソウさんが良ければ、ですけど」
「良いに決まってますよ！　大歓迎です！」
　ハツユキソウは舞い上がった。
　人付き合いが苦手なわけではないが、その極度の寒がりから、他の花騎士と同室になるのは難しいと思っていた。そんな彼女にルームメイトが出来る。これが嬉しくならないはずはなかった。
「それじゃあ、詳しい日付などはまた相談しましょう。お休みなさい」
「お休みなさい」
　ぱたりと扉が閉まる。その瞬間、ハツユキソウはその愛くるしい顔を目一杯緩ませた。
「ルームメイトか～、えへ……えへへ……」
　その夜、鼻歌がうるさいと隣の花騎士から怒られたとかいないとか……。

クコと真昼の夢

「団長、汗、びっしょり。水分補給、必須。クコ、水筒、持参」
クコから手渡された水筒の水を一口ゴクリと飲んだ。
熱く灼けた砂浜の上を、白いワンピースのクコと手を繋いで歩いている。遠くには水平線が揺らめいているのが見える。
「えへへ……幸福。団長と一緒、探検、楽しい♪」
麦わら帽子の影から見えるクコの笑顔。夏の空の下、彼女と二人きりでいられることが、私にもとても幸福に感じた。
◇◆◇◆
「クコ、探検、希望。団長、同伴、所望」
とクコが言い出したのは今朝のことだった。
探検とは？　私が尋ねるとクコは嬉しそうに語り出した。
「夏、探検の季節。海、青空、蜃気楼、砂浜。冒険心、くすぐる」
言われてみると確かに、そんな単語を聞くと子供のようにワクワクしてくる。クコは調査隊員なのだし尚更だろう。
「あい、ワクワク……クコ、高揚。冒険、クコ達、待ってる！」
それはソリダゴの真似だろうか。しかしいつもの数倍テンションの高いクコを見ていると、彼女の希望を叶えてあげたいと思わせられる。
よし、では行くか。仕事を途中で切り上げて支度を始めた。
「団長！　クコ、準備万端。いつでも出発、可能！」
扉を開けて入ってきたクコの姿を見て驚愕した。白いワンピースに麦わら帽子。これが夏の妖精か。
「？」
麦わらの上からポンと頭を撫でた私に、クコは最初不思議そうな顔を見せていたが、やがて嬉しそうに私の腹を撫で返してきた。
「調査隊、出発！」
隊といっても二人だけだがな。
「あい、二人。二人きり……」

クコはそう言って私に身体をすり寄せてきた。
「トリトニア調査隊、皆大好き。一緒にいる、幸福……でも団長、特別。二人、居たい、いつまでも……」
クコの体温が伝わってくる。夏の熱さの中でも、彼女の体温は不快ではない。むしろ心地好さすら感じる。
小さな手を握る。どちらともなく心臓の音がトクンと鳴った。

港都市ヨーテホルク。ブロッサムヒルで唯一海に面したこの地で、我々は一体何を見つけるのだろうか。
「あい、団長。アイスキャンディー」
クコはいつの間にか出店に寄っていたらしい。しかしこれでは調査ではなく買い食いだな。
「否。夏、アイス、重要……超重要」
まあ確かに重要ではあるが……。
「潮の匂い、クコ、これ好き」
アイスキャンディーを頬張りながら、二人並んで歩く。
頬に当たる海風。波の音も聞こえてきた。海が近い。
「海、特別。クコ、ブロッサムヒル、来るまで、海、知識無し」
トリトニア調査隊は湖畔調査が主だからな。
「あい。湖、好き。でも海、湖、違う。どちらも違って、どちらも好き」

「砂浜！」
クコがその白い素足を晒し、砂浜の上を駆けていく。
「熱い！　えへへ、熱い」
砂浜で踊るクコは、白い服も相まって天使のようだった。
「観光客、たくさん。賑やか」
この暑い季節だと、観光客の足も自然と水辺に向かうのだろう。しかし春庭で海と言えば、バナナオーシャンのラカタンビーチかプラタノだろう。
「クコ、知識無し」
機会があれば一緒に行こう。ラカタンビーチならキャロットに、プ

ラタノならベッセラに言えば手配してくれるはずだ。
「あい♪　団長と一緒、嬉しい、とても。旅行……新婚旅行、所望」
　そうだな。新婚旅行はクコの行きたい所に行こう。二人ならどこだって楽しいはずだ。

「団長、向こう、島、存在。クコ、行ってみたい」
　クコが指差したのは水平線に浮かぶ小さな離島だった。そこまで離れているわけではないが、泳いで行くのは相当骨が折れそうだ。
「ボート、貸し出し」
　なるほど、これはボートを漕いでクコにかっこ良い所を見せるチャンスだな。
　……
　……
　…

「団長……平気？」
　平気だ。そう言いながらも呼吸が全く整わない。シャツも汗でびっしょり貼り付いている。数分漕いだだけで息が上がってしまった。体力には自信があったのだが、ボート漕ぎがここまでキツイものだとは……。
「団長、交代。クコ、漕ぐ」
　そう言って櫂を握ったクコ。その櫂捌きは見事と言う他無かった。流石水上のプロ……私とは技術が段違いだ。
「コツ、必要。団長も、慣れれば、クコと同じ、可能」
　ならば次来た時には教えて貰うか。そう言うと、クコの顔はぱぁっと明るくなった。
「あい！　クコ、教える。何度でも」
　また来られることが嬉しいのだろうか。クコは夏の日差しよりも眩しい笑顔を輝かせていた。

　やがて浜辺に西日が差していく。賑やかだった海水浴場も、人がまばらになっていく。

「そろそろ、帰還？」
クコの膝に頭を預けながら海を見ていると、何だか無性に寂しくなってくる。
だがまた来られるのだ。明日になれば、また海は人で溢れるだろう。夏が終わっても来年になれば、またクコと一緒に来られる。

渚には語られなかった物語が眠っているんだ
熱く灼けた砂浜を歩く
真昼の夢を探しに行こうか
渚にて二人は冬を待つ
二人だけで季節を越えようか
麦わらを目深にかぶった
可愛いあの娘が微笑みかけた

帰ろう。そう言うとクコは手を繋いできた。
「あい。帰還。帰還しても、団長と一緒。いつまでも……」
結局、探索とは名ばかりのデートになってしまった。しかしそんなことは些細なことだ。クコと一緒なら、どこに出掛けてもどう過ごしても楽しい。
夏が過ぎて冬が来ても、いつまでも一緒だ。そう思うと、いつもの日々も幸せに感じた。

リクニスとお月見

「団長さん、こっちの書類はまとめておきました」
　テキパキと仕事を片付けてくれるリクニスに、感謝と申し訳なさを感じる。
「大丈夫ですよ。早く片付けちゃいましょう」
　暑くもなく寒くもない丁度良い気温になったからか、害虫が活発化、一部花騎士も活発化し、その対処に追われていたのだ。気付いた時には執務室は承認待ちの書類や書きかけの報告書で埋もれていた。そこにたまたま訪れたリクニスが手伝ってくれることになり、今に至ったわけだ。
「ふぅ～……大体は終わりましたね」
　すまぬ……すまぬ……。
「あ、謝らないで下さい。団長さんにはいつもお世話になってますし、そのお礼ですよ」
　その笑顔の明るさに涙が出そうになる。今度お礼をさせて欲しいと言うと、リクニスは顔を赤らめた。
「それじゃあ、今お礼をして貰っても良いですか？」

「団長さん……用意出来ました」
　こちらも準備万端だ。ぼんやりと照らされたリクニスの顔は、大きなソレを見上げる。
「うわぁ……凄く大きくなってますねぇ……」
　うっとりとした声をあげるリクニス。確かに、いつもより大きいな。
「それじゃあ、始めましょう……お月見を」
　忙し過ぎて忘れていたが、今日はお月見だ。まん丸の満月が夜を薄明かりで染めている。
　中庭にシートを敷いて、リクニスと二人で座る。シートの上にはリクニスの作った団子にちらし寿司、そして酒が置かれている。
　以前は見た目のせいで酒を買えなかったらしいが、今回は大丈夫

だったのだろうか。
「そうなんです！　今回は買えたんですよ。私も大人っぽくなってるんでしょうか」
　言われてリクニスを見る。ぱっちりとした瞳に柔らかそうな頬。短く切り揃えられた赤髪は、彼女の明るさを存分に表している。そして小さな身体、少女のように細く短い手足、薄い胸……うむ、どう考えても大人には見えない。
　おそらく店の人がリクニスが花騎士だと知っていたから売ってくれたのだろう。とは本人には言わず、取り敢えず頷いておいた。

「団長さん、お酌しますね」
　徳利を手にしたリクニスは、こちらにお猪口を持たせて酒を注いでくれた。
「えへへ、遊女さんはこんな感じでお仕事してるんですかね」
　そうだなとはぐらかす。
　リクニスは幼い頃に母親を亡くし、桃源郷の遊女達に育てられたらしい。しかし遊女達は彼女に仕事の内容を教えていない。純真なリクニスへの配慮だろうし、私から教えるのは控えておく。
「そう言えば、遊女さん達は満月の夜は忙しくなるって言ってました。狼男が出るんですって」
　なるほど……。
「狼男なんて本当にいるんですねぇ……団長さんは見たことありますか？」
　実は私が狼男かも知れないぞ。どすの効いた声でそう脅すが、リクニスはにこにこと笑ったままだった。
「団長さんは狼男じゃないですよ～。優しいですから」
　そんなことはないぞ。男は狼なのよ、気を付けなさいとよく言うではないか。いくら優しい人間に見えても、心の中には狼の牙を持っているものだ。
「団長さんもそうなんですか……？」
　そうだ。そう言ってリクニスを羽交い締めにする。

「だ、団長さん!?　も、もう……止めて下さい……えへへ」
あまり抵抗してこないのを見ると、じゃれているだけなのが分かったのだろう。
しかしこの柔らかい肌、着物が乱れてチラリと見える太もも……まずい、本当に狼男になりそうだ。
「も、もう、止めて下さいったら」
途中からただのくすぐりになっていた。手を放すとリクニスは荒い息を吐く。笑い疲れたようだ。
「団長さんったら、実は凶暴なんですね……」
そうだ。これから私に会う時は注意した方がいいぞ。
「はい！　お師様にも言っておきます！」
いや、ナデシコには出来れば言わないで欲しい……。
「えへへ」
夜空の下、二人で笑い合った。

「……少し肌寒くなってきましたね」
言われてみればもう9月、寒さが顔を覗かせる頃だ。ぶるっと身体を震わせたリクニスに、脱いだ上着を掛けようとする。
「駄目ですよ。団長さんが風邪引いちゃいます」
大丈夫だと強がってみせる。正直かなり寒いし、全く大丈夫ではないのだが……。
「そういうことなら……」
「えいっ」と掛け声を出して、リクニスはその小さな身体を私に預けてきた。
「これなら二人とも暖かくなれますね」
確かに、リクニスが抱き付いている辺りから、身体の芯までじんわりと暖かくなるようだ。
リクニスは体温が高い。普段炎属性の技を使っているからなのか分からないが、ポカポカとまるで太陽の日差しのような温かさを感じる。
しかし今の暖かさはそれだけではないような気がする。見下ろす

と、彼女は瞳をウトウトと閉じたり開いたりを繰り返していた。
「暖かくなったら、何だか眠くなってきました……」

「すみません、団長さん……」
睡魔に襲われたリクニスを背負い、月明かりの中を歩く。今日が満月で良かった。足元まで良く見えるので転ぶ心配がない。それにリクニスの顔も良く見える。
「団長さん、今日は楽しかったです。またお月見しましょう、来年も、その次もずーっと」
そうだな。そしていつかリクニスと一緒に酒を飲めるようになりたい。そう言っても返答が無かったが、やがてすぅすぅと吐息が聞こえてきた。
リクニスを送り届けた後、楽しかった月見の名残に浸りながら、一人帰路に就いたのだった。夜を一人うろつく様を、まるで狼男のようだなと思いながら。

翌日、団長がリクニスを襲い誘拐したという噂が流れるのだが、それはまた別のお話。

Christmas of Santolina

「はぁ～……」
どこまでも青く続く寒空の元、冷たい大地に腰を下ろした少女は、かじかんだ指に白い息を吐きかけた。
私も彼女の隣に座る。月明かりがぼんやりと少女の顔を照らす。サントリナのオレンジ色の瞳は、暗闇の中に美しく輝いていた。
「団長さん、今日は付き合って貰ってありがとうございます」
気にしなくてもいい、これも団長の仕事なのだから。
「でも……今日はクリスマスですし、団長さんと過ごしたい花騎士さんもたくさんいるはずです。彼女達にも申し訳ないです……」
12月24日、クリスマス。多くの人々は家族や恋人や友達、自分の大切な人々と夜を過ごす。しかし害虫にはそんなことは関係ない。当然、街を守る者も必要となる。
クリスマスの日に夜勤など、普通ならやりたくないと思うが、サントリナは率先して就いてくれた。
サントリナこそ友人が多いのだし、今晩は彼女達と過ごしたかったのではないか。そう訊くと、
「私は……皆の笑顔を見ていると、自然と戦いの場に赴いてしまうんです。だから、任務に就いていた方が落ち着くんです」
そう言って寂しそうな笑顔を見せた。

サントリナが以前住んでいた街は害虫の襲撃を受け、彼女はそこで親や友人、親しかった人々を失った。
そのため、彼女は人を守ろうとする意志が花騎士の中でも特に強い。まるで何かに憑かれているように、自ら戦いに赴いている。
しかし、私にはそれが悲しいことのように思えた。彼女は誰よりも優しいから。
もし彼女の街に害虫が現れなければ、もし世界が平和なら、サントリナは剣の使い方も知らない、普通の女の子でいられたはずだ。大切な人々に囲まれ、常に笑顔でいられたはずだ。

花騎士とは悲しい職業だ。どれだけ害虫を倒しても終わりが見えない。精神をすり減らせても、血反吐を吐いてでも、人々を守るために戦わねばならない。
特に心優しい花騎士は、その精神的・肉体的な重荷に耐えられず病んでしまう者も多い。
一番近くで彼女達を見守ってきた私には、その気持ちは痛いくらいに分かる。
サントリナは、私が今まで見た中でも最も優しい花騎士だと言ってもいい。
悲しい運命の歯車が噛み合い、彼女はこうして花騎士として戦っている。私にはそれがどうしても悔やまれる。

「団長さん？」
そんな考え事をしていると、いつの間にかサントリナの大きな瞳が私を見つめていた。
「何か悩み事ですか？」
あどけない彼女の顔を見ていると、どうしても本音を隠すことが出来なくなる。
花騎士を辞めるつもりはないか。一人の女性として生きる気はないか。
こんなことを訊くのは、騎士団長として最低だということは分かっている。それでも私は一人の人間として、サントリナという人間を愛してしまった。戦いから遠ざけたくなる程に。
それを聞き、サントリナは一瞬目を見開いたが、直ぐに笑顔を取り戻した。
しばらくの無言。静かな夜の闇の中に、サントリナの心臓音だけが聞こえてくる。トクントクンと、規則正しく穏やかな心臓音だ。その音を聞いていると、私は何故か安心出来るのだった。
交替の花騎士が来るまで、私もサントリナも口を開くことは無かった。しかしそこには気まずさは微塵もない。口に出すと消えてしまうような、脆く繊細な優しさだけが二人を包んでいた。

翌日、サントリナから呼び出され、イルミネーションの海の中で彼女を待っていた。
浮わついた空気の中に現れた彼女は、何故かいつもと同じ戦闘用の服を身に纏っていた。表情も凛々しく、これからデートに行こうとする女性には到底見えない。
「団長さん、今日まで付き合わせてしまってすみません。でも、団長さんに見て欲しいんです。私を……サントリナを」

サントリナが訪れたのは街外れの小さな教会だった。サントリナが顔を覗かせると、少年少女達が一斉に彼女に抱き付いてきた。
「皆、良い子にしてましたか？　そんな皆のために、サントリナがプレゼントを貰ってきましたよ」
メリークリスマス。一人一人と目を合わせ、サントリナは本やおもちゃを彼らに手渡していく。
「サンタさんは忙しいですからね。代わりに花騎士と騎士団長がプレゼントを運んでくるんです。そうですよね、団長さん？」
咄嗟に頷くと、子供達の笑顔はこちらにも向けられた。

「団長さん、ありがとうございました。いつもは私一人で来ているんですが、団長さんが来てくれてあの子達も嬉しそうでした」
彼らは……恐らく孤児だろう。
「はい……親に捨てられた子、親を亡くしてしまった子。そんな子供達をあの教会が引き取っているんです」
サントリナの笑顔が青い月明かりに照らされ、寂しく輝いている。
やはりサントリナは優しいな。思った通りのことを口に出したが、彼女は首をぶんぶんと振ってそれを否定した。
「優しくなんてないんです。あの子達は……昔の私だから……」
「あの時の私は無力で……悔しくて、悲しくて、憎くて……あの子達もきっと同じです。だから、ただ見ていることなんて出来なくて……」

震える彼女の肩を抱き締める。彼女の頬が、髪が、背中が、手のひらにやけに冷たい。やがて、白い雪が降ってきた。
「罪滅ぼしなのかも知れません。たくさんの、守れなかった人々への。だから私は戦うのを止めるわけにはいかない。ごめんなさい、団長さん」
誰よりも優しい花騎士の目には、いつの間にか涙が溢れていた。
「団長さんは私のこと、花騎士としてだけじゃなくて、一人の人間として愛してくれた。昨日の会話でそれが分かって、とっても嬉しかったんです。それだけで私は充分です」
泣きながら笑う彼女が痛々しく感じる。
「誰も悲しまなくていい世界を作りたい。サントリナは、そんな夢のために戦います。これからもずっと」
それならば、と私も自分の夢を語った。
私の夢もサントリナと同じだ。誰も悲しまない世界、そして君が戦わなくてもいい世界。
「私が……？」
唖然とするサントリナの手を取り、『クリスマスプレゼント』をその細い薬指に嵌めた。
「だ、団長さん!?　これって……」
誓いの指輪。一番大切な人へ贈る、愛と信頼の証。

サントリナ、一緒に生きよう。
これからも辛く苦しいことがあるだろうが、二人で一緒に乗り越えていきたい。
花騎士のサントリナも、一人の人間としてのサントリナも、私が支えていきたい。
「団長さん……うぅ……」
泣き崩れるサントリナ。彼女の頭に積もった雪を振り払い、彼女の華奢な身体を抱き締めた。
「嬉しいです。私もあなたのことが好きです……大好きです」
頬に伝わる涙が温かい。

子供のようにクシャクシャに泣きじゃくる彼女に、そっと唇を重ね合わせた。
「えへへ……これからもずっと宜しくお願いします……あなた」
聖なる日に二人は永遠を誓った。
死が二人を別つ時まで、我々はずっと一緒だ。